古代・中世の鋳鉄鋳物

五十川　伸矢

はじめに
1　古代・中世の鋳鉄鋳物資料
2　鋳鉄鋳物の生産工房と生産の変遷
おわりに

論文要旨

鋳鉄鋳物は，こわれると地金として再利用されるため，資料数は少ないが，古代・中世の鍋釜について消費遺跡出土品・生産遺跡出土鋳型・社寺所蔵伝世品の資料を集成した。これらは，羽釜・鍋A・鍋B・鍋C・鍋Ⅰ・鉄鉢などに大別でき，9世紀～16世紀の間の各器種の形態変化を検討した。また，古代には羽釜と鍋Ⅰが存在し，中世を通じて羽釜・鍋A・鍋Cが生産・消費されたが，鍋Bは14世紀に出現し，次第に鍋の主体を占めるにいたるという，器種構成上の変化がある。また，地域によって異なった器種が用いられた。まず，畿内を中心とする地方では，羽釜・鍋A・鍋Bが併用されたが，その他の西日本の各地では，鍋A・鍋Bが主要な器種であった。一方，東日本では中世を通じて鍋Cが主要な煮沸形態であり，西日本では青銅で作る仏具も，ここでは鉄仏や鉄鉢のように鋳鉄で製作されることもあった。また，近畿地方の湯立て神事に使われた伝世品の湯釜を，装飾・形態・銘文などによって型式分類すると，河内・大和・山城などの各国の鋳造工人の製品として峻別できた。その流通圏は中世の後半では，一国単位程度の範囲である。

こうした鋳鉄鋳物を生産したのは，中世には「鋳物師」と呼ばれる工人であった。鋳造遺跡の調査成果から，銅鉄兼業の生産形態をとるものが多かったことが想定できる。また，生産工房は，古代には製鉄工房に寄生する形態をとるが，中世には鋳物砂の産地周辺に立地する場合が多い。中世後半には都市の周縁に立地するものも現われた。生産に必要な固定資本の大きさから考えて，商業的遍歴はありえても，移動的操業は少なかったものと推定できる。

はじめに

これまでの日本歴史時代の鋳物生産の研究において取り上げられてきた遺物は，仏像，梵鐘，鏡，磬などを中心とする青銅鋳物であった。このうち，故坪井良平氏は，梵鐘の研究に一生を捧げ，その型式変遷や地域性を明らかにするとともに，全国各地の梵鐘製作にかかわった鋳造工人の本拠を解明するなど，前人未踏のじつに大きな成果を生み出された［坪井良平1939・1947・1970］。一方，鋳鉄鋳物に関しては，鉄鉢の金石学的研究［篠崎1941b・1949］，茶湯釜の美術史的研究［鈴木1973］，鋳鉄仏の美術史的研究［佐藤1987］，そして，越田賢一郎による北海道の鉄鍋の研究［越田1984］などを数えるのみであり，鍋釜の本格的分析はほとんど進められていないのが現状である。

そこで，本稿では，まず古代・中世の羽釜・鍋・鉄鉢といった鋳鉄鋳物資料を集成して，これを整理することからはじめたい。資料の大半は，青銅鋳物と比較すれば赤錆だらけの見栄えのしない器物であるが，遺跡出土資料はもとより，これに鋳造遺跡出土鋳型を加え，さらにこれまで美術工芸や考古学の両分野から検討されたことのない伝世資料も登場させて，その型式変遷や地域性について考察する。そして，こうした作業によって，古代・中世の主要な鋳鉄製煮炊用具の変遷と地域性を明らかにしたい。また，青銅鋳物の銘文や文献資料にはあらわれない地域の鋳物生産集団の生産活動をも，流かび上がらせることができるのではないかと考える。

さらに，最近の遺跡調査によって続々と発見されている鋳造遺跡の調査成果をもとに，古代・中世の鋳鉄鋳物を生産した鋳造工房の立地や操業形態を検討し，その変遷について検討したい。また，こうした鋳物生産にあたった工人についても，文献史料，絵画資料などを活用して，古代・中世の鋳鉄鋳物生産の特徴を考えてみたいと思う。そして最後に，まとめとして，古代・中世の鋳鉄鋳物と生産工房の時代的変遷について考察する。

1　鋳鉄鋳物

すでに「鋳鉄鋳物」という名称を連発したが，「鋳鉄」すなわち「約2％以上の炭素を含んだ鉄系材料」を素材にした鋳物という意味で使うこととする。これに対して，青銅を主体とする鋳物を「青銅鋳物」と呼ぶ。本稿では，「鋳銅製」という語は使わない。「鋳銅」という素材名は，鋳物用語にはないからである。

本稿では，古代以降，17世紀ごろまでのものと考えられる鋳鉄鋳物資料を中心に，鋳物生産を考えることとする。ただし，資料が総体として少ないので，また系列関係などを確認するために，17世紀以降の鋳鉄鋳物にも加勢してもらうことにする。また，北海道の資料は，越田賢一郎の教示をうけた。以上の鋳鉄鋳物に関するデータは，稿末に鋳鉄鋳物資料の一覧表を掲げ，出土地，所在地，参考文献などについて列記した。本文中では重要なものを除いて，いちいち出典などにふれないので，これを参照されたい。そのほか，鋳鉄鋳物・青銅鋳物を生産した歴史時代の鋳造

工房や作業場の遺跡に関しては，鋳造遺跡研究会編「鋳造遺跡一覧」[鋳造遺跡研 1991 pp.32-84]を参照されたい。

2　鋳鉄鋳物の伝世品

紀年銘をもち，各地の社寺に伝世している鋳鉄鋳物の資料集成をおこなうにあたっては，金石学の成果に負うところが大きい。とくに，木崎愛吉『大日本金石史』(1921年)，佐野英山『国分日本金石年表』(1924年)，土井實『奈良県史』第16巻金石文編(上)(1985年)，巽三郎・愛甲昇寛『紀伊國金石文集成』（1974年）のほか，故天岸正男氏の研究[(1)]にお世話になった。鋳鉄鋳物の銘文については，岐阜県不破郡垂水町真禅院所蔵の塔（p.7右下），大和西大寺所蔵の宝塔などに陰刻銘があるが，青銅に比較して硬い鋳鉄の表面を削って銘を入れることは，ごくごくまれなものと考えてよい。本稿で取り扱った資料に付された銘文はすべて陽鋳で，追刻とみられる陰刻銘は，まったくないため，それらは鋳型を製作した時につけられたものと考えてよい。

3　用語と実測図

本稿で使用する鋳造技術に関する用語については，鹿取一男『美術鋳物』（1942年）を参考にしつつ，基本的に石野亨『鋳造　技術の源流と歴史』(1977年）の用語解説（pp.337-344）と日本鋳物協会編『図解鋳物用語辞典』（1976年）に従ったが，とくに必要な場合は，本文中もしくは註で解説した。そのほか，用語の問題についても，注意を要する場合は解説した。とくに「鋳造工人」と「鋳物師」，「(鋳造）工房」と「作業場」は，慣用ではほぼ同義語とみなされることもあるが，本稿ではそれぞれ使い分けた。

なお，挿図に示した伝世品の鋳鉄鋳物の実測図は，関係資料から作成した概念図（断面図のないもの）をのぞき，すべて筆者が現物にあたって作成したものである。遺跡出土品の実測図の出典については，稿末の鋳鉄鋳物資料一覧を参照されたい。また，図中の外郭線以外の太線は「鋳張り」，すなわち「鋳型の合わせ目にあたる個所」を示しており，鋳造技術の一端がわかるように配慮した。

1　古代・中世の鋳鉄鋳物資料

（1）　鋳鉄鋳物の性格

1　鋳鉄鋳物と青銅鋳物

鋳鉄鋳物には，羽釜・鍋という通常の煮炊に使用される器物が，そのほとんどを占めている。そのほか，船，梵鐘，炉，仏像，塔，灯籠といったやや特殊なものもあるが，こうした仏具や神具は大量に生産されたものではない。基本的に，畿内を中心とする目でながめた場合，鋳鉄鋳物は「一般鋳物」と呼ばれる実用本位の器物であり，形状は単純で，引形を用いて鋳型を製作するものが多い。また，青銅鋳物にくらべて装飾性は少なく，伝世品を除けば銘文をもつものは，あまりない。そして，できばえよりも実用性がおもんじられ，大量生産を基本とし，需要者は不特

定多数の人々である。

これに対して，青銅鋳物は「美術鋳物」と呼ばれるものが多く，ほとんどが宗教的器物となっている。たとえば，梵鐘，鏡，雲板，六器，磬，擬宝珠，密教法具などがそれである。ただし，本来青銅で作られる器物が鋳鉄で作られている場合や，その逆の場合もまれにあり，これも本稿の分析対象にすることとした。青銅鋳物は，製作にあたって他の手工業関係の工人，たとえば原型作りの仏師などとの連携が必要な場合もあり，複雑な形状，装飾性の高さを特徴とし，鋳型製作の技術が高いものと考えてよい。そして，なによりも仕上がりのよさが要求される。当然のことながら，需要者は寺社を中心とする上層階級である。もちろん，梵鐘の改鋳はしばしばみうけられるが，火災など不慮の事故によるもので，破損した後，新たな製品の地金として再利用することを前提として製作しているのではない。

2　貸鍋・貸釜制度

富山・石川の両県においては，かつて「貸鍋・貸釜制度」と呼ばれる興味深い習俗があった。富山県礪波においては，「ナベヤ」と呼ばれる商売があり，春に近隣の農家をまわって鍋釜を貸し付け，秋に損料を主として米で徴収し，破損品は回収の後，鋳掛け屋にまわして再生するというものであった［本庄1976］。鍋釜の仕入れ値は，3年の損料で元がとれたという。また，伝統的鋳物生産地であった能登中居には，数多くの貸鍋帳・貸釜帳が残されている［長谷1989］。つまり，たとえ鍋釜を購入したとしても，破損すれば地金として，相応の価格で回収されるわけであるから，現実的には貸しているようなものなのである。この制度は，鋳鉄鋳物の本質をみごとに利用したものというべきであろう。なお，蛇足ながら，鍬・鋤といった鍛冶製品の場合にも，新潟県東頸城郡・中頸城郡・西頸城郡の一帯では，「貸鍬制度」と呼ばれる習俗があったという［市川1935，大嶋1970・1977］。このように，鋳造生産と鍛造生産にかかわる金属製品には，共通の流通形態がみられるのである。

3　資料と残存状況

このように，鋳鉄鋳物は青銅鋳物とくらべて格段に錆やすく，破損したらすぐに新しい製品の材料として回収作業がおこなわれるという性格をもっている。そのため，残存する遺品の数が著しく少なく，青銅鋳物の場合，慶長年間以前の現存する梵鐘だけでも約600点あるのに対して，考古学的遺物として様々な観点から検討しうる鋳鉄鋳物の鍋釜の出土品，伝世品は，総計しても150点余りと僅少である。また，梵鐘には，もとの寺から大きく移動して，数奇な運命をたどっているものも多い［坪井良平1965］。しかし，鋳鉄鋳物には，あまり大きく移動したものがないことから，こうした鋳鉄鋳物の製品は，ごくごく特殊なものを除けば，製作のコストも低く，壊れればすぐ改鋳され，青銅鋳物ほど大切にされなかったものと考える。また，残存状況には別な条件もある。まず，東国では遺骸を埋葬する際，頭部に鍋をかぶせるという風習があるため，資料の報告例が比較的みうけられる。また，羽釜の伝世品は「湯立て」と呼ばれる神事のさかんであった近畿地方中心に多く遺存している。このほか，破損品の回収活動がよくおこなわれた地域と

そうでない地域もあるらしい。たとえば，北海道において鉄鍋の出土が多く，江戸のような大都市では，それがきわめて少ないのは，そうした理由によるものではないかと考えられるのである。(2)

以上のように，現在みる残存数は，上で述べたような理由で数少ないうえに，その残存状況は，種々の条件によって規定されているわけであるから，出土量に鋳鉄鋳物の普及度がそのまま反映されていると速断することは危険である。

4　鋳鉄鋳物の名称

鍋釜と一般によばれている古代・中世の鋳鉄鋳物に関しては，その資料の形状から，鍔のあるものを「羽釜」，鍔のないものを「鍋」と呼ぶことにする。さらに鍋については，以下のように，鍋A，鍋B，鍋C，鍋Ⅰと細分し，小破片で分別不能のものについては，単に「鍋」と表記することにする（図1）。

鍋A　口縁に蓋受けの屈曲のつく形態のもの。片口のつくものもある。

鍋B　弦をつけるための穴のあいた吊耳部分を口縁に付加している形態のもの。片口のつくものもある。底部に短い三足がつく。

鍋C　内側に吊すための耳のつく形態。「内耳鍋」と呼ばれている。

鍋Ⅰ　口縁がまっすぐ立ち上がる形態のもの。古代の鍋であり，三脚のつくものがある。

このほか，一般に「鉄鉢」あるいは「仏餉鉢」と呼ばれ，東北地方を中心に分布している器物は，鍋状の器形をしているが，やや性格を異にするものと考えられ，また類似する青銅製品もあるため，「鉄鉢」と呼ぶこととする。

なお，稿末の鋳鉄鋳物一覧表では，銘文のあるものは，その記載に従った名称を記しておいたが，以上の分類と銘文に記された器の名称とは，必ずしも一致しない。その名称には，歴史性，地域性がからんでいるようである。鍋と釜の名称の歴史的変遷については多くの検討が必要であり，なおかつそこには重要な問題がふくまれているため，今後の課題としたい。

（2）　古代の鋳鉄鋳物資料

古代の鋳鉄鋳物の遺跡出土品は極端に少なく，伝世品の確実なものは皆無である。これまで，奈良・平安時代の寺院資財帳に記載された鉄釜などから，鋳鉄鋳物の煮炊容器の存在が推定されていた（表1）［鈴木1973p.25，村上1985］。しかし，それを補完するものとして鋳造遺跡出土の鋳型や土製品があり，羽釜と鍋Ⅰの存在が判明しつつある（図2・3）。

1　古代の羽釜（図2）

滋賀県栗太郡栗東町中村遺跡，富山県射水郡小杉町綿打池遺跡・同町上野南ⅡB遺跡・富山市三熊内山窯跡など，射水丘陵に点在する鋳造遺跡などから，9世紀を中心とする時代の羽釜の鋳型が出土している。その外型から推定できる上半の形態は，肩部が内傾し短く直立する口縁部をもっている。また下半は丸い形態ではないかと推定できる。この鋳型の場合，鍔の下端で鋳型を合わせており，遺跡出土品・伝世品のすべての羽釜において，ここに鋳張りを確認できる。また，

羽　釜

鍋　A

鍋　B

鍋　C

鍋　I

鉄　鉢

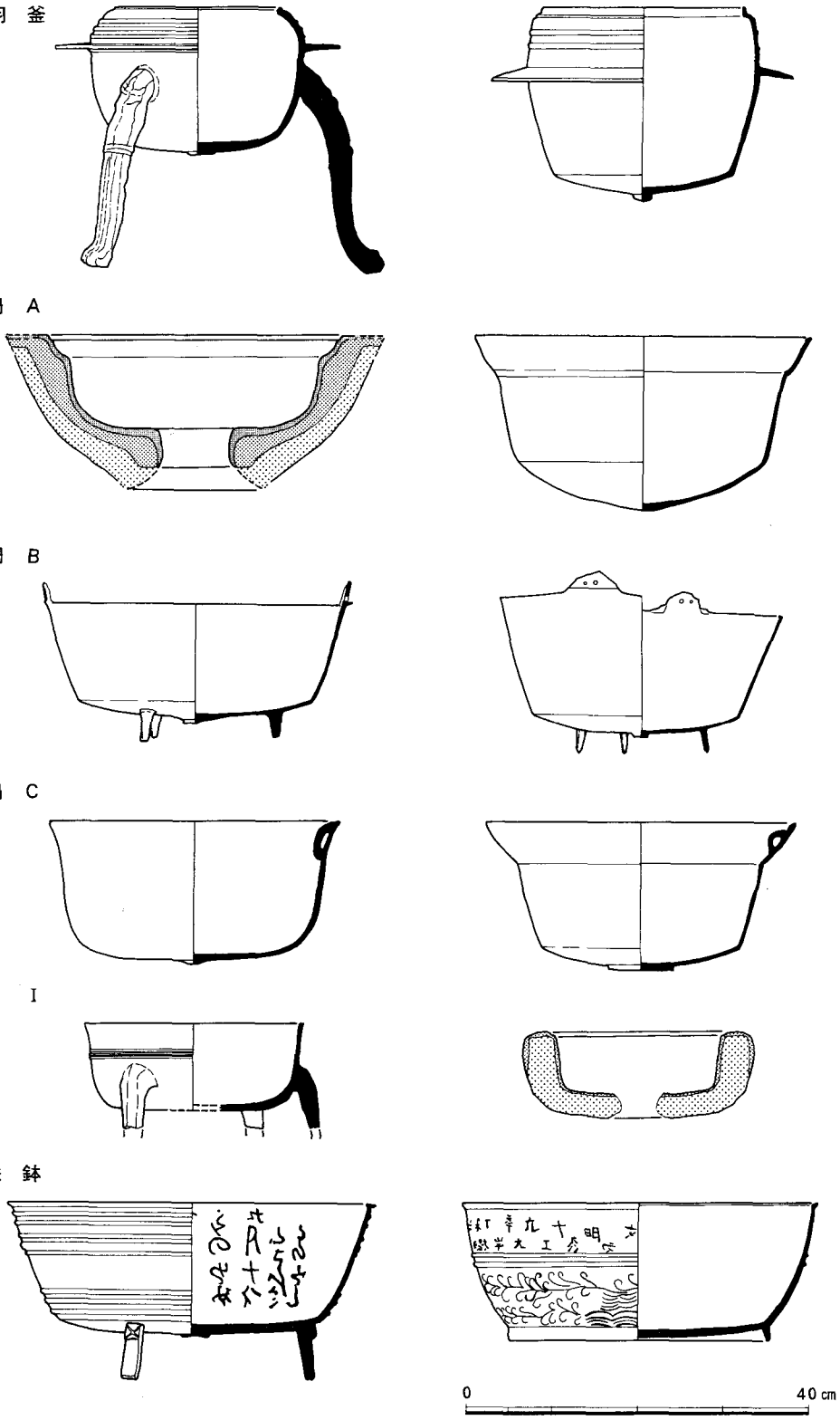
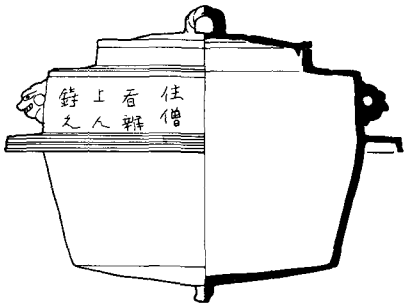
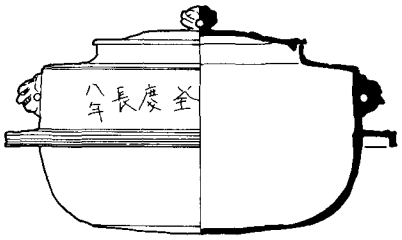


図1　鋳　鉄　鋳　物

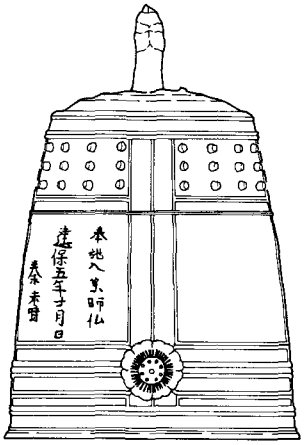
茶釜

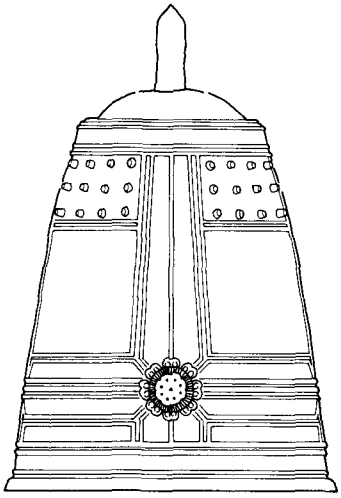




0 30 cm

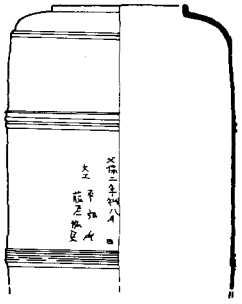
梵鐘

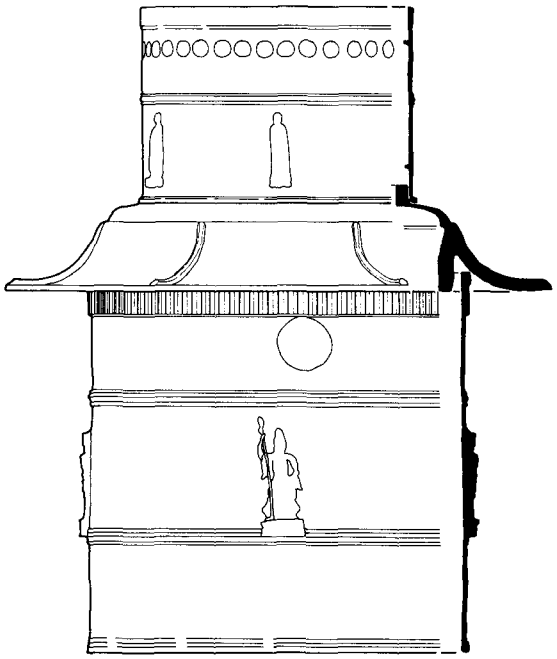




0 30 cm

塔





0 1 m

の 分 類

福島県相馬郡新地町向田A遺跡出土の器物鋳型ⅣB類[福島県教育委員会1989 本文2 pp.50-52]なども，あるいは羽釜の鋳型ではないかと推定する。また，埼玉県川口市猿貝北遺跡出土の輪状の鋳型なども，羽釜の鋳型の鍔部の可能性をもっている[埼玉県埋文調査事業団1985p.42]。

畿内では，鋳鉄製羽釜そのものの発見例がないが，長岡京の時代から平安時代前・中期ごろの緑釉陶器や須恵器に，ごく少量ながら羽釜の形態をしたものがある(3)（図3）。巽淳一郎によれば，これらの羽釜は，緑釉陶器の火舎・椀とセットをなし，茶道具として中国から流入した茶法に関係する遺物であるという[巽淳一郎1991]。その形態は，上に述べた鋳造遺跡出土鋳型と酷似し，鉄釜を模倣したものであることにまちがいない。また，その形態を，次節で述べる和歌山県本宮大社の伝世羽釜（建久9(1198)年銘湯釜）をはじめとする中世前半の羽釜と比較すると，口径の胴径に対する比率や口縁から胴部にかけての曲線的形態のありかたからみて，型式学的に先行することが明瞭である。

このほか，鋳鉄鋳物の羽釜には，長野県更埴市の屋代馬口遺跡出土品，同県上伊那郡辰野町丸山遺跡出土品の2例があり，縦長の形態をもつ。前者は11世紀代といわれており，全体に錆がひどいが，胴部下端の屈曲が明瞭で底部が平坦に近いようである。丸山遺跡例は鍔を欠失しているが，遺存状態がきわめて良好で，胴部から底部にかけてゆるやかに曲線を描く形態を示し，型式学的に前者に先行する。

長野～群馬の山間地方には，この鋳鉄鋳物を模倣した羽釜形の須恵器が分布し，群馬県利根郡月夜野町の月夜野古窯群で10世紀前半ごろに生産がおこなわれたことが判明している(図3—7・8)[月夜野町教委1985]。この羽釜形の須恵器は，器形はもちろん，鋳物製品の湯口から湯道にいたる棒状の残存部まで，かなり忠実にまねている。長野県や群馬県では，こうした鋳鉄鋳物の羽釜を生産した鋳造遺跡は，いまだ未発見であるが，古代の地方的な生産の一形態とし注目される。

2　鍋　　Ⅰ（図2）

羽釜と同様に，古代の鋳鉄鋳物の鍋Ⅰの出土例も極端に少ないが，東京都多摩ニュータウンNo.91A遺跡，同多摩ニュータウンNo.355遺跡に出土例がある。前者は胴部に凸線をもち，三足がつく鍋Ⅰであり，9世紀後半ごろの年代と考えられている。後者はやや小型であるが，鍋Ⅰの一種と考えた。また，多賀城跡第37次調査では，鍋Ⅰの脚部と思われる小片が出土している。また，多摩ニュータウンNo.27地点遺跡などでは，これを模倣した三足付土器が出土している。

一方，鋳造遺跡においては，羽釜と同様に，向田A遺跡，福島県相馬郡相馬市山田A遺跡，埼玉県大里郡花園町台耕地遺跡，千葉県柏市花前遺跡などをはじめ，富山県射水丘陵の綿打池遺跡，上野南ⅡB遺跡，滋賀県栗東町の中村遺跡などでも，この鍋Ⅰの鋳型が多数発見されている。図2—9～14に示した鋳型の上端の屈曲は，外型と内型をぴったり合わせるためにつけられた幅木（はばき）と考えられる。ちなみに，中世の鍋Aの鋳型には，図16—1・8（p.29）に示したように，二重の屈曲をもつ。もちろん上段は幅木となるから，製品にはこの部分は反映しない。鋳型から復原

想定できる形状は，口縁部が直線的に立ち上がり，口縁部に屈曲のない形態を示すものであり，胴部に凸線をもつものもある。これらは，上記の出土例と軌を一にした器物を製作した遺跡と考えられる。

これらの鋳造遺跡では，獣脚や火舎，梵鐘などの鋳型をともなう場合が多い。とくに，獣脚の鋳型は優れた造形を示し，小型品から大型品まで各種のものがある。鋳型は箱形の本体と扁平な蓋とを組み合わせて，脚の付け根の部分から鋳造している。これらの鋳型から製作された器物を，すべて仏具とみる考えがある［潮見1989p.4，高橋1983p.28］。しかし，これまで検出されている西日本の青銅製仏具を生産した鋳造遺跡の場合と比較すると，この鍋Ⅰの鋳型の出土量がきわめて大量であり，この鍋Ⅰなどは，日用の煮炊に用いられるものを基本として製作されたのではないかと推定する。そして，この器物を鍋と考えた。なお，獣脚を鍋Ⅰと結合して，三足付鍋の形態をとるものもあったと推定する。

表1　古代寺院資材帳の銅鉄釜関係記事（［村上1985］による）

寺院	年代	釜関係記事
法隆寺	天平年間ごろ	合釜壹拾肆口 湯屋分銅壹口 通分鉄壹拾參口
大安寺	天平19（747）	合釜參拾口參口 銅十口　之中一口足釜　一口懸釜　一口行竈 鉄廿口　之中七口在並足並通物　鉄一口温室分
多度神宮寺	延暦20（801）	鉄湯釜　鉄釜貳口　湯鉄參拾斤
安祥寺	貞観13（871）	釜一口　鉄釜二口
広隆寺	貞観15（873）	粥釜壹口　已上本自所有　湯釜壹口　以承和十一年買 足釜壹口　小釜肆口
観心寺	元慶 7（883）	釜五口　足釜二口　湯釜一口
筑前観世音寺	延喜 5（905）	温室物章 鉄釜壹口　貞観八年尻穿 大衆物章 鉄釜肆

（3）　中世の羽釜

中世の羽釜資料については，立田三郎による箱根神社所蔵鉄釜の研究［立田1963］，巽三郎による熊野本宮・那智・速玉の各大社の鉄釜の研究［巽三郎1964］など，個別的ながらも実測図を示した先駆的な考察がある。羽釜資料の遺跡出土品は，鍋A・鍋B・鍋Cなどと比較して数少な

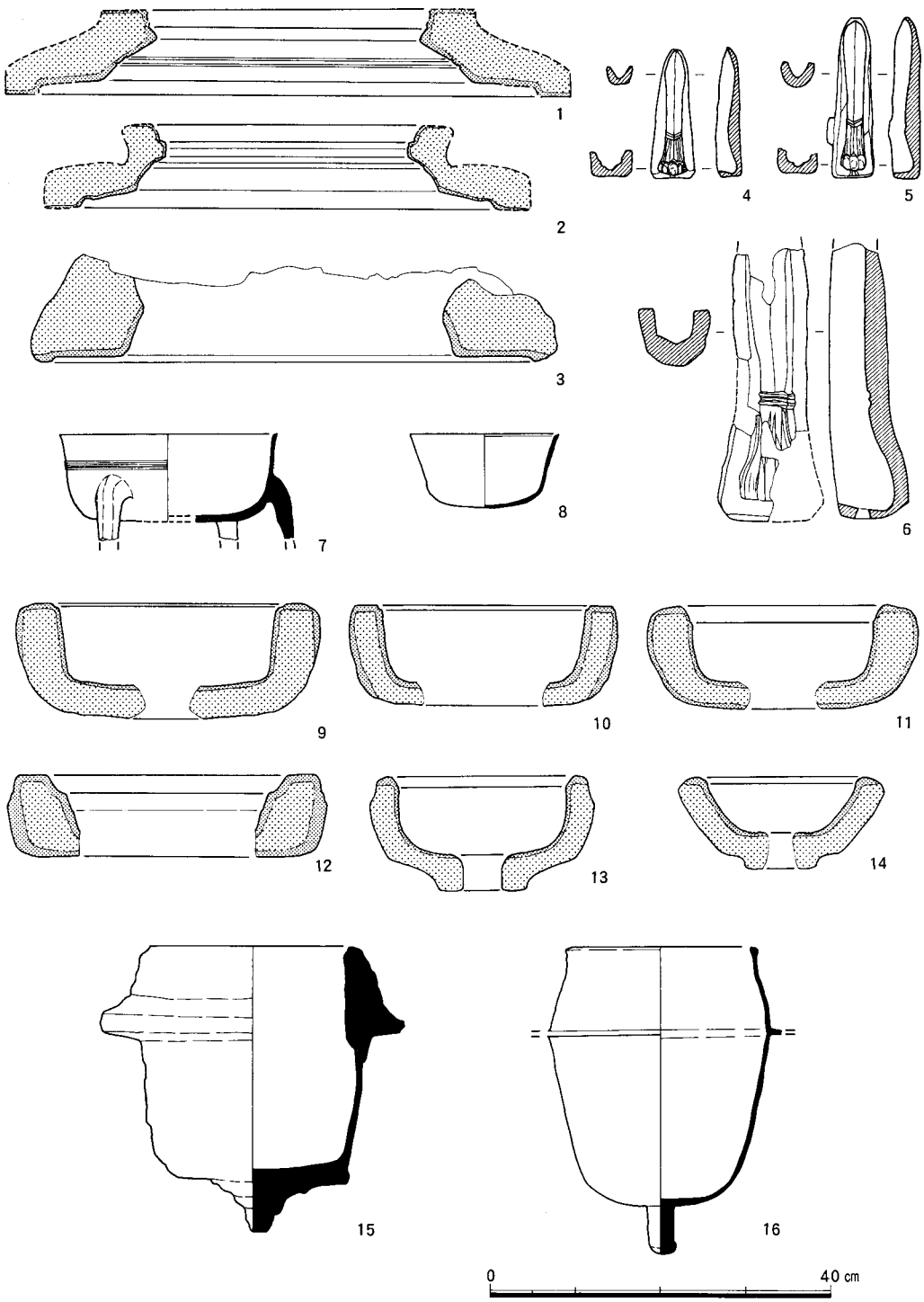


図2　古代の羽釜・獣脚・鍋Ⅰ

1・2富山・上野南ⅡB遺跡　3～6福島・向田A遺跡　7・8東京・多摩ニュータウン　9～11福島・向田A遺跡　12～14富山・上野南ⅡB遺跡　15長野・屋代馬口遺跡　16長野・丸山遺跡

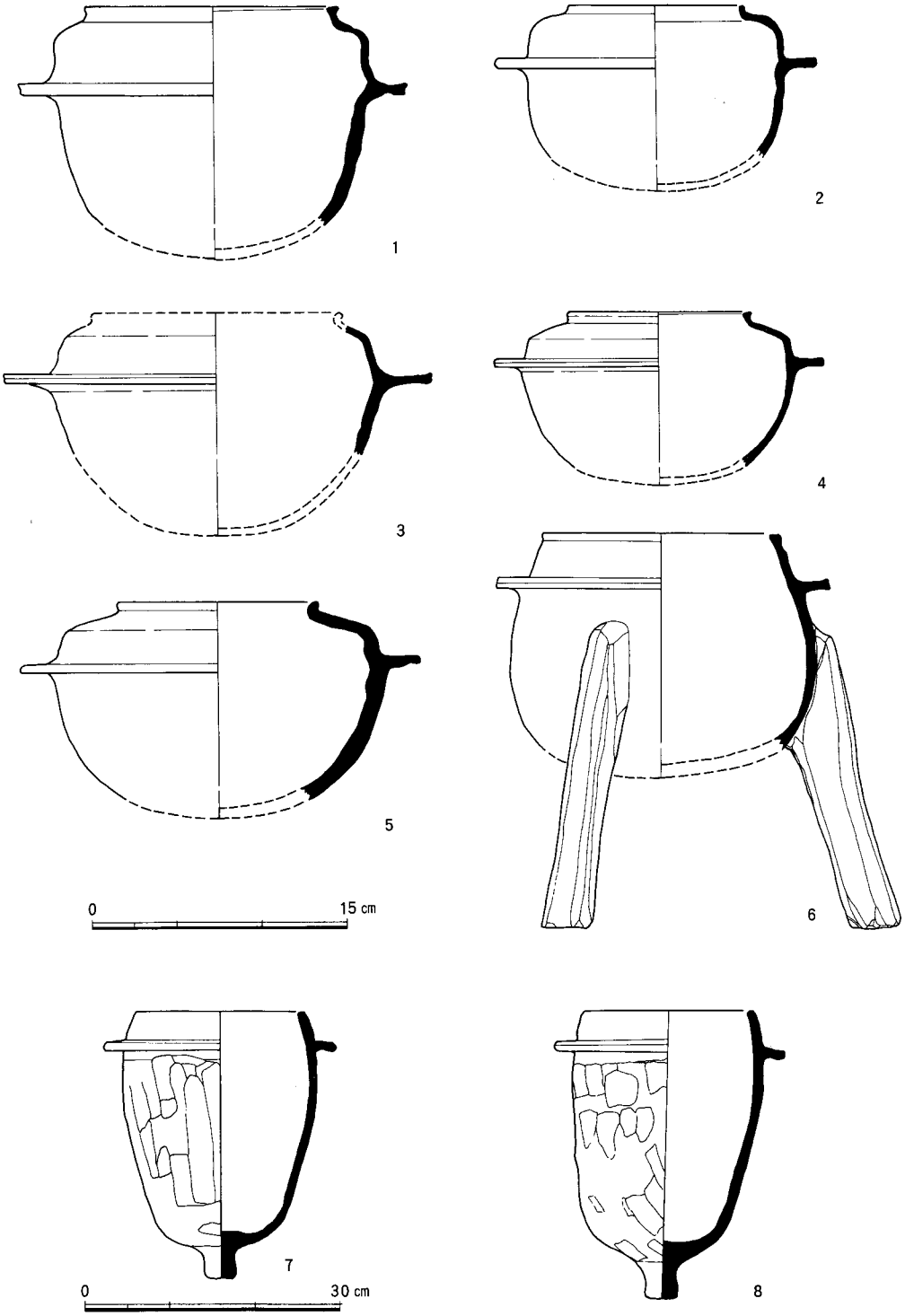


図3　緑釉陶器・須恵器の羽釜

1奈良・興福寺一乗院　　2奈良・大安寺
3京都・長岡京左京四条二坊九町　　4京都・長岡京左京四条四坊一町
5京都・山城国府遺跡　　6・7群馬・月夜野町古窯跡群

いが，伝世品は鋳鉄鋳物のなかでもかなり多く現存している。それらの伝世資料とは，大寺院付属の湯屋（浴室）の釜や近畿地方を中心とする寺社の湯立て神事に使用された湯釜である。この湯釜には，銘文が記されたものが多く，金石文の研究者が注目し，各種の金石文誌に記載されているものもある。しかし，遺品そのものについての研究はほとんどなく，修験道の法具［蔵田1967p.94，岡崎1982p.378］，あるいは茶湯釜の前史［鈴木1973pp.23-4］などとしてしかとらえられてこなかった。

たしかに，これらの資料は，寺社の特殊な什器もしくは儀式用具であるが，煮沸に実用されたものであって，その形態変化や製作技術は，一般の鍋釜とほぼ同じものと判断できた。そして，遺跡出土の数少ない一般の鋳鉄鋳物資料をおぎない，煮沸用具としての鋳鉄鋳物の歴史をあとづけるための有効な材料となるものと考える。

前述のように，羽釜は，特殊なものや大型のものは別として，基本的に鍔部下端を境にして上下２段の鋳型によって製作されている。これが，基本的に外型が１段で鋳造される鍋との鋳造技術上の違いであり，そのため，中世において価格が鍋よりも高かったことが明らかにされている［小野1991p.48］。

1　遺跡出土の羽釜（図４）

消費遺跡出土品や鋳造遺跡出土の鋳型から形態を復原できるものを図４に示した。鎌倉時代前期のものと推定できる大阪府枚方市楠葉東遺跡出土品では，直立した短い口縁部があり，口縁から肩部，胴部，底部にかけて緩やかに曲線を描き，球形に近い体部をもつ。京都大学病院構内ＡＪ19区出土例も同様の丸い形態と推定する。15世紀中葉ごろとみられる和歌山県根来寺出土例では，肩部が直線的に立ち上がり気味になり，胴部と底部の境目が明瞭になっている。この傾向は，時代とともにさらに明瞭になり，16～17世紀の堺環濠都市遺跡出土品では，肩部は直立に近い形状を示し，底部も丸みを失って直線的なものとなってゆく。また，口縁端部の段もほとんど形式化している。

これらは，畿内を中心とする地域に分布するものと考えられる。検出例が少なく，細かな地域による違いなど確定的な議論を進めるのは困難であるが，京都大学病院構内ＡＪ19区出土品や岐阜県郡上郡八幡町穀見塚前遺跡出土例では，型部に３本の凸線をもち，口縁端部が内傾しており，次項で述べる山城型ではないかと推定する。このほか，２本の凸線で肩部をかざるものがいくつかみられるが，これらは，堺環濠都市など，河内とその南に隣接する紀伊で出土しており，河内系の鋳物師の作品とみるべきであろう。

2　中世前半の伝世羽釜（図５・６）

14世紀中葉ごろまでにおさまると考えられる中世前半の確実な資料には，伝世品がいくつかある。小型品も若干あるが，口径が１ｍを越す大型のやや特殊なものが大半をしめている［五十川1990］。これらの今日まで伝世した遺品には，特殊ないわれや，宗教的伝説がからまっているものが多い。

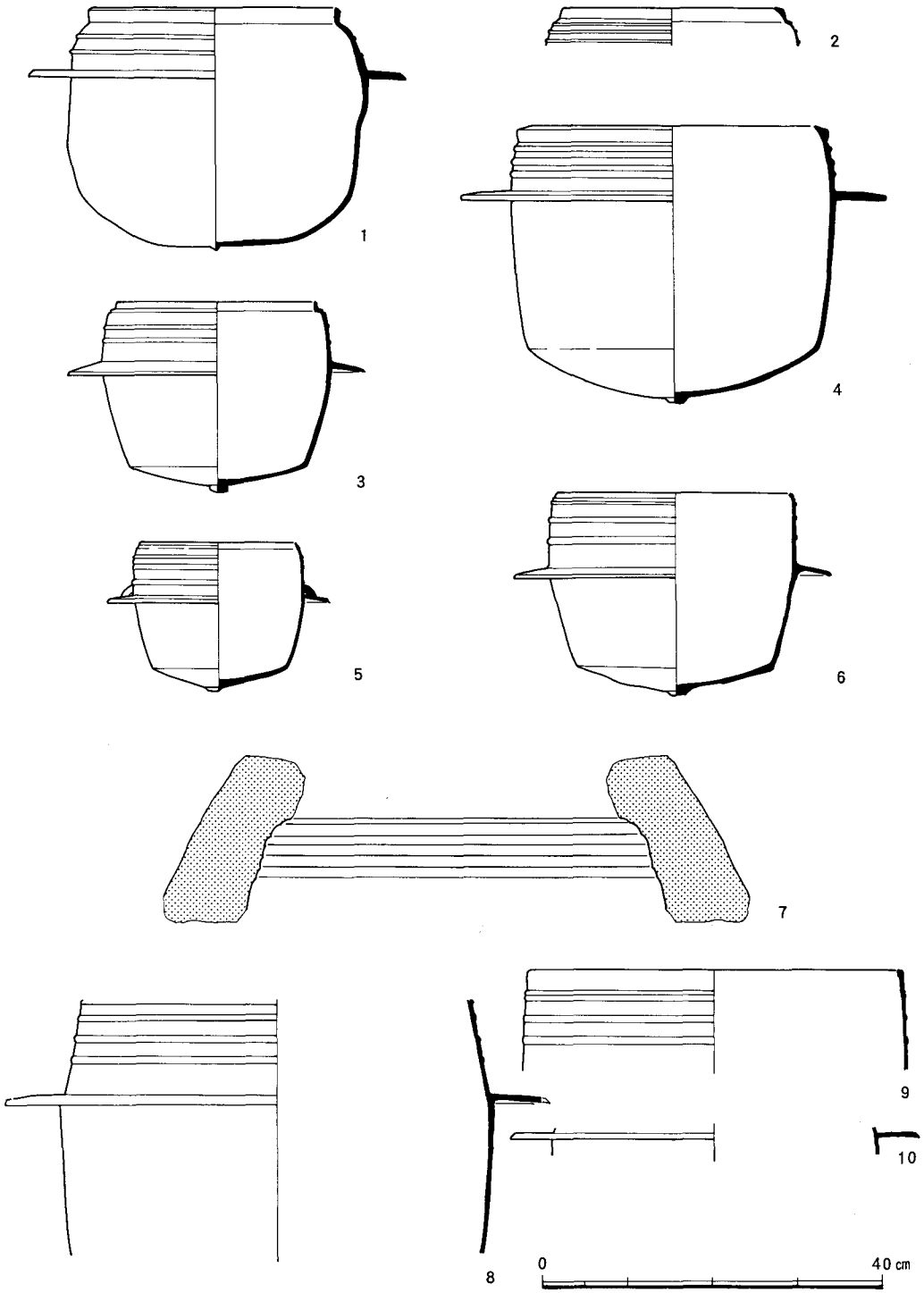


図4　遺跡出土の羽釜

1大阪・東楠葉遺跡　2京都・京大構内遺跡　3和歌山・根来寺
4岐阜・穀見塚前遺跡　5大阪・北岡遺跡　6大阪・堺環濠都市遺跡ＳＫＴ57
7～10大阪・堺環濠都市遺跡ＳＫＴ153

これらのうち，紀年銘のある最古の遺品は，和歌山県東牟婁郡本宮町熊野本宮大社羽釜で，建久9(1198)年の銘がある。また，神奈川県足柄下郡箱根町箱根神社の釜2口は，文永5(1268)年と弘安6(1283)年，山口県大津郡三隅町八幡神社羽釜は正応元(1288)年，和歌山県新宮市熊野速玉大社羽釜は元亨2(1322)年の銘が，それぞれあって，編年上の定点をあたえる。伝世品における装飾は，肩部に3本の凸線をつけるのが基本である。その型式変化は，前述の遺跡出土品とまったく同様に，形態的には，口縁から肩部，胴部，底部にかけて，緩やかに曲線を描き，全体として球形をしめすものから，次第に胴部や肩部が直立し，胴部と底部の境目の屈曲が明瞭になってゆく。また，次項の湯立て釜とともに型式変化を勘案すると，14世紀には口縁部と肩部の間に段が生じるが，この段は肩部から口縁部がすっかり直立してしまう16世紀には消えてゆくようである。以上から，図6の兵庫県神崎郡香寺町八葉寺羽釜や個人蔵品は，12世紀末～13世紀ごろの遺品と考えられる。

大型の鋳鉄鋳物の製作技術には，おなじく大型品の梵鐘の製作技術に通じるところがあると考えられるため，ここにあげた大型資料には，中世前半に梵鐘製作の主流をなした河内系の鋳物師の作品も多くふくまれていると推定する。このほか，箱根神社の弘安6（1283）年銘羽釜は，銘文から伊豆の鋳物師磯部康廣の作品であることが明らかである。おなじく，箱根神社の文永5（1268）年銘の羽釜や熊野速玉大社羽釜は，口縁端部が上に直立するものが多いなかで，その端部が内側に突出している。次節で解説するが，中世のおわりごろの山城系の鋳物師の作品とおもわれるものには，こうした特徴があり，前述のように京都大学病院構内ＡＪ19区や岐阜県郡上郡八幡町穀見塚前遺跡出土資料なども同じ型式で，おそらく山城型の鋳物師の古い作品ではないかと考える。中世京都の主要な鋳物工房である三条釜座については，『師守記』暦応4(1341）年2月19日の条に三条鎌（釜）座より六角西洞院に至る地域が焼亡したとの記事があり，また，『東寺古文零聚』巻2によれば，鎌倉時代の後半に5石入りの大型の釜を製作しており，その製品に対する保証をしている。[(4)] 三条釜座は，中世の前半においては，梵鐘のような大型の青銅製品を製作した形跡はないが，鋳鉄鋳物製作にすぐれた手腕をふるっていたものとみてよい。

さて，12世紀に製作されたとみられる平泉中尊寺蔵の大般若経の第七十二見返絵には，鉄釜地獄の情景が描かれている（図7）。これによって三脚付の羽釜の存在を推定できる。興福寺大湯屋の大釜には，形骸化したこの三足が設置されていた形跡があり，竈や金輪の普及しない段階の工夫とみられる。この三脚付羽釜の形態は，次項で述べる近畿の湯立て釜にその形態を残している。古代の文献にあらわれた「足釜」がこうしたものなのであろう（表1）。

3　中世後半の儀式用羽釜

社寺に伝世されている羽釜には，14世紀中葉ごろ以降，中世の後半にいたる資料がかなり豊富にあり，近畿を中心とする地域，とくに奈良県，大阪府南部，和歌山県紀ノ川中流域などに稠密に存在する。修験道の色濃く残る大和の山深い地域では，これらの「湯釜」とよばれる羽釜を使用する「湯立て」と呼ばれる神事がよく残っており，いまなお中世の羽釜を実用して，神事がい

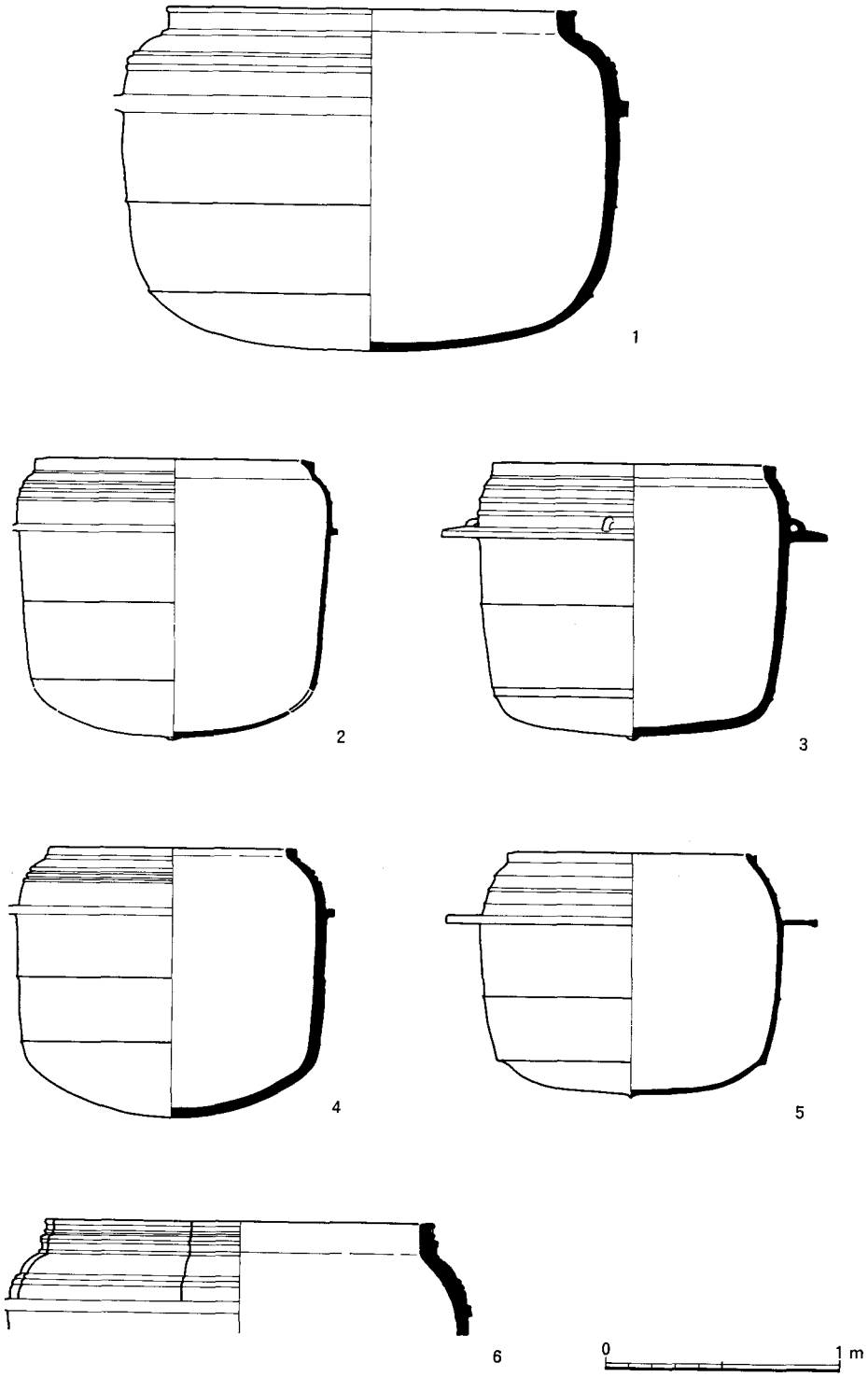


図5　中世前半の伝世羽釜(1)

1 奈良・興福寺大湯屋　　2 神奈川・箱根神社　文永5(1268)
3 神奈川・箱根神社　弘安6(1283)　　4 和歌山・那智大社
5 和歌山・速玉大社　元亨2(1322)　　6 奈良・興福寺大湯屋

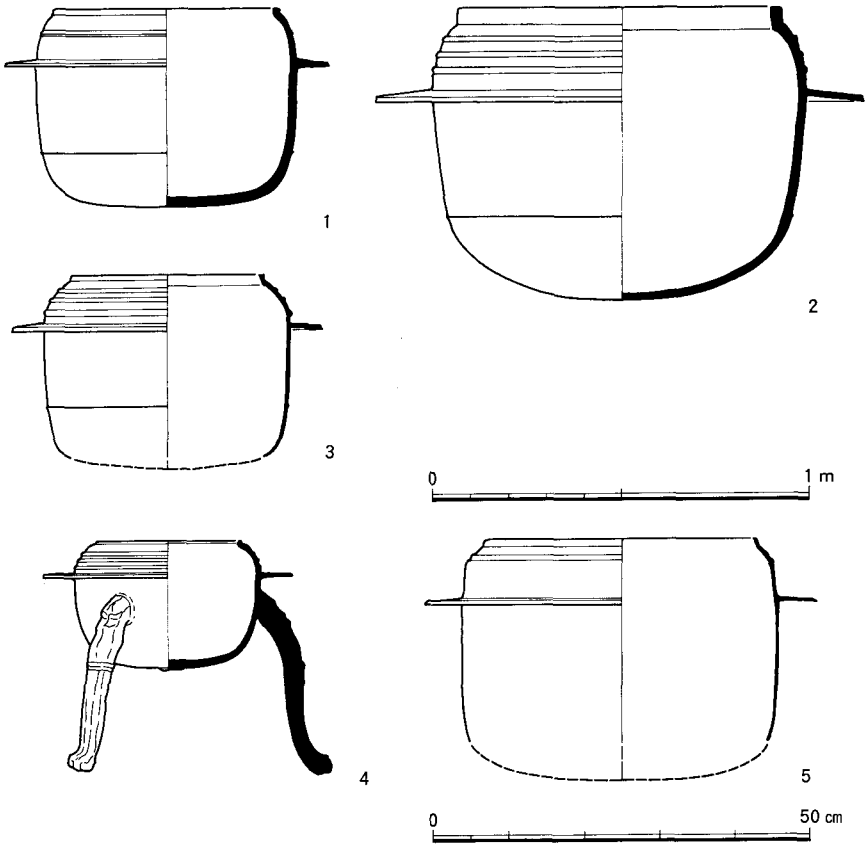


図6　中世前半の伝世羽釜(2)

1 兵庫・八葉寺　　2 和歌山・本宮大社　建久9(1198)
3 山口・三隅八幡社　正応元(1288)　　4 個人蔵　　5 静岡・雲金神社

図7　中尊寺蔵大般若経第七十二見返絵にみえる獣脚付羽釜

となまれているところすらある。湯釜の遺品は，考古学と美術工芸の境界領域に，長らく放置されてきたものであるが，羽釜の歴史を考える材料として活用する。

近畿地方の湯釜の実測図を図8～13に示したが，ほぼ年代順に配列しており，前項で詳しく述べたような形態の変化を読み取ることができると思う。この湯釜のうち銘文のあるものには，奉納先の寺社や紀年月日が記されているのが多い。鋳造工人について記されたものは，古い湯釜にはほとんどないが，時代の下降とともに，工人銘があらわれる。そして，近世のものも多少まじえて，型式とその分布を通じて，興味ある地域差を検出することができた。すなわち，大きく河内，大和，山城の3地域を核として，いくつかの型式が分布し，国を基本とする単位のあったことが推定できる。以下に詳しく説明するが，型式分類には肩部の凸線のあり方をはじめ，銘文の位置などが重要な分類要素になる。

河　内　型（図8・9）　口縁部は短く上に突出する。肩部には小＋大＋小の凸線を組み合わせた，いわゆる「子持ち凸帯」を中心に，上下に数本の凸線の装飾をもつ。口縁外面には，珠文や巴文，山形文の装飾が割付けられることが多い。銘文は鍔の上面にぐるりとまわるように陽鋳されており，上から見る形をとっている。獅噛（しがみ）のついた脚がつくのが普通である。他地域例も同様であるが，獣脚は，古いものは断面形に凹部をもたないが，新しくなるにしたがって断面U字状になってゆく。材料の節約と軽量化をめざしたものであろうか。

さて，大阪府河内長野市流谷八幡宮湯釜は，延元5(1340)年に製作され，この種の湯釜の最古例であるが，鍔上面の銘文中に，中世の古い湯釜としては珍しく「大工一木友安」と製作にあたった鋳物師の名が銘記されている。坪井良平は，この「一木」を山城八幡大乗院の延慶3(1310)年鐘銘の「大工壹紀得実」や『兼仲卿記』の「堀郷住人伊岐得久」などにあらわれた伊岐氏とみている［坪井良平1989pp.527-8］。本貫堀郷を，網野善彦は現在の大阪府松原市の堀町［網野1984 p.499］，坪井良平は交野郡楠葉と推定しているが，いずれにせよ確実に河内の鋳物師の一人であり，図8・9に示した同型式の一連の資料が河内，およびその系譜に連なる鋳物師の作品であることは疑う余地がない。この形式の獅噛の形相には，かなり写実的に優れたものが多いことも特徴である。この文様の意匠は梵鐘の龍頭と同質であり，中世前半の梵鐘製作において主導的役割をはたした河内系の鋳物師の作品とみることが，その点においても妥当であろう。近世の作品として，国立歴史民俗博物館所蔵の湯釜は，脚部が和歌山県橋本市郷土資料館蔵の「柏原村」銘の湯釜に酷似する。中世の後半，相賀庄柏原（橋本市）や山崎庄金屋（那賀郡岩出町）には鋳物師がいたことが明らかであり，これらの作品の一部は紀ノ川中流域で生産された可能性もある。

大　和　型（図10～12）　前述の河内型と異なって，銘文が肩部にぐるりと一周する形式を示すものである。いささか細部の異なる2種がある。まず，最初のものは，2組の凸線のなかに銘文をいれる1群（図10・11）であり，銘文は中世では横方向であったものが，慶長年間に縦方向に次第に推移する。口縁部とその周辺には，割付けられた珠文の装飾があり，基本的に3箇所に獣脚がつく。これらのうち，奈良県吉野郡吉野町水分神社湯釜は，慶長9(1604)年に豊臣秀頼寄

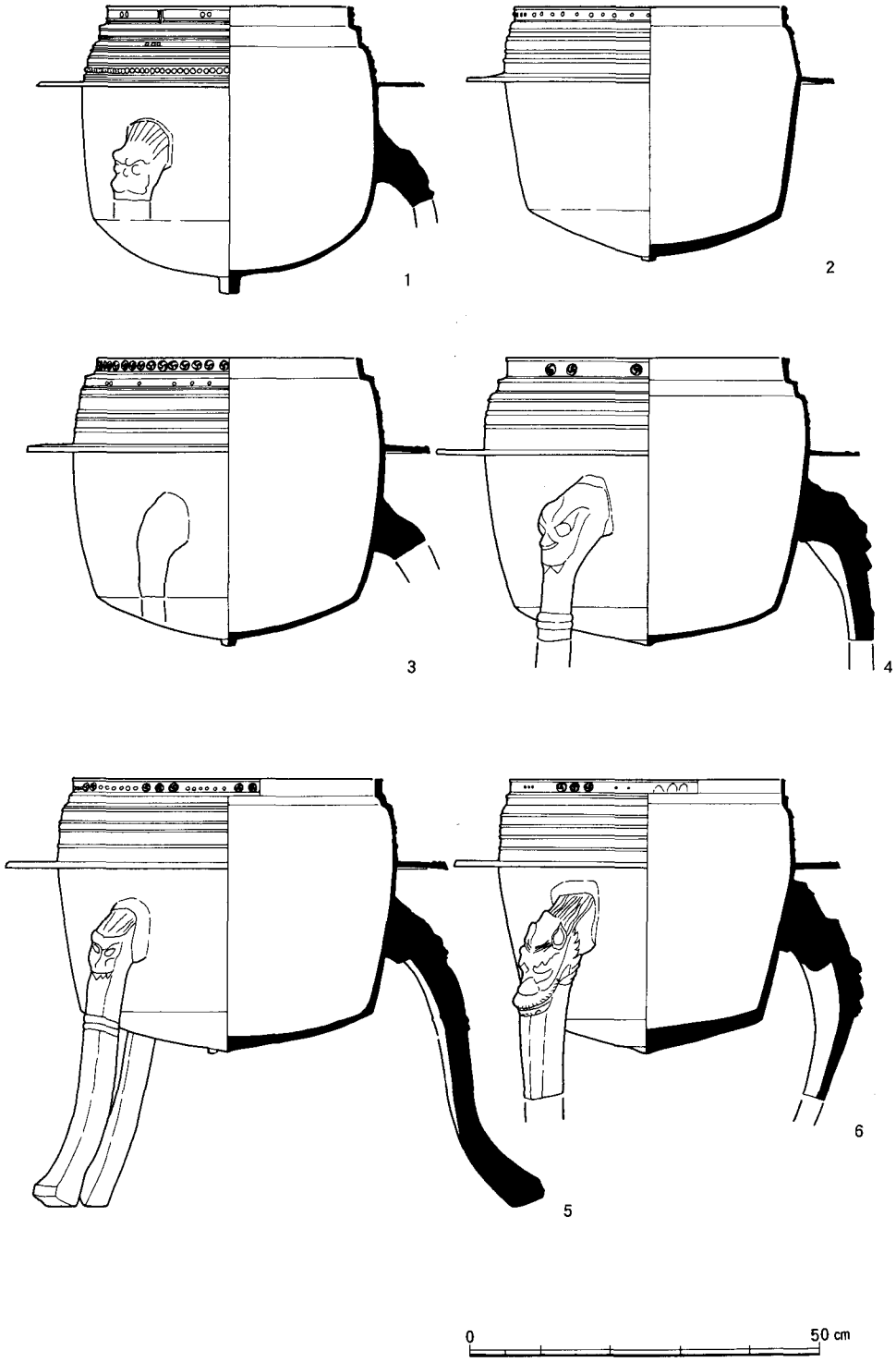


図8　河内型の湯釜(1)

1 大阪・流谷八幡神社　延元5(1340)　　2 大阪・滝畑天神社　長禄4(1460)
3 和歌山・三船神社　永正11(1514)　　4 奈良・朝護孫子寺　永正13(1516)
5 和歌山・丹生官省符　神社永正14(1517)　　6 和歌山・鞆淵八幡神社　永禄6(1563)

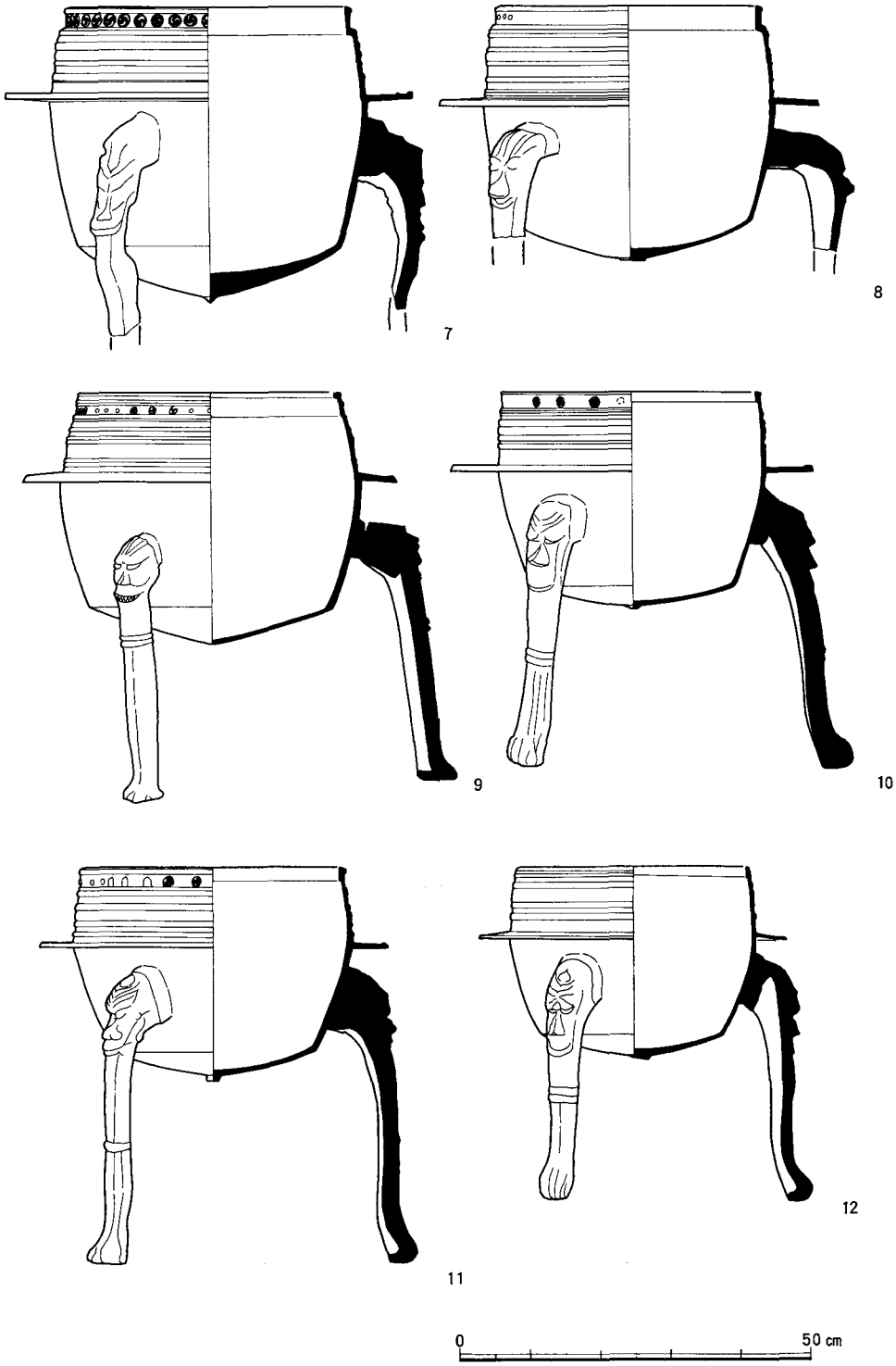


図9　河内型の湯釜(2)

7 和歌山・三船神社　天正16(1588)　　8 京都・観音寺　元和8(1622)
9 大阪・住吉神社　寛永8(1631)　　10和歌山・柏原村　正徳元(1711)
11和歌山・応其神社　宝暦10(1760)　　12奈良・天迎寺旧蔵(国立歴史民俗博物館蔵)

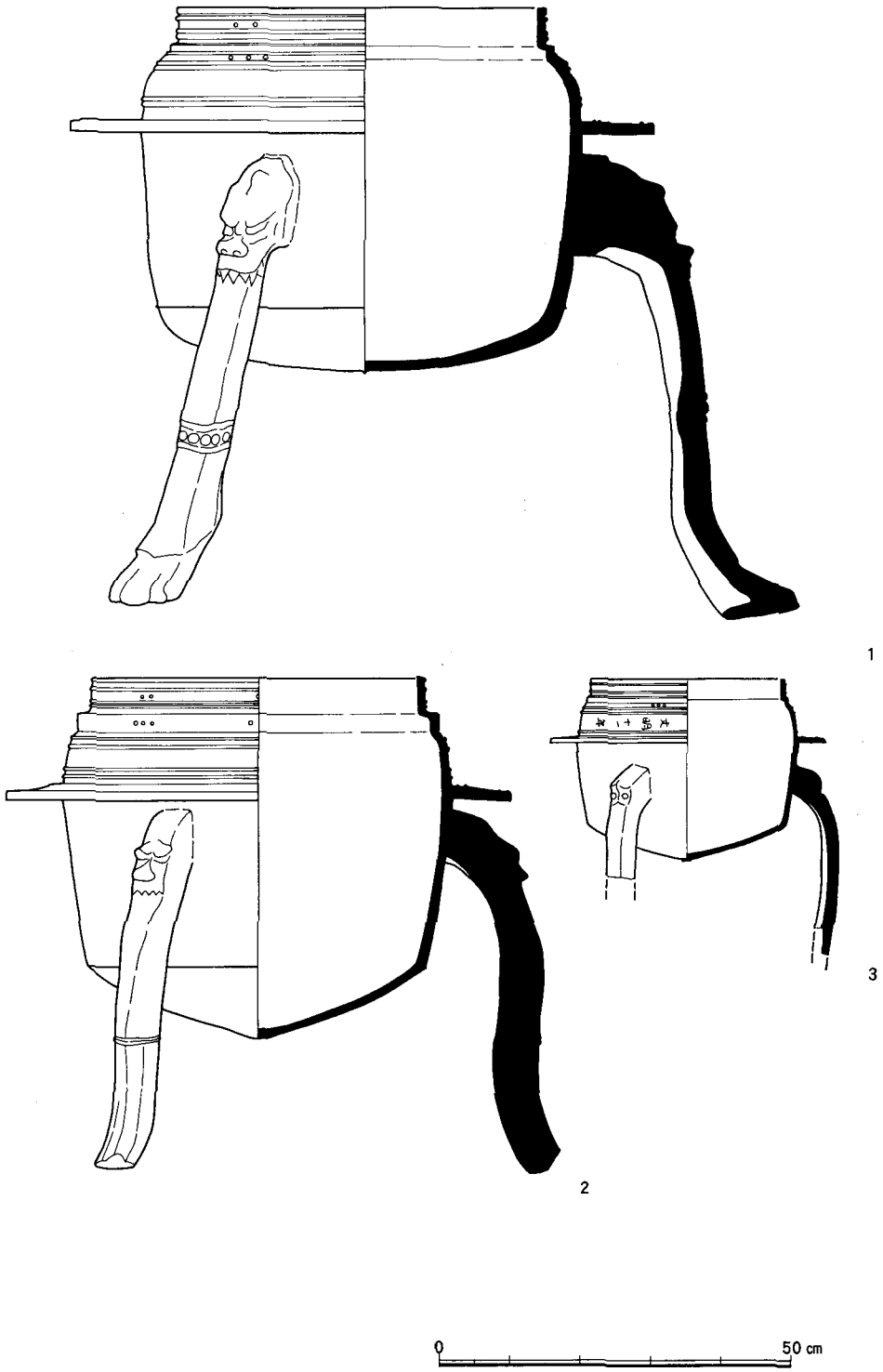


図10　大和型の湯釜(1)

1奈良・吉野水分神社　慶長9(1604)　　2奈良・吉野吉水神社　康暦元(1379)
3奈良・天水分神社　文明11(1479)

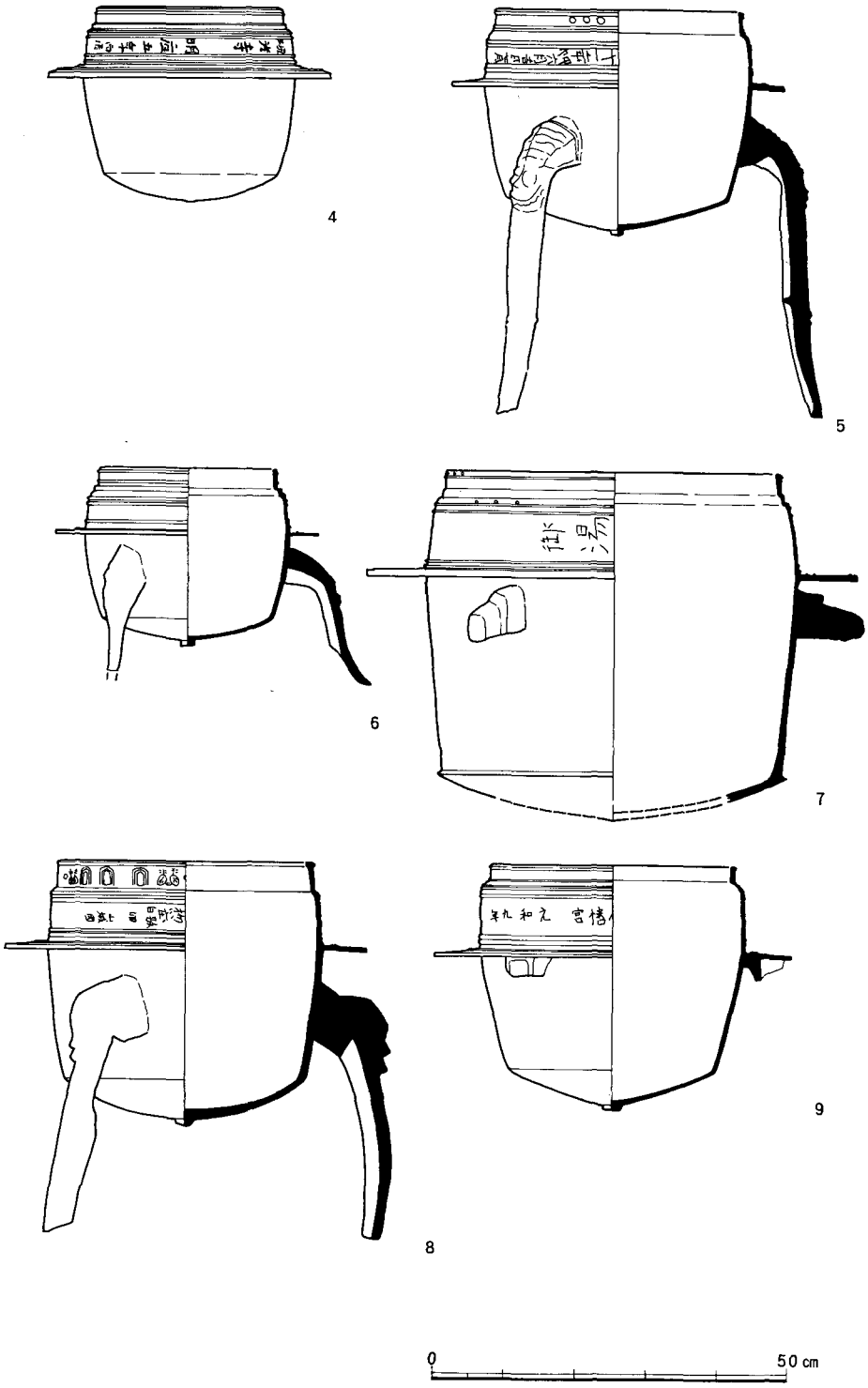


図11　大和型の湯釜(2)

4 奈良・世尊寺　明応5(1496)
5 奈良・戸隠神社　永正11(1514)
6 奈良・八柱神社　大永4(1524)
7 奈良・生駒神社　永禄6(1563)
8 京都・春日神社　慶長9(1604)
9 奈良・下市八幡神社　元和9(1623)

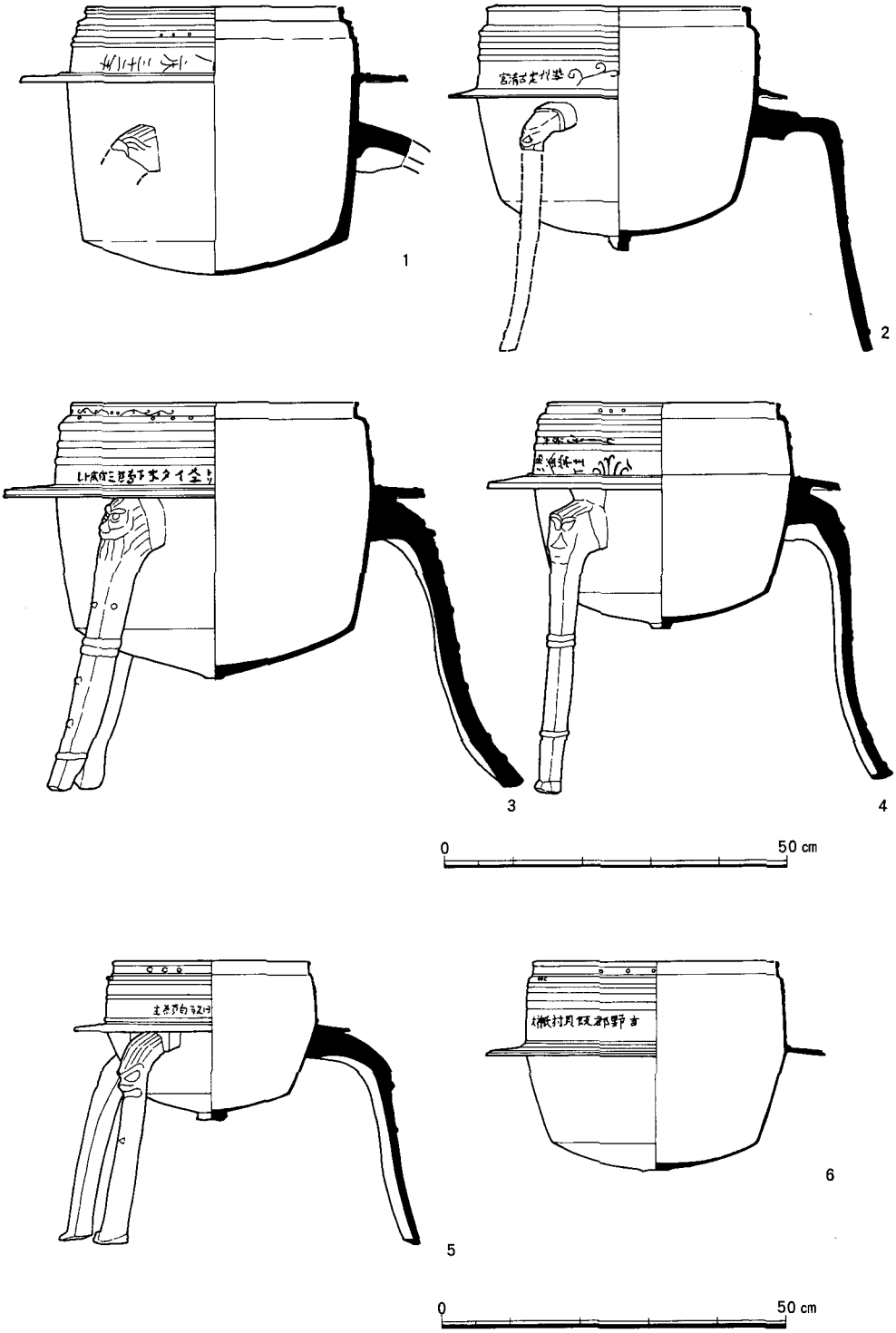


図12　大和型の湯釜(3)

10京都・水渡神社　応永32(1425)　11三重・佐田神社　慶長13(1608)
12三重・敢国神社　慶長13(1598)　13三重・敢国神社　慶長18(1613)
14奈良・厳島神社　寛延4(1751)　15奈良・水分神社　宝暦3(1753)

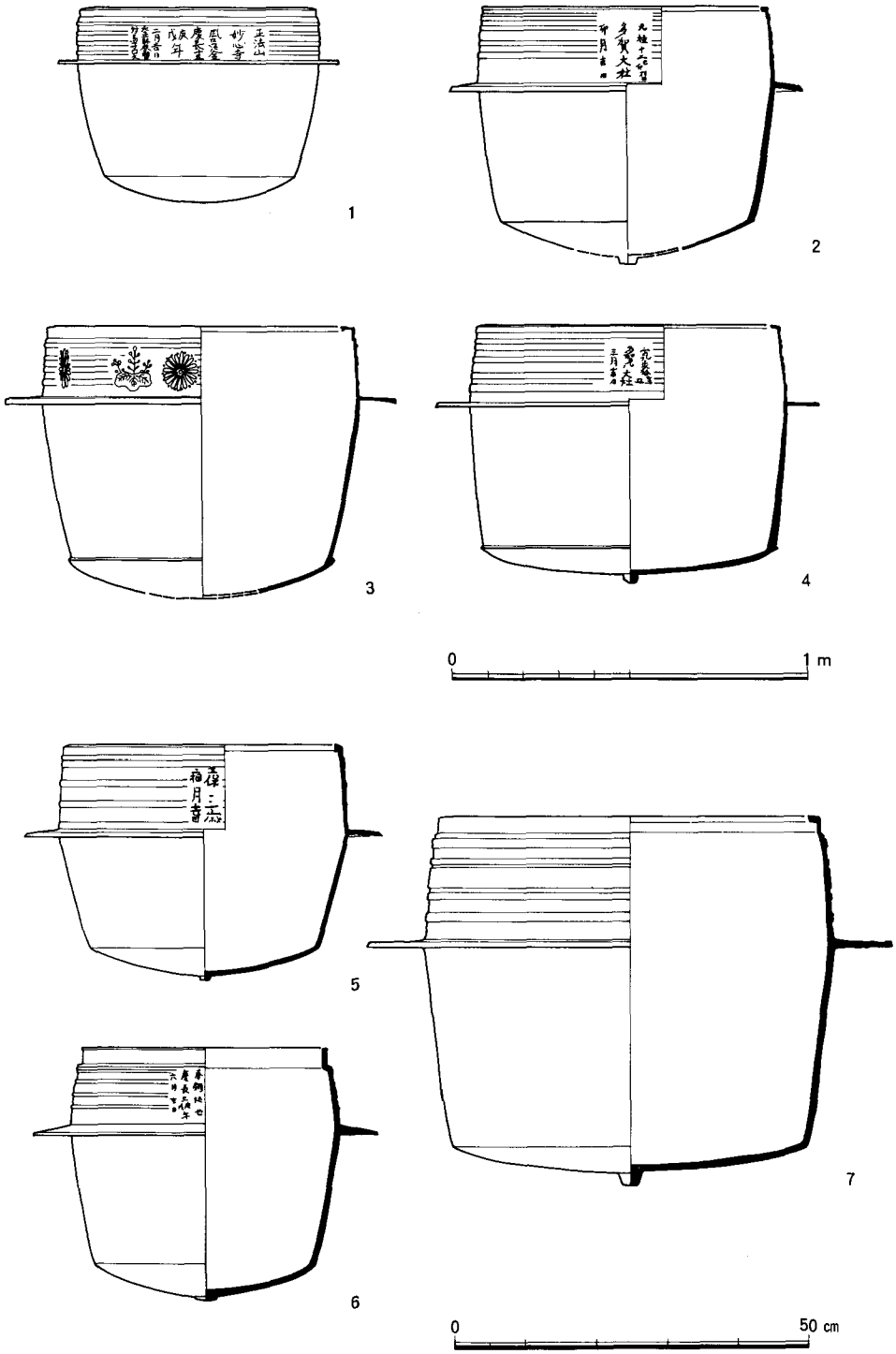


図13　山城型の湯釜

1 京都・妙心寺　慶長15(1610)　　2 滋賀・多賀神社　元禄12(1699)
3 京都・御香宮　　4 滋賀・多賀神社　寛永10(1633)
5 滋賀・八幡神社　正保3(1646)　　6 京都・春日若宮神社　慶長3(1598)
7 滋賀・生駒神社

進との銘文があり，三脚の獅嚙の形相や断面U字の形態などから勘案して，当時の作品としてさしつかえない。しかし，中世の半ばにさかのぼりうる器形を示すため，古い湯釜の遺品をもとに，形態的模作を試みた作品ではないかと考えた。大和型の獅嚙の形相は，前述の河内型に比較して表情に乏しく，やや形式化したものが多い。これらの湯釜を作成した鋳物工人集団を推定しうる銘文の記載は皆無であるが，奈良県の山辺郡や吉野郡の山岳部，あるいは南山城に分布しているため，大和の有力な鋳物師と考えるのが妥当だろう。下田あるいは三輪の鋳物師が，その候補にあげられるが断定できない。

一方，２本，あるいは３本の凸線と鍔のつけ根の間に銘文を施すものがある（図12)。資料数は少ないが，京都府城陽市水渡神社例は，応永32(1425)年の紀年銘をもち，その古いものと考えられる。三重県多気郡宮川村佐田神社湯釜は，慶長13(1608)年銘で，この型式を示し，「大工和州万歳之弥九郎」の銘文から鋳物師名がわかり，坪井良平の研究によって南大和の北葛城郡当麻町から大和高田市周辺に比定できる万歳の鋳物師の作品であることが明らかになっている［坪井良平1970 p.253］。また，三重県上野市の敢国神社湯釜のうち，慶長３(1598)年銘をもつものには「大工エナクヤ七郎」とあり，上野市南部の依那具の鋳物師の作品であることが銘記されている。同社の慶長18年銘湯釜も同型式であり，依那具の鋳物師の作と考えてよい。

大和の近世湯釜の調査をまだ十分にすすめていないので確言できないが，香芝市内の五位堂の鋳物師津田五郎兵衛の作品を２点図示した。これらは，この型式の末裔ではないかとみられ，香芝市・橿原市や吉野郡一帯に分布している。

山　城　型（図13）　小＋大＋小の子持ち凸帯を装飾の基本的要素とし，その一部を切断して，縦向きに銘文がほどこされたものである。中世の古い資料を見いだしていないが，京都市右京区妙心寺の風呂釜は，銘文から慶長15(1610)年に三条釜座の藤原対馬守国久の作品とわかる貴重なものである。実見の機会を得ていないが，写真から口縁端部が内側に折れるものと判断した。京都市伏見区御香宮例や滋賀県犬上郡多賀町多賀大社の湯釜も，同様の装飾と銘文の記載位置，そして口縁形態を示すものであり，山城型とみられる。また，河内型や大和型と異なって脚がつかないことも，山城型の特徴のようである。このほか，滋賀県下の例として，甲賀郡甲賀町八幡神社や長浜市生駒神社例などの図をあげた。口縁端部の形態のやや異なるものもあるが，銘文のありかたから山城型と判断した。近世には近江多賀村に鋳物師がみられるし，栗太郡辻村の鋳物師が活躍したことは周知の事実である。ここに山城型とよんだものには，その系統に連なる近江の鋳物師の作品がふくまれていることはまちがいない。

以上に述べた各型式の湯釜の分布を図14に示した。これらの湯釜は，一般の羽釜や鍋Ａあるいは鍋Ｂの生産をおこなった鋳造工房の作品と考える。その分布は，中世後半の鋳鉄鋳物の生産と供給の実態の一端を反映しているものと考えたい。河内型，大和型，山城型と呼んだ諸型式の所在地をみると，国境で諸型式が入り混じるところがある。たとえば，河内型の信貴山朝護孫子寺例は，奈良県生駒郡平群町に所在するが，河内と大和の国境といってよい位置にあり，同様に京

河内型　大和型　山城型

図14　近畿地方の湯釜の分布

都府相楽郡田辺町観音寺例は，山城とはいえ河内から低い山塊を越えてすぐの地点にある。河内型は，基本的に河内と紀ノ川中流域に稠密に分布するといってよい。また，大和型は大和国のみならず，京都府南部，すなわち南山城の地にも分布しており，南山城は，いくつかの系統が混在する地域である。南山城は，南都から平城山を越えて隣接する地でもあり，河内からも近づきやすい特殊な地域といえる。

また，河内と紀伊，大和と伊賀，山城と近江では，それぞれ同系の型式のものがあり，核と外延の地の関係がある。このうち，伊賀のように在地生産のわかるものもあるが，それ以外は現在のところ不明である。梵鐘についていえば，紀伊北部のものは河内系の鋳物師の作品が多く，また伊賀の中世の梵鐘は，ほぼ大和の鋳物師の独占するところであったことが明らかになっており［坪井良平1970 pp.258-60］，大型青銅鋳物の流通圏と類似するところが興味ふかい。

以上のように，中世の後半には，鋳物生産においても古くからの先進地帯といってよい畿内とその周辺地域では，国単位とよんでもよいような生産と供給の小さな単位が確立していたことが読み取れると考える。そしてまた，河内と大和，山城という古くからの鋳物生産の伝統のある国を核として，それぞれの隣接する地方に製品を供給するか，もしくは，隣接する国の鋳物師に影響をあたえていると考えられる。

表2　中世後半の河内・大和・山城のおもな鋳物師（［坪井良平1970］による）

国	本拠地	所在地	おもな鋳物師
河　内	我孫子	大阪市住吉区	大工藤原友吉我孫（応安6（1373））
	堺	大阪府堺市	大工堺北庄山川助頼（永和5（1379））
	能登生	大阪府八上郡	広橋助忠（慶長5（1600））
紀　伊	相賀庄柏原	和歌山県橋本市	カシワハラ大工九郎左衛門（天正14(1586)）
	山崎庄金屋	那賀郡岩出町	前ノ金屋藤七，後ノ金屋助二郎，助三郎（明応6（1497））
			大工右衛門尉長継（文安4（1447））
			彦太郎大夫　小工宗次郎（天文12(1543)）
大　和	下田	奈良県香芝市	葛城友光（応永28(1421)）など
	古市	奈良市古市町	古市鋳物師（応永22(1415)）
	三輪	奈良県桜井市	大和国三輪衛門次郎（文安4（1447））
	万歳	奈良県大和高田市	弥九郎（明応5（1496）・慶長10(1605)）
山　城	三条釜座	京都市中京区	藤原国久（文明10(1478)）など
	洛中	京都市	藤井国安（康暦元(1379)）
	神足	京都府向日市	大工神足掃部清原春広（永正16(1519)）
近　江	長村	愛知郡湖東町	鋳師大工長村道欽（康暦元(1379)）
	辻村	栗太郡栗東町	大工高野大夫紀広行入道沙弥文浄（正長元(1428)）
	八日市金屋	滋賀県八日市市	大工八日市五郎兵衛　小工兵衛太郎（文明16(1484)）
	宮野	高島郡新旭町	宮野助衛中司藤原朝臣吉仲（天文3（1534））

（4） 鍋 A・鍋 B

1 鍋　　A（図15・16）

鋳鉄鋳物の鍋Aの出土例は，断片的なものを含めるならば非常に多いが，全体の器形のわかるものは比較的少ない。また，鍋Aの形状をした伝世品は，羽釜と比較して極端に少なく，やや特殊なものも資料として活用する。また，羽釜のように型式を設定して，地域性を考案できるような特徴も乏しく，今後の資料増加にまつところが大きい。

まず，西日本を中心とする地域において，中世に鋳鉄鋳物の煮炊具として生産流通したのは，鍋Aではないかと考える。その古い良好な遺品は乏しいが，特殊なものとして俊乗坊重源の作事にかかわるものとみられる「湯釜」が，滋賀県大津市園城寺，岡山県総社市新山寺跡，山口県防府市阿弥陀寺に遺存している（図15）。これらについては，すでに小林剛，江谷寛によって紹介研究されており［小林1971，江谷1976］，12世紀の末ごろに横方向のみならず縦方向にも分割した鋳型を結合して鋳込む方法で製作されたもので，浴室にとりつけられた湯沸かし用の煮沸用具とみられる。口縁部の屈曲が2段になっている点において，通常の鍋Aとやや異なるが，鍋Aの系列の古い製品群と考える。器形について検討すると，胴部から底部にかけて，半球形に近い形態をなし，口径に対してかなり深い形態を示しており，その後の出土品の鍋Aと比較すると，型式学的にみて先行する形態とみてよい。

大阪府南河内郡美原町真福寺遺跡出土鋳型は，13世紀後半の資料であり，底部がやや扁平ながら，胴部から底部にかけて，ゆるやかに曲線をえがき，その境目が不明瞭な形態を復原できる。また，口縁部の屈曲も小さく丸い形状を示す。本例は，あるいは，『新猿楽記』や『庭訓往来』に記載された「河内鍋」の形態を示すものである可能性がある。また，把手と片口がつくが，鎌倉時代末期とされる愛媛県西条市真導廃寺経塚出土例，大分県大野郡犬飼町表B遺跡例なども，形態が類似し，ほぼ13世紀後半から14世紀にかけての製品と考えられる。

その後，大阪府泉大津市の豊中遺跡例や太宰府史跡第33次調査出土例のように，底部は直線的になり，底部と胴部の屈曲が徐々にするどくなる。また，それとともに口縁部の丸みをおびた屈曲は徐々に失われ，小さな屈曲の後，直線的に斜めに立ち上がる形態を示すようになる。また，中世の終末ごろには，口縁の屈曲がほとんど失われる。そして，底部と胴部の境目における径の口縁の径に対する比率が低下し，底すぼまりの形態に変化する。そして，胴部長に対して口縁部の長さが増加し，中世末から近世のはじめには，広島県比婆郡東城町の帝釈雄橋野呂第2号洞窟遺跡出土例のような形態となる。以上の一連の変化は，西日本各地の土製鍋の形態変化に類似した型式変化といえよう。

鍋Aは，九州，山陽道，畿内，北陸に確実に出土しており，西日本各地に広範囲に分布していたものと考える。また，12世紀以降，中世の終末にいたる間に，ほぼ等しい形態の変化を示すものと考えられる。

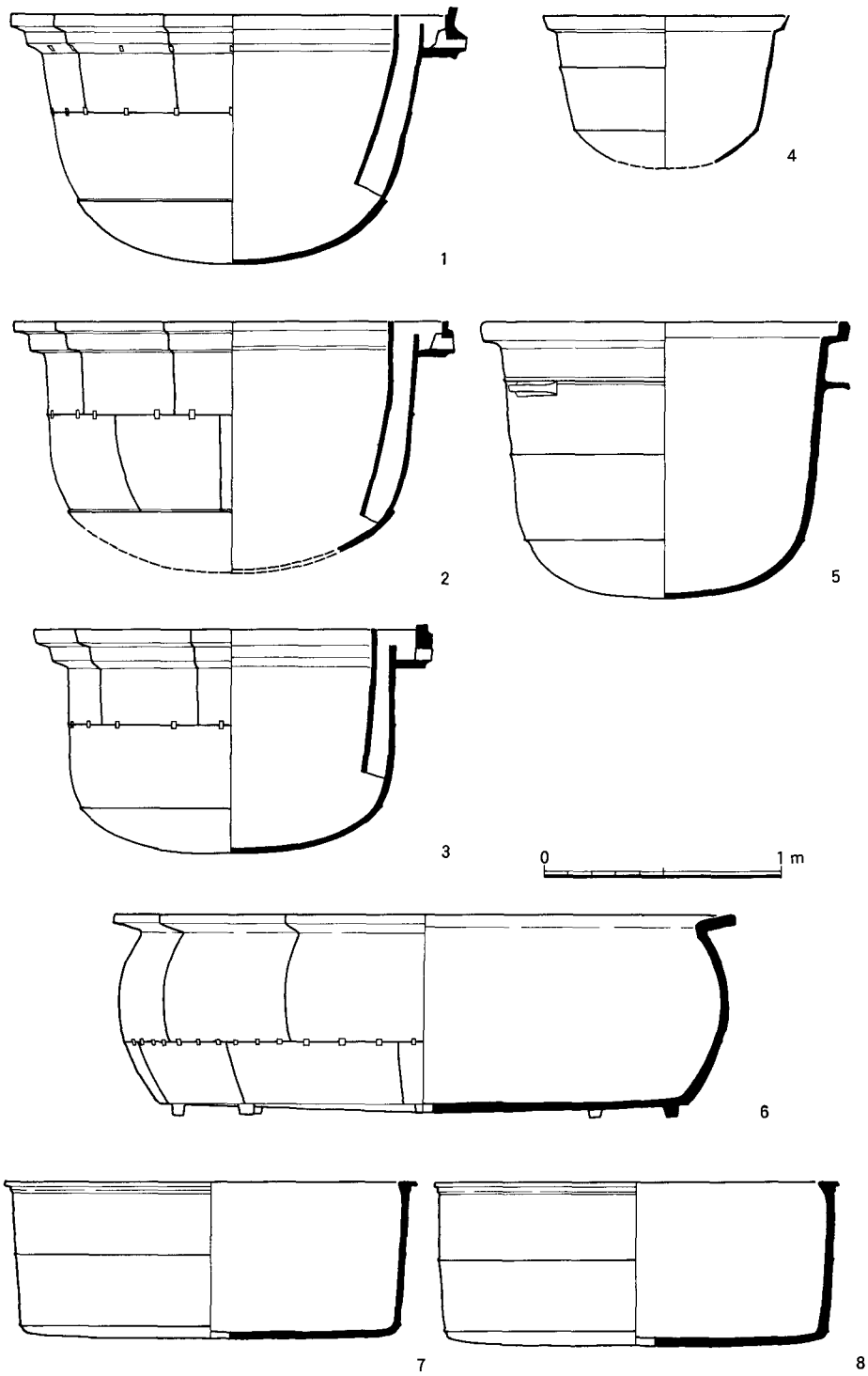


図15　伝世鍋Aと湯船

1山口・阿弥陀寺　2岡山・新山寺跡　3滋賀・園城寺
4神奈川・建長寺（青銅）　5山形・黄金堂　6奈良・東大寺　建久8(1197)
7京都・智恩寺　正応3(1290)　8京都・成相寺　正応3(1290)

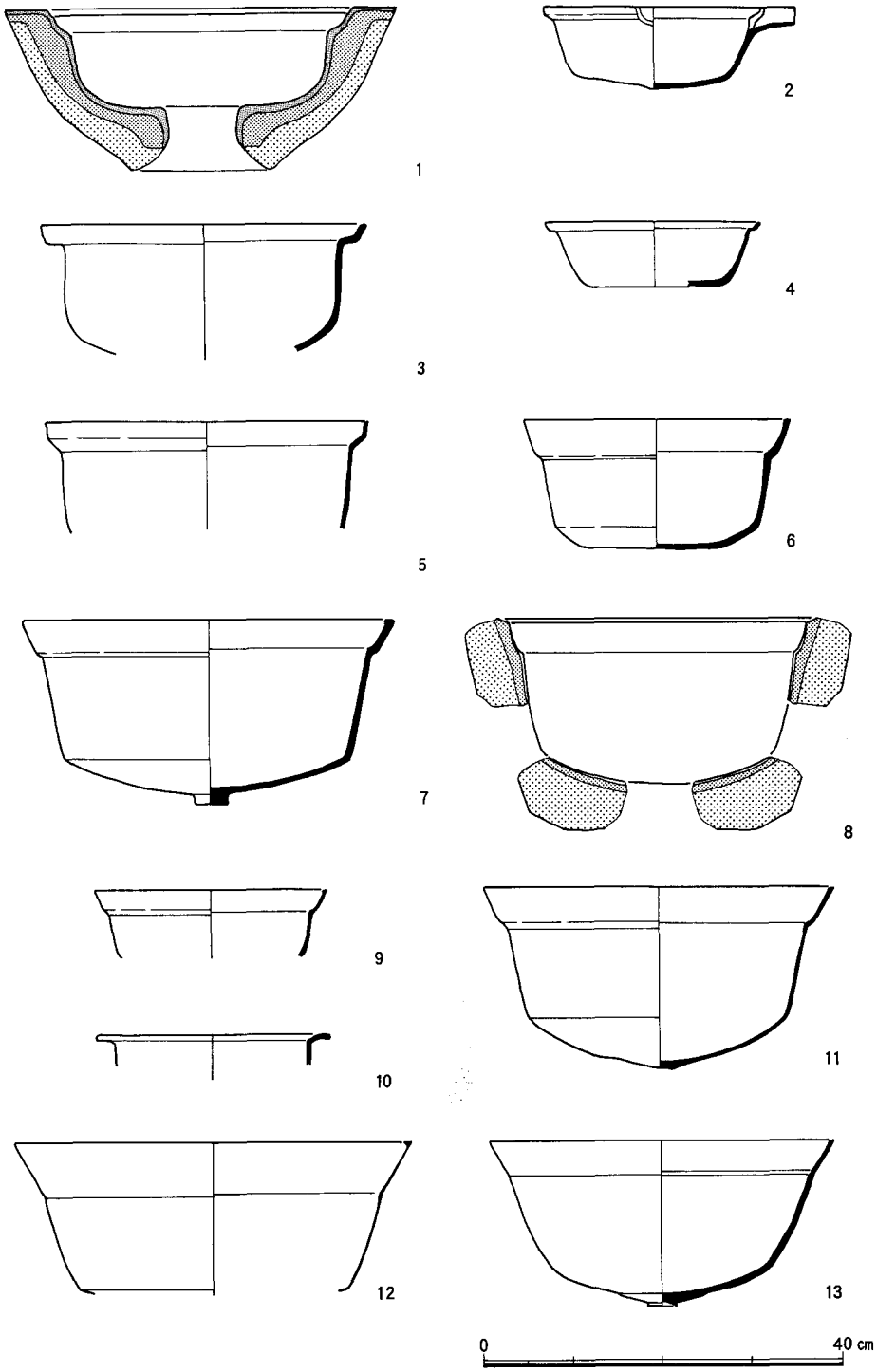


図16　遺跡出土の鍋A

1大阪・真福寺遺跡　2愛媛・真導廃寺経塚　3大分・表B遺跡　4広島・草戸千軒町遺跡
5石川・三木だいもん遺跡　6大分・深水邸　7大阪・豊中遺跡　8滋賀・軽野正境遺跡
9広島・草戸千軒町遺跡　10三重・宮地遺跡　11福岡・太宰府　12富山・日の宮遺跡
13広島・帝釈峡遺跡

2　鍋　　B（図17）

対向する位置に吊耳をもつ鍋Bには，底部にまずまちがいなく短い三足がつく。また，蓋受けの屈曲のあるものや，片口のつくものもある。

出土資料のいずれにも，吊耳と鍋本体の境目に明瞭な鋳張り，すなわち鋳型の継目の痕跡が残っている。田辺律子によれば，鳥取県倉吉市の鋳物師の民俗例では，この吊耳の部分は「耳くりカンナ」と呼ばれる道具によって鍋鋳型本体に耳の形にすき間を作り，粘土の小塊を耳穴の数だけ，その空き間に詰めるという［倉吉市教委1986p.68］。しかし，大阪市中央区道修町で発見された15世紀の鋳造工房の遺跡（大坂城跡OS86-20次調査）や福島県伊達郡川俣町川俣城跡の近世末の鋳造遺跡では，別作りの吊耳部の鋳型が出土している。吊耳の形状には，楕円形を半截した形，くり込みをもった花弁状の形，直線的なものなど，各種の形態があり，別作りの耳の鋳型を本体の鋳型にイケコミ(5)によって埋設し，鋳込みをおこなうのが一般的であり，倉吉の民俗例は，それが簡略化されたものではないかと考える。また，全体の器形の形態変化として，底部と胴部の屈曲が次第に明瞭になるようである。

この鍋Bの年代については，14世紀よりも以前に確実にさかのぼるものの発見例がないようであり，中世の古い段階には鍋Bが出現していたという形跡は薄い。福井市の一乗谷朝倉氏遺跡では，朝倉氏館や町屋の遺跡から，この鍋Bが多数出土しており，鍋Aが確認されていない。このように，16世紀には鍋Bが盛行していたことが想定できる。また，この鍋にともなう鉄製の鍋弦は，基本的に鍛造品である。広島県福山市の草戸千軒町遺跡では，13世紀にさかのぼる青銅鋳物の弦が出土しているが，これは提子のような青銅製の器物の弦ではないかと考えられる。一方，鍛造鉄製の弦は，草戸千軒町遺跡などに出土例があるが，14世紀以降でないと出現しないという。

また，中世末～近世になれば，関東・東北方面からも鍋Bの出土がみられ，この頃に東国にも，この鍋Bが流入したものと推定できる。

3　絵画資料にみられる鍋（表3）

中世～近世のはじめの絵巻物に現われる鍋について検討してみよう。絵巻物は，当時の京都とその周辺について描かれたものが大半をしめるため，当然のことながら鍋Aと鍋Bが登場するが，次節で述べる東国に分布する内耳のついた鍋Cは明瞭には現われない。また，絵巻に描かれた鍋が鋳鉄製なのか，それとも土製なのか，絵画からは判断できない。しかし，鍋Bの形態の土製品はほとんどみあたらないため，絵巻物に現われた鍋が，鍋Aなのか鍋Bなのかという点を問題として検討したい。

中世においては使用状況を示す場面において，鍋Aも鍋Bも，まずまちがいなく金輪の上に載せて煮炊に供されている。また，吊耳をもち鍋弦をともなう鍋Bが，中世の前半にはあらわれず，中世前半の主要な鍋が，鍋Aであったことを物語っている。そして，鍋Bは，14世紀中葉に成立の真宗本願寺の覚如上人の伝記絵巻『慕帰絵詞』にはじめて登場する。『慕帰絵詞』の写実性は，ぬきんでてすぐれており，家具調度や食器をはじめ厨房のありさまなど，中世半ばの上流階級の

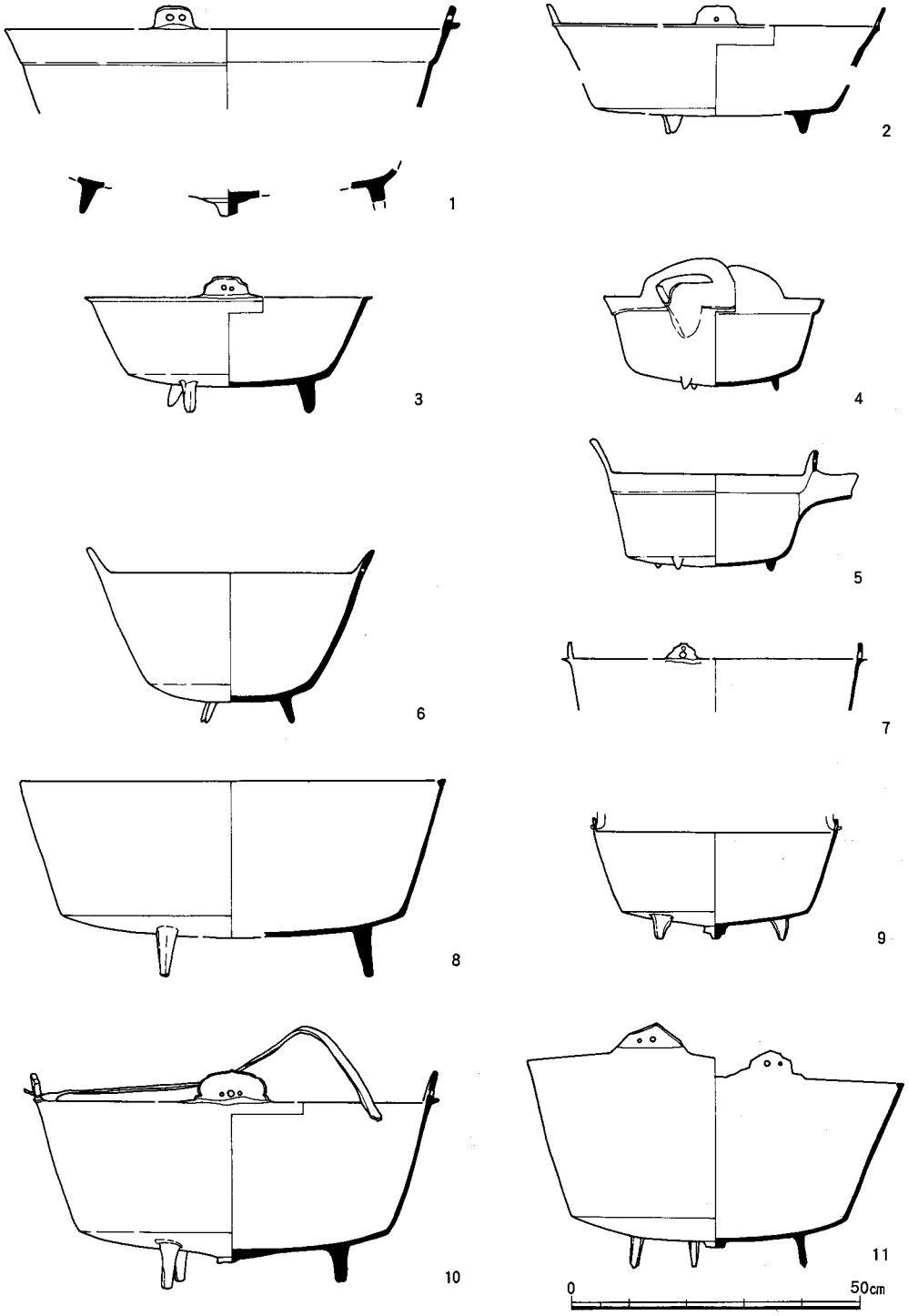


図17　鍋　　B

1 青森・尻八館遺跡　2 石川・大町縄手遺跡　3 青森・浪岡城遺跡
4 千葉・鹿島前遺跡　5 千葉・鹿島前遺跡　6 長野・丸山遺跡
7 兵庫・中尾城跡　8 福井・一乗谷朝倉氏遺跡　9 福井・一乗谷朝倉氏遺跡
10福井・一乗谷朝倉氏遺跡　11大阪・水走遺跡

表3　絵画資料にみえる鍋

絵　　巻	年　代	部分	情　　景	種類
『病草紙』(香雪美術館)	12世紀後半	断簡	いろりの金輪の上，木蓋	鍋A
『粉河寺縁起』	12世紀後半	第1段	庭先の金輪上	鍋A
		第2段	金輪の上	鍋A
『一遍上人絵伝』(歓喜光寺本)	13世紀末	6巻	乞食小屋の中，金輪の上	
		11巻	金輪の上	
『春日権現験記絵』	14世紀初頭	13巻	囲炉裏の金輪の上	
			運搬中で木蓋がつく，底部に湯口	鍋A
		13巻	金輪上，木蓋付	
『慕帰絵』	14世紀中葉	2巻	移動式囲炉裏の中の金輪の上	鍋A
		8巻	囲炉裏の中，木蓋の上に漆器杓子	
		10巻	囲炉裏の中	鍋B
『光明真言絵詞』	14世紀末		金輪のそば，湯口	鍋A
『福富草紙』(春浦院本)	15世紀初頭	下巻	金輪の上，中にひしゃく	
『山王霊験記絵』(頴川美術館)	15世紀初頭	第1段	金輪の上	
『酒飯論絵詞』	室町時代		金輪の上	鍋B
『七十一番職人歌合』	室町時代	6番左	鍋売	鍋B
『筑摩祭図』	16世紀後半		なべかぶりの美女	鍋B
『日親上人徳行図』	16世紀後半		日新なべかぶりの法難	鍋B

生活を詳細に活写したものと考えてよい。

その10巻の覚如が病を得て医者をまねく情景において，病臥する覚如の前面の囲炉裏には，金輪と鉄瓶とともに木蓋をした鍋Bが描かれている。その形状は底部が丸く，屈曲の少ない形態であり，型式的に古い段階のものを描いたとみてよい。その後，室町時代のものとして，『酒飯論絵詞』，『七十一番職人歌合』の鍋売にも鍋Bは登場する。近世のはじめごろのものを加えれば，近江筑摩神社なべかぶりの奇祭を描いた久隅守景の『筑摩祭図』には，吊耳と三足のついた鍋Bがみえる。また，『日親上人徳行図』の「なべかぶりの法難」の情景にも鍋Bが明瞭にみえ(図18)，鍋と明記されたものでは，基本的に鍋Bが登場することに注目したい。

以上のように，鍋Bは絵巻物の検討によっても，中世の半ばごろにあらわれることが十分想定できる。また，中世末～近世には，「鍋」といえば鍋Aではなく，この鍋Bのことをさすように，鍋Bが盛行するにいたったものと推定する。民俗例において，鍋Aを「釜」，鍋Bを「鍋」と呼ぶものがあり［倉吉市教委1986］，鍋の名称についても，今後の検討を要する。

図18 絵巻の鍋B　左『七十一番職人歌合』鍋売，右『筑摩祭図』なべかぶり

（5） 鍋　　C

1　鍋Cの研究史

内面の上端に環状の突起をもち，内耳鍋とよばれている鍋Cの研究史は，古く明治20(1887)年の神田孝平の「内耳鍋の話」から始まる［神田1887］。神田はこのなかで，鉄鍋を使用した人々は，竈を築かないから土着しない民，すなわち満州人であり，これが蝦夷人の手を経て交易されて本土に至ったものと論じた。しかし，坪井正五郎は，東京で生産され八丈島で使用されている内耳鍋の民俗例をあげて，その満州産説に疑問をさしはさんだ［坪井正五郎1887］。その後，馬場脩や桐原健による集成があり［馬場1940，桐原1973］，東北から北海道にかけて出土比率が高く，擦文文化の終末年代をめぐる材料としてとらえられたが，論者によって，その年代は13世紀から近世の初頭という幅のあるものであった［菊池1980，石附1983］，これらの論考においては，鉄鍋そのものへの関心が薄く，その型式変化や製作技術を検討しようとするものがあまりみられなかった。その間，宇田川洋は，鍋の型式分類をおこない［宇田川1969］，最近では，越田賢一郎が，北海道から東北にかけての鉄鍋を集成し，型式分類や編年観に検討を加えた［越田1984］。遺体の頭部に鍋をかぶせる葬風が存在し［上田1887］，鍋A・鍋Bよりも多くの出土例を確認することができるが，全体の器形をうかがうものは多くない。しかし，近年の開発にともなう大規模な遺跡調査によって，その出土例は徐々に増加しており，年代決定のための手続きもすすめられてきている。とくに，岩手県西磐井郡平泉町柳之御所跡では1989年度の調査によって，確実に12世紀にさかのぼる資料もあらわれ［岩手県埋文センター1991，菊池1992］，内耳鍋の研究は新

たな段階に達したといえる。ここで，その形態変化をみる。なお，東日本においても，口縁部に屈曲のある小破片の出土例で，それだけでは鍋Aなのか鍋Cなのか判断できないものも多く，資料一覧では，単に「鍋」と記載した。しかし，この地方で完形品の確実な中世の鍋Aの出土例が確認できないため，その資料の多くは，鍋Cではないかと推定しておく。

2　鍋Cの型式変化（図19～21）

鍋Cの古いものは，青森県古館遺跡出土の11世紀後半～12世紀に位置づけられるものである。小片で全形をうかがうことができないが，口縁部の形態は，屈曲するもの，屈曲の後に直線的に立ち上がるもの，外反して屈曲を持たない形状を示すものなど，各種混在している。最近の調査で発見された平泉柳御所跡出土品は，口縁部が外反する形態を示し，胴部から底部にかけて，曲線を描く形状をしており，底部外面の中央に丸形湯口が残っている。岩手県玉貫遺跡出土例は，13世紀に位置づけられるが，口縁の屈曲が明確であるが，胴部と底部の形状は，柳之御所跡例と類似する。鎌倉市御成町228番—2地点遺跡出土例は，14世紀中葉ごろのものと報告されており，口縁の屈曲もあり，胴部と底部の間の屈曲が明確で，胴部が直線的になっている。本例は底部中央に一文字湯口が残る。これと形態の類似するものには，栃木県塩谷郡栗山村の釜八幡神社御神体の鍋C，青森県南津軽郡浪岡町浪岡城跡出土例などがある。

いずれも内耳はもたないが，鍋Cを模倣したと思われる儀式用の容器で，紀年銘をもつ資料がいくつか伝世しており，図21に示した。千葉県佐原市香取大社例は，茶釜で有名な天命の鋳物師伴田藤右衛門尉卜部宣重の作品で天文17(1548)年，長野県上田市生島足島神社例（図21-2）は天正15(1587)年，長野県小県郡真田町山家神社例は慶長7(1602)年の銘を，それぞれもっており，生島足島神社のもう1例（図21-4）は，これらよりやや新しいものと考えられる。これらの鍋C形の伝世品が「釜」と呼ばれていることも興味ふかい。

これらの中世末～近世初頭に製作された神事用鍋Cの形態は，口縁部が斜め上方に直線的に伸び，胴部がほぼ鉛直方向に直線的であり，底部にいたる屈曲はきわめて明瞭である。また，口縁部長の胴部長に対する比率が高く，中世半ば以前のものと比較して，口縁部の発達が著しい。これと同様の形態を示すものには，群馬県富岡市本宿・郷土遺跡，長野県松本市中山千石出土品をはじめ，岩手県九戸郡九戸村山根遺跡，茨城県鉾田市烟田遺跡，千葉県我孫子市鹿島前遺跡出土例などがあり，これらが，15世紀～16世紀に位置づけられる。なお，群馬県富岡市本宿・郷土遺跡出土例は，鍋の鋳型から復原したもので，内耳の鍋と推定した。

また，内耳の形状に関しては，これが鍋Bの吊耳のように，鍋本体とともに鋳込まれたものなのかどうか，詳しく検討していないが，次のような特徴を指摘しておきたい。平泉柳之御所遺跡や玉貫遺跡出土品の内耳は，半円形の薄い板に穴をあけたような形状をしている。その後の中世の半ば以降に位置づけられるものにおいては，断面円形の棒状のものをL字状に折曲げた形状となるものが多いようである。また，内耳の個数も，古いものでは，対向する位置にひとつずつあるが，いつしか1個と2個が対向する型式に変化する。吊り下げた時の安定を考えて，創出され

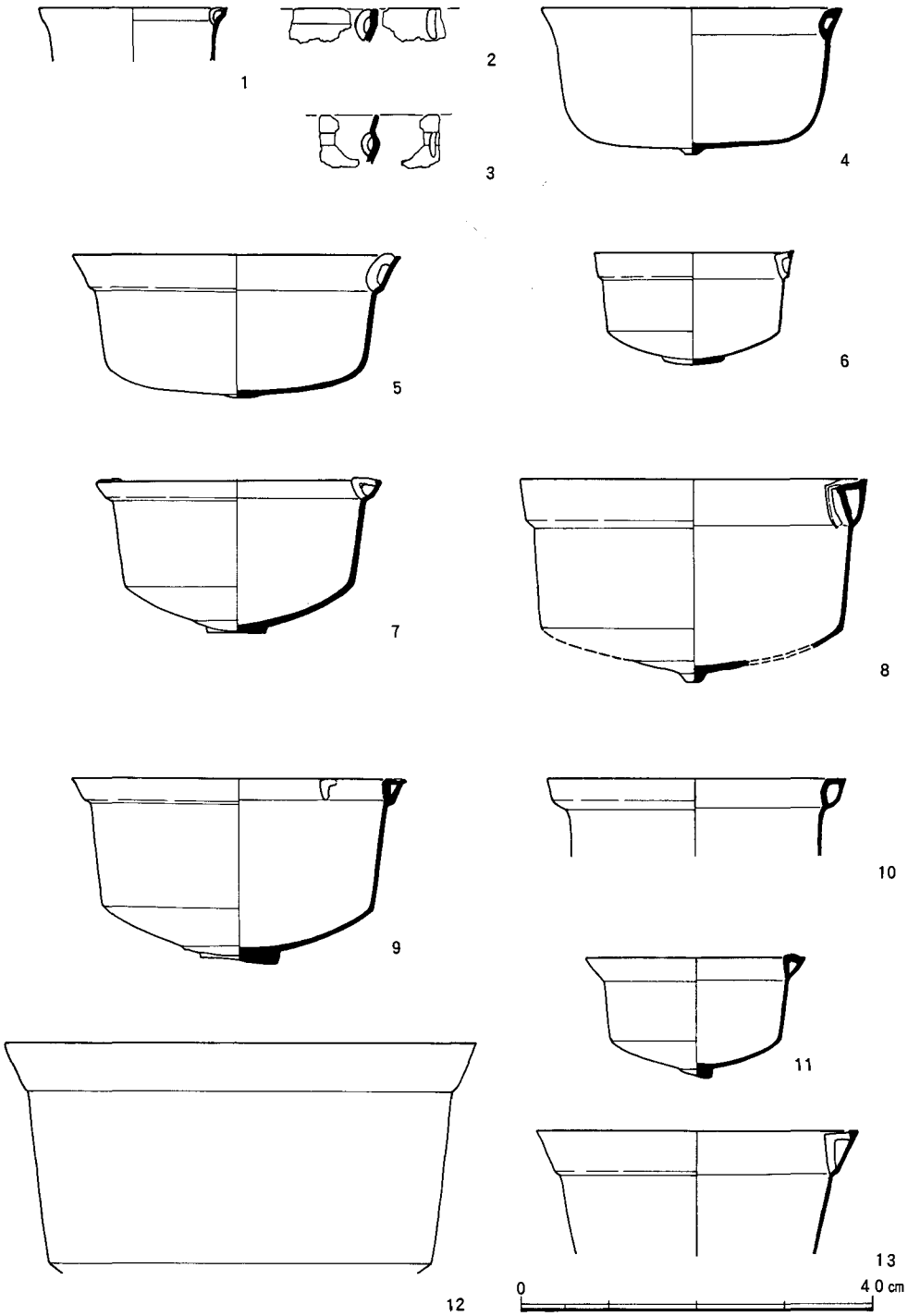


図19　鍋　　C (1)

1～3 青森・古館遺跡　4 岩手・柳之御所遺跡　5 岩手・玉貫遺跡
6 神奈川・鎌倉市街地遺跡　7 青森・浪岡城遺跡　8 栃木・釜八幡神社
9 青森・浪岡城跡　10長野・よきとぎ遺跡　11神奈川・堀ノ内遺跡
12群馬・本宿郷土遺跡　13長野・中山仙石

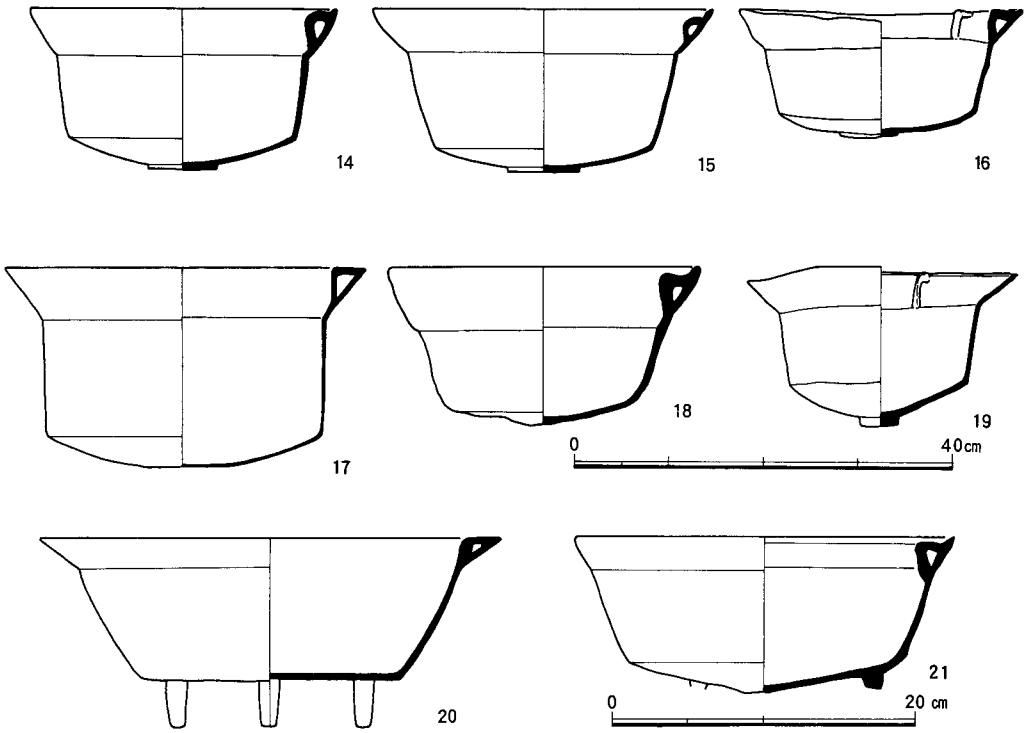


図20　鍋　　C　(2)

14岩手・山根遺跡　15岩手・山根遺跡　16青森・根城跡　17茨城・烟田遺跡
18福島・仙台内前遺跡　19千葉・鹿島前遺跡　20北海道・祝梅　21北海道・遠矢

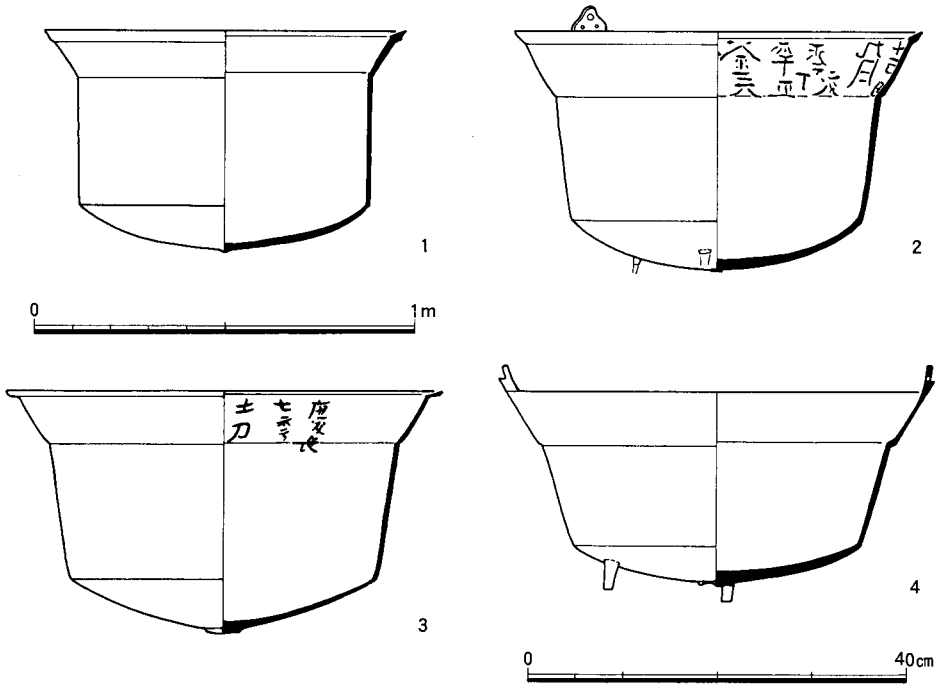


図21　神事用の鍋C

1千葉・香取神宮　天文17(1542)　2長野・生島足島神社　天正15(1587)
3長野・山家神社　慶長7(1602)　4長野・生島足島神社

た工夫とみられる。

以上の資料の出土地点は，関東地方から東北地方の北の端までの広い地域にわたっているが，この変化は普遍的な変化であったと考える。今後，地域差をみいだすべく資料を集成したい。

さて，伝世品のうち生島足島神社蔵例（図21—2・4）には，吊耳と小さい三足がついている。これは明らかに鍋Bの特徴を兼ね備えたといえる。これは，この地方に鍋Bが流入した結果，生じた現象ではなかろうか。そうすると，信濃においては，ほぼ16世紀の後半に鍋Bの流入が始まっていたことが推定される。また，越田賢一郎の教示によれば，北海道の鍋Cには，三足のつくものがあり（図20—20・21），これもまた，鍋Bの流入にともなって，形態を模倣したものではないかと考えられる。こうした製品の年代が確定すれば，東北や北海道に対する鍋Bの流入の時期などが詳しく解明されるだろう。

また，この鍋Cは前述の鍋A・鍋Bと異なって，金輪（五徳）の上に設置して使用するのではなく，吊して使用するものであると推定されている。金輪の出土例は，太宰府第33次調査［九州歴史資料館1975］，兵庫県初田館跡，和歌山県那賀郡岩出町の根来寺NG87区［和歌山県文化財センター1980］などで知られており，やはり西日本に偏在するようである。これは，鍋Cの使用方法が，基本的に金輪をともなわないという推定を傍証するものといえよう。

（6） 鉄　　鉢

1　鉄鉢の研究史

あまり知られていない遺物であるが，金石文の研究者の間では「鉄鉢」と呼ばれ，主として新潟・福島・宮城・山形・岩手の各県を中心に分布している鋳鉄鋳物の器物である。これに関しては，古くは香取秀眞の研究［香取1926］，房総の金石文をはじめとして，金石文資料の収集に大きな足跡を残した篠崎四郎による論考［篠崎1941a・1941b・1949］があるが，いずれも銘文の考証，用途や祭器としての性格に関する考案に重点がおかれており，個々の資料の形態や製作技術に対する検討は進められてこなかった。そして現在も特異な仏具としてとりあげられているのみである［石田1977 pp.313-4］。岡崎譲によれば，青銅や鋳鉄でできた中世の鉢は，その銘文によって「八槻近津宮鉢」・「大鏑矢神社御鉢」・「弥彦御鉢」などの神社に関するもの，「大山寺御仏器」・「恵日寺金堂鉢」・「清水寺御本尊御仏供器」・「大仏殿仏餉鉢」などの寺院系統のもの，「熊野山新宮証誠殿御鉢」・「熊野権現御鉢」のような熊野修験系統のもの，「中禅寺妙見大菩薩御宝前御器」といった日光男体山系統，「芦峅女田御本器」といった立山修験の系統などがあり，修験道のさかんであった地域で用いられた傾向があるという［岡崎1982 p.378］。ここでは，地方的な鋳物生産を検討する視点で，この鉄鉢の形態や銘文のあり方などについて，実物に即した視点からとらえなおしてみようと思う。

2　鉄鉢の諸形態（図22・23・25下）

古代にも底部が丸い鉄鉢があり，須恵器にも模倣された。しかし，中世の鉢の基本は，これと

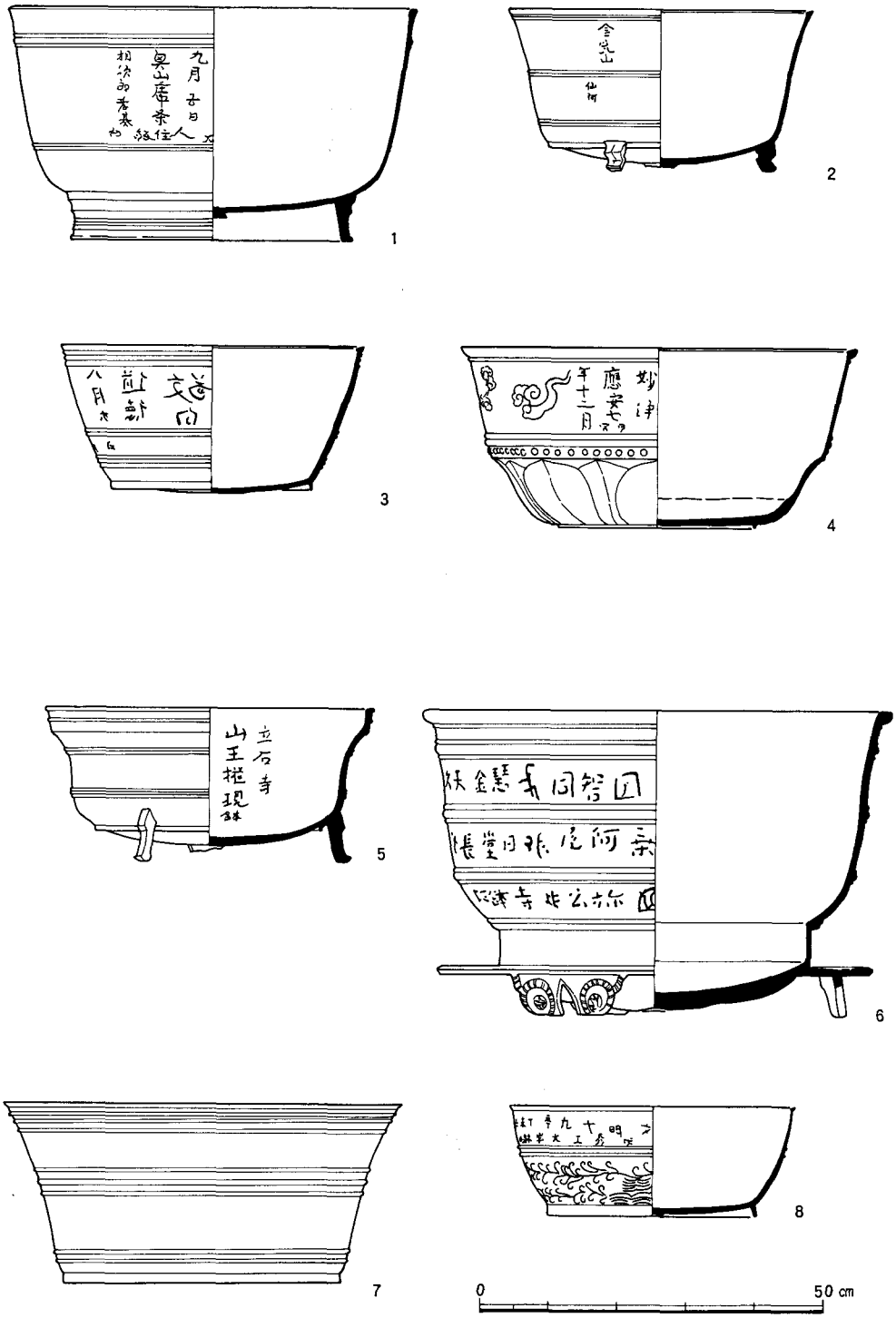


図22　鉄　　鉢 (1)

1 新潟・弥彦神社　嘉暦元(1326)　　2 新潟・金峰神社　元徳3(1331)
3 岩手・黒森神社　建武元(1334)　　4 福島・熊野権現（セゾン美術館蔵）応安7(1375)
5 山形・立石寺　永享7(1435)　　6 福島・慧日寺　永享7(1435)
7 福島・心清水八幡社　応仁2(1468)　　8 福島・大鏑矢神社　文明19(1487)

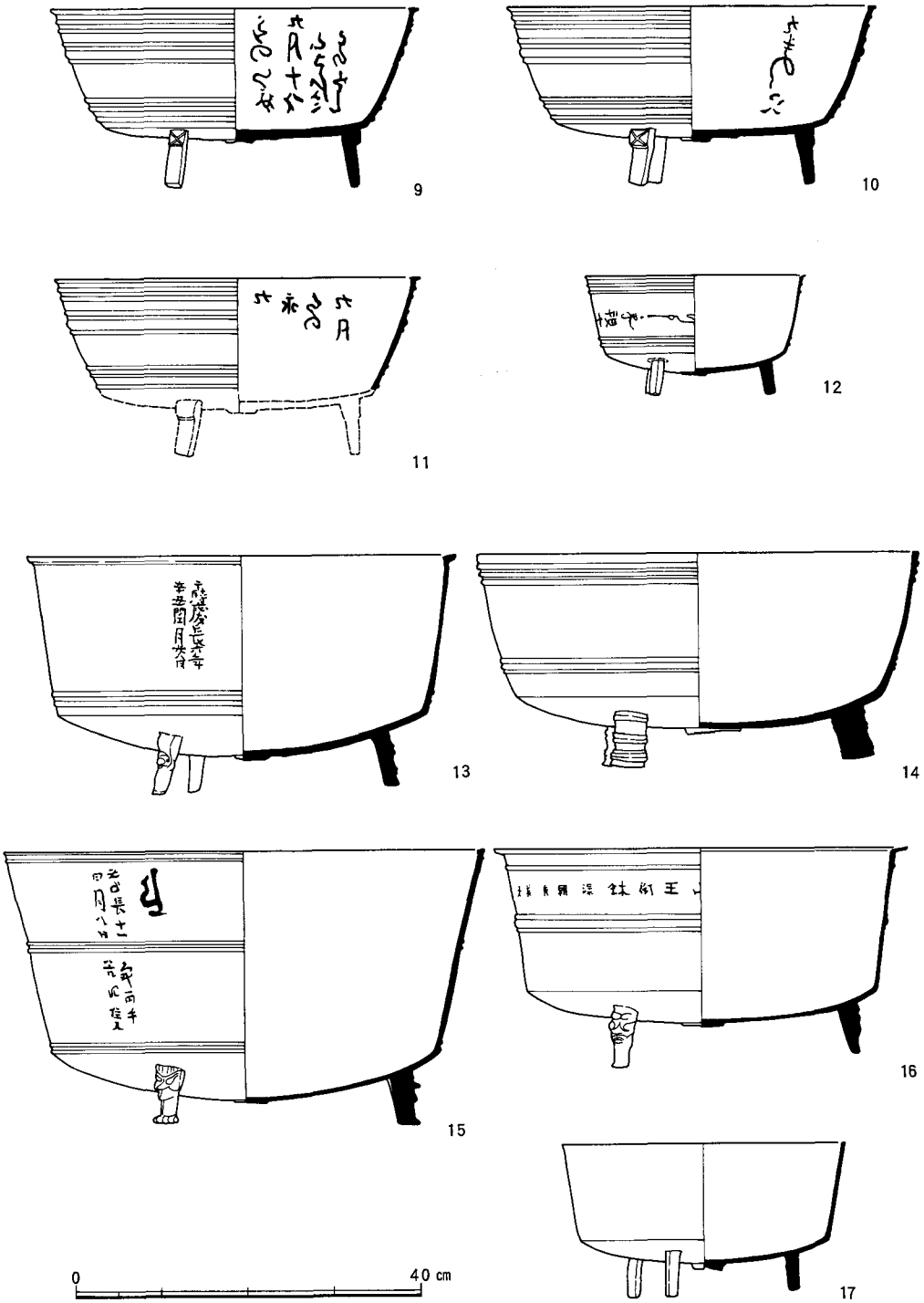


図23 鉄　　鉢 (2)

9山形・熊野神社　永禄10(1567)　　10山形・熊野神社　永禄10(1567)
11山形・熊野神社　永禄10(1567)　　12宮城・大高山神社　永禄11(1568)
13山形・平泉寺　慶長6(1601)　　14岩手・天台寺　慶長8(1603)
15山形・慈恩寺　慶長11(1606)　　16山形・宝光院　慶長16(1611)
17山形・國井董氏所蔵

異なって，高台のついた椀形の青銅もしくは鋳鉄の鋳物である。鉢部と受け台が合体して，こうした器形が生まれたという説もある。青銅製の高野山金剛峰寺鉢は，銘文をもつものの最古例で，建久8(1197)年銘がある。伊豆に現存する安貞2(1228)年銘の青銅鉢には，銘文に「佛性鉢」とあり，鎌倉時代から「仏性（餉）鉢」という名称のあったことがわかる。

鋳鉄鋳物の鉢の遺物は，ほとんどが伝世品である。この遺品は，ほぼ口径が40～50cmで，基本的に椀部と脚部で構成されており，外面を凸線で区画し，文字や文様などの装飾を加えるものが多い。しかし，その細部については，実に様々な形態のものがある。まず，新潟県西蒲原郡弥彦村の弥彦神社蔵品は，銘文のある最古の鉄鉢であり，椀形の器体に，高台のつくものである。これは，青銅の鉢を鋳鉄という材料で，そのまま製作したものである。そのほか，新潟県北蒲原郡黒川村の金峰神社鉄鉢や山形市立石寺鉄鉢には，高台とともに三脚がついており，高台は浮き上がった状態で用をなしていない。

また，福島県耶麻郡磐梯町の恵日寺鉄鉢は，高台付の鉢が円形の台上に載った形態であり，なおかつ特異な形態と文様の付された三脚がつく。また，セゾン美術館蔵で，もと福島県喜多方市にあった熊野権現鉢は，小さな高台をもつが，上半を文字と優美な飛雲文様でかざり，下部には蓮弁文がつく。また，福島県田村郡船引町の大鏑矢神社鉄鉢は，やや扁平で高台のつくものであるが，流麗な唐草文で飾っている。この鉢は郡山市の日矢田の大工の作品である［坪井良平1970 p.274］。このように，福島県の会津盆地や郡山盆地には，形態的な統一に欠け，個性的で装飾の華美な鉄鉢がめだっている。

さて，山形・宮城・岩手の各県には，16世紀～17世紀の資料があり，それらは椀形の底部に三脚のついた画一的形態を示す。凸線は時代が降るにしたがって，盛り上がりを欠けた形状のものとなり，胴部が丸みを失って直線的に変化してゆく。山形県寒河江市國井董氏蔵品は，年代が確定できないが，三脚が簡素な棒状を示し，凸線や銘文を失っており，この型式の鉄鉢の最終末のものと考えられる。三脚の形態は，鍋Bについているような形状のものではなく，形式化しているものの，獣脚の形態をとどめているものがあることに注意したい。

山形市の立石寺蔵鉄鉢や山形県寒河江市熊野神社の3点においては，内面に銘文がつけられていることにも注目したい。鋳鉄鋳物で内面に銘文をつけるものは，儀式用途の鍋Cや鍋Aの形態である。すでに紹介した儀式用の鍋Cのうち，千葉県香取大社，長野県生島足島神社・真田神社の釜では，内面に陽鋳の銘文がある。これは，羽釜のように煙よけを果たす鍔がなく，煮沸によって外面が煤けるため，内面に銘文をほどこしたのであろう。また，近世のものながら，能登半島の各地に残る湯釜など，鍋Aの形態を示す湯立て釜も，内面に銘文をもっている。つまり，内面における銘文の存在は，煮沸形態との関連が想定できるのである。そして，こうした三脚付の鉄鉢の祖型は，さきに述べた古代の鍋Iなどを念頭において，今後検討をすすめるべきではなかろうか。

また，岩手県宮古市黒森神社・山形県寒河江市熊野神社・岩手県二戸郡浄法寺町天台寺の鉄鉢

では，銘文がすべて左字になっている。こうした例は，他の鋳鉄鋳物にはほとんどない。そのままでは判読しづらいにもかかわらず，こうした銘文をつけたのは，文字の内容はさておき，文字そのものに対する宗教性が存在したからかもしれない。

この鉢は，本来は青銅製であるべき仏具を鉄で作るというのみならず，さらに東国人の嗜好や伝統によって改変してゆくといった興味ある産物として，注目すべきであろう。また，鉄仏も東国を中心に分布し，鉄鉢と同様の性格をもつものではないかと考えられるが，佐藤昭夫は，鉄仏が作られたのは，「鉄という素材に対する信頼感」を指摘している。すなわち，鳥取県西伯郡大山町大山寺鉄厨子の銘文「鉄厨子　奉安置之　是無窮之計也」の文言に示されたように，鉄が銅よりも火災に強く，無窮のものを.作ろうとしたのが一因ではないかという［佐藤1978 pp.117-137］。しかし，本稿でとりあげた基本的に実用の鋳鉄鋳物でなくとも，鋳鉄は錆やすさをまぬがれることはできない。佐藤は同時に，東国武士たちのなかに流れる粗野ではあるが力強い気質や嗜好がはたらいて，こうした作品を生みだしたものではないかと指摘しているが，傾聴すべき見解である。また，日本中世の東国と西国の違いに関しては，網野善彦の広い視野にたった考察があり［網野1982］，そのような視点を発展させるためにも，鉄鉢資料のさらなる検討が必要であろう。

（7） 古代・中世の鋳鉄製煮沸用具の変遷と地域性

最後に1章のまとめとして，羽釜・鍋A・鍋B・鍋I・鍋Cなどの年代や分布，土製の煮炊容具との関連など，古代・中世煮炊具の変遷と地域性について検討をくわえることとする。

1　古代の羽釜と鍋I（図24）

古代の羽釜や鍋の形態や分布などについては，資料は僅少であるが，畿内を中心に8世紀には羽釜の生産がはじめられたものと推定する。8～9世紀には緑釉陶器の羽釜模倣形態があるが，こうした施釉陶器による模倣自体が，鋳鉄鋳物の生産と普及が限定されたものであったことをものがたっている。

さらに，9世紀を中心とする東北・北陸の鋳造遺跡においては，羽釜・鍋Iの生産が確認される。10世紀には，甕形土器に鍔を付加したものでなく，羽釜に近い形態の菅原正明のいう摂津C型・和泉C型が現われた［菅原1983］。それは，平安前期よりも実用の煮炊具として，鋳鉄鋳物羽釜の生産と供給が広まったことを示すものではなかろうか。信濃・上野のような地方においても，鋳鉄鋳物と土製の模倣品が併用されたことが判明する。しかし，東国を中心とする地方では，土製の煮沸形態が，徐々に衰退している。鋳鉄鋳物と土製の煮沸形態の補完関係は，地域によって異なっていたとみられるが，東国においては安定した鋳鉄鋳物の供給がおこなわれるようになったためであろう。

2　中世の羽釜と鍋A・鍋B（図24）

羽　釜　　消費遺跡出土の羽釜は，畿内とその周辺部しか確認されていない。その東限は，岐

阜県郡上郡八幡町であり，中世半ばの山城型とみられる。近畿地方以外の伝世品として，神奈川県・静岡県・山口県に残るが，いずれも大型品であり，特殊な目的のため製作・供給された可能性が高い。石川県小松市林遺跡検出鋳造遺跡でも，11世紀末～12世紀に羽釜が鋳造されているが，やはり羽釜の生産は畿内中心ではなかったかと考えられる。菅原正明のいう河内Ｊ２型の土釜や京都系の瓦器羽釜などは，鋳鉄鋳物の羽釜をかなり忠実にまねている［菅原1988］。

鍋　A　中世の河内・和泉地方では，土製の鍋形の煮沸形態が欠如している。河内周辺における鋳鉄製の鍋Ａの生産と供給量が，ずばぬけて高い水準を維持していたことを示すものと考える。『新猿楽記』や『庭訓往来』に記載された「河内鍋」とは，こうした鍋Ａを語ったものであろう。西日本各地の土製の鍋形態には，鋳鉄鋳物の鍋Ａの変化と併行するものが多く，鋳鉄鋳物の鍋Ａの普遍的な生産・流通があったものとみてよい。羽釜と鍋Ａの土製の定形的煮炊形態は，多くの地方で，ほぼ12世紀に成立している。

鍋　B　鍋Ｂを模倣した土製品は少ないが，草戸千軒町遺跡出土の鍋Ｄに注目したい。この鍋Ｄは，内面についた耳状突起や穴の形状が，鋳鉄鋳物の鍋Ｂの吊耳に酷似しており，鍋Ｂの模倣形態ではないかと考える。また，その盛行年代がⅣ期（15世紀）とみられることも，鍋Ｂの後出性と矛盾しない。瀬戸内地方でも，このころに鍋Ｂの流通があった間接的な証拠ではないかと考える。

3　鍋　　C（図25上）

青森県八戸市熊野堂遺跡からは，10世紀中葉の鍋が出土しているという［三浦1990］。再検討の余地が大きく，これをのぞけば，鍋Ｃは東北地方では，11世紀末～12世紀の時期に出現しており，近世はじめごろまでの形態変化を追うことができた。関東地方や信濃も，基本的に鍋Ｃの文化圏である。岐阜県郡上郡八幡町穀見塚前遺跡では，資料は失われているが，羽釜とともに鍋Ｃが出土したという報告があり，これが鍋Ｃの分布の西端である。形態の基本は，鍋Ａと大きくちがわない形態であるが，口縁形態の細部や使用方法に違いがあると考える。

鎌倉のような西国的な文物を大量に取り入れている政治都市の場合［馬渕1987］をのぞけば，中世前半には東国では土製の鍋がなく，鋳鉄鋳物の鍋Ｃよりほかに煮沸形態は考えられない。在地鋳物師による生産と供給が安定した状態であったとみられる。中部高地や北陸も同様の状況と推定される。土製の内耳鍋が，15～16世紀に広く東日本の南部に広がるが，鍋Ｃの資料数はそれ以前より多く，梵鐘などの製作もむしろ活発化する傾向があり，鋳物師の東国における鋳物生産が，とくにこの時期に低下したという積極的根拠はみいだせない。

4　儀式用の湯釜の諸形態

湯立て神事に使用された近世以降の湯釜には，その地方の中世にさかのぼりうる煮沸形態の伝統的形態をとどめているものが多いのではないかと考える。純粋な鍋Ｂの形態をもった近世の儀式用羽釜は現在のところ確認していない。これは，鍋Ｂの伝統が，羽釜や鍋Ａよりも新しいことを示す有力な証拠ではないかと推定できる。

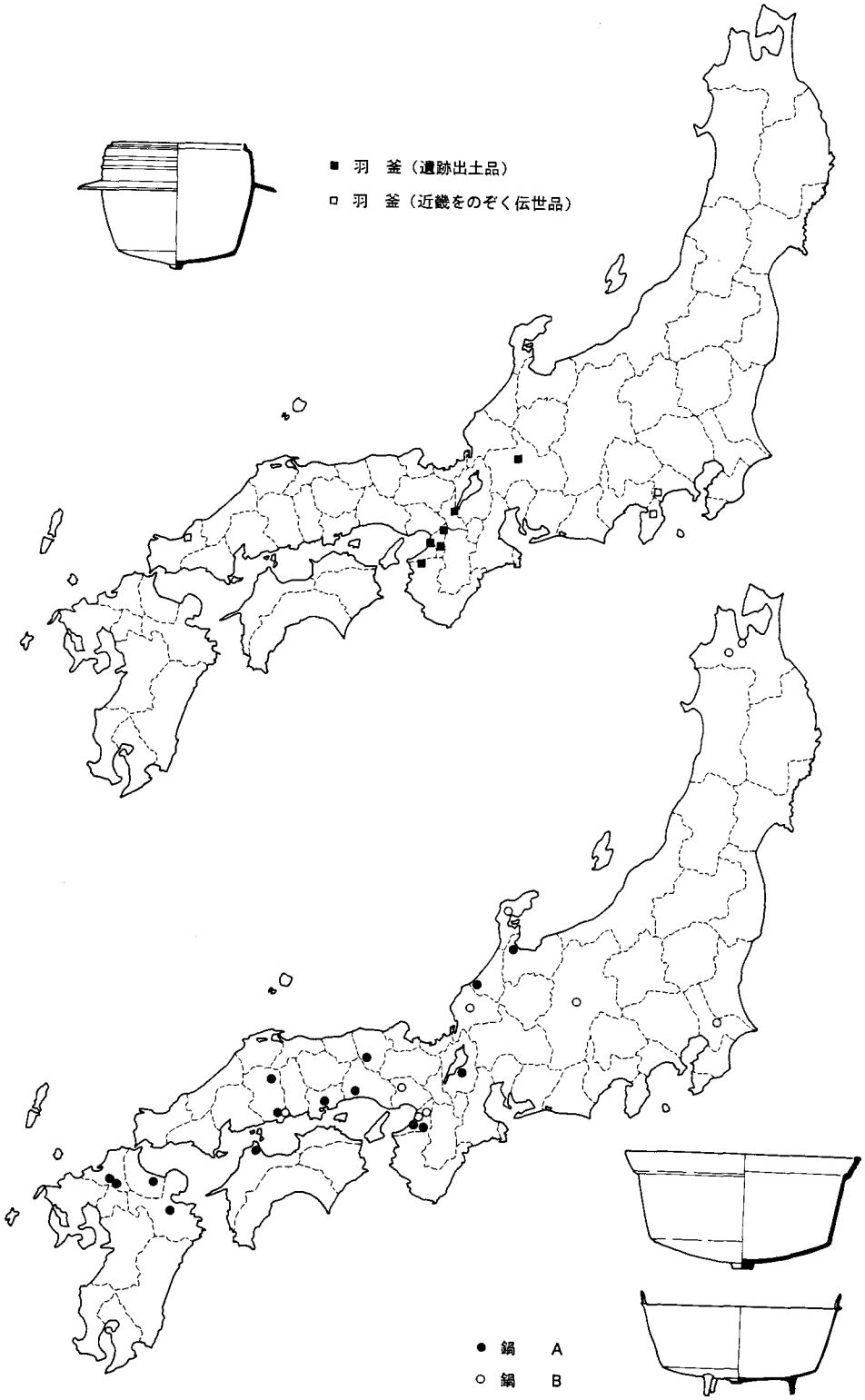


図24　中世の羽釜と鍋A・鍋Bの分布

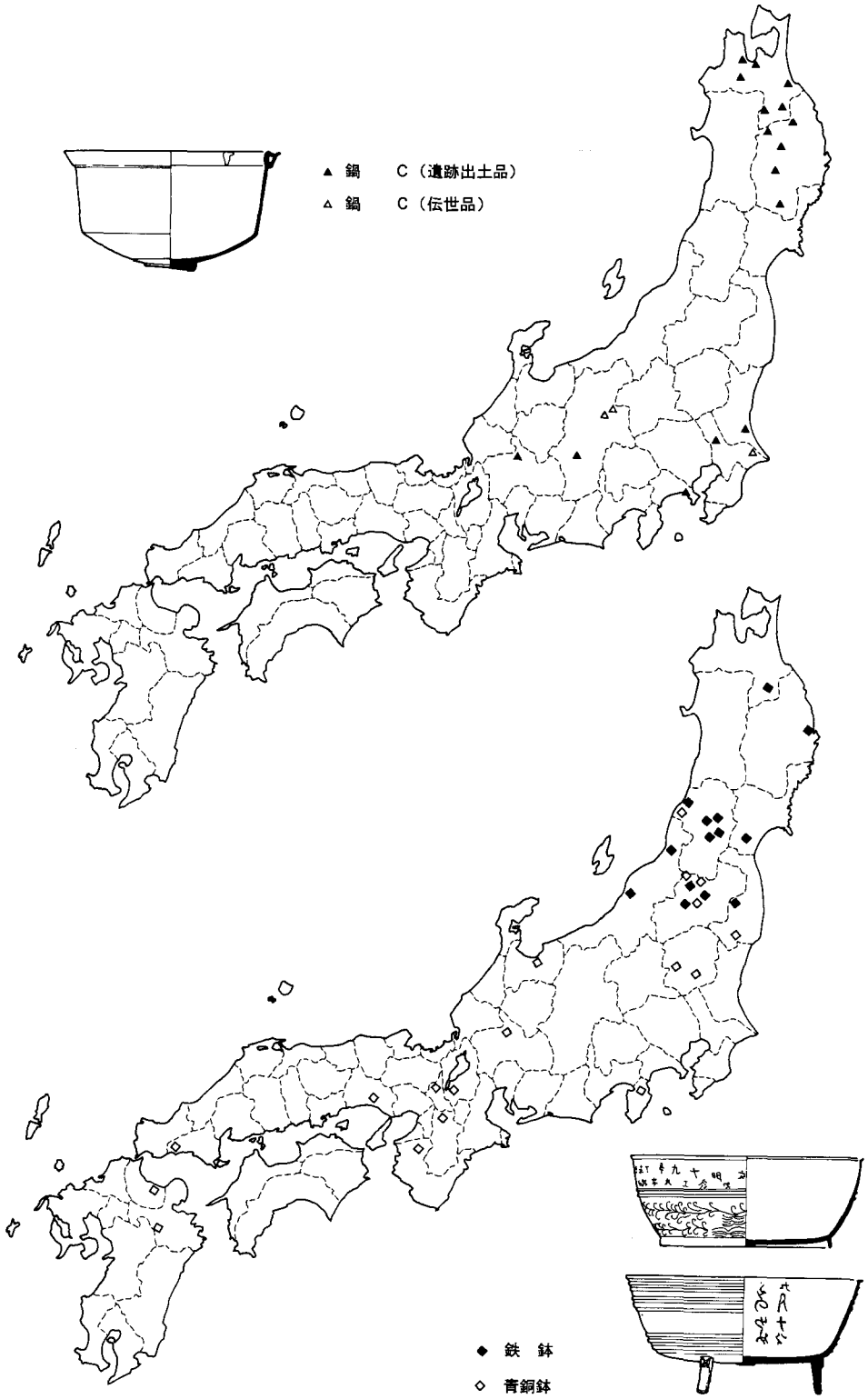


図25　鍋Cと鉄鉢の分布

近畿地方では，湯釜はほぼ羽釜である。しかし，広島県の山間部や鳥取県では，鍋Aが使用されている。また，北陸能登では鍋Aの多数の遺品が残っている。これらの地方では，あるいは中世における羽釜の普及がおくれていたのではなかろうか。また，東海道に沿った地域や日光東照宮では羽釜がみられる。(6) これは江戸開幕以降，西の影響がおよんだためかもしれない。東海地方は西と東のはざまにあって，双方の影響を受けた地方であった可能性がある。このほか，信濃の鍋Cの遺品については，前述のとおりである。

5 小　　詰

以上のように，中世において羽釜は，畿内とその周辺部というやや局限された地域に生産・消費され，西日本では，鍋Aが主体であった。一方，東国では，鍋Aと形態は類似するが内耳をもち使用方法を異にする鍋Cが生産・消費された。これは全国的にほぼ12世紀には確立し，鋳鉄鋳物の中世的煮炊具の基本となった。そして，中世の半ばのほぼ14世紀には，鍋Bが西日本に出現し，次第に鍋Aに交替していったとみられる。中世後半～近世に至って鍋の本流は鍋Bとなり，西国も東国においても，鍋Bと羽釜を「鍋釜」と並列させて呼んで使用する形態が徐々に確立したのである。

2　鋳鉄鋳物の生産工房と生産の変遷

（1）　古代・中世の鋳造遺跡

最近，全国的に鋳造遺跡の発見があいついでおり，古代～近世の鋳造工房の構造が発掘調査によって徐々に解明されつつある。そして，こうした歴史時代の鋳造遺跡を材料にして，鋳物生産の歴史を検討する機が熟してきたといってもよい［鋳造遺跡研1991・1992］。

これまでに発見されている鋳造遺跡のうち，最もよく知られているのが，梵鐘の鋳造遺構である。これは，梵鐘が通常の鋳物と比較して大型であり，鋳型を設置する鋳造坑を必要とするので，鋳造の場がきわめて明確に検出されるためである［京都府埋文センター1982，石野ほか1984，神崎1992］。この梵鐘鋳造遺構は，継続的に生産をおこなった工房のなかにいとなまれた場合のほかに，寺院などの需要者の境内やその外郭の地に臨時の作業場をもうける，いわゆる「出吹き」の場合があり，それを峻別する必要がある。

また，鋳型そのものは軟弱な土と砂の塊であり，特殊なものをのぞけば土師器以下の脆さをもったしろものである。形態の複雑なものは堅く，単純な形態を示す鍋や釜の鋳型は脆い傾向があるようである。また，鋳型からわかる鋳物製品種類や数量は，その工房の性格を考えるうえで，重要な検討材料になるものと考えられる。このほか，大型の溶解炉が使用された場合は，かなりの量の炉壁が出土する。一方，小型の鋳物を鋳造する場合には，小型の溶解装置でよい。おのずと，これにともなう鞴の形態も異なることも十分推定できる。

まず，鋳鉄鋳物を確実に生産していたと思われる古代・中世の工房遺跡の調査例について，重

要なものを紹介し，その性格を比較検討する（図26）。

向田A遺跡　福島県相馬郡新地町［福島県教育委員会1989］

丘陵上に広がる製鉄を基本とする遺跡群のなかにあり，製鉄炉，木炭窯および鍛冶遺構をともなっている。羽釜・鍋Ⅰ・獣脚・梵鐘・火舎などの鋳型が大量に出土し，鋳鉄鋳物を生産している。8世紀末～9世紀の操業と考えられる。同相馬郡武井遺跡，相馬市大坪の山田A遺跡なども同質の遺跡群としてとらえられる。東北には鉄鐘の出土例があり，かなり普遍的に製作されていたものと考えられる。

上野南ⅡB遺跡　富山県射水郡小杉町上野［小杉町教委1991］

小杉町南部の射水丘陵に散在する古代の生産遺跡群のひとつであり，須恵器窯，製鉄炉，木炭窯などの遺構が多数散在し，そのなかで羽釜・鍋Ⅰ・獣脚・梵鐘の鋳型が出土する地点のひとつである。9世紀後半に操業されたものと推定される。周辺には，綿打池遺跡［林寺1986］，恩坊池遺跡・ハシロ遺跡［小杉町教委1988］，内山三熊窯跡など，時期や遺構・遺物の類似する一連の遺跡がある。

寺前遺跡A－2区　新潟県三島郡出雲崎町上中条［新潟県文化行政課1990pp.1，10］

12世紀～13世紀とみられる鋳造工房が，領主層と考えられる屋敷まわりにあり，木製品も多量に出土し挽物工房も併設されている。鍋の鋳型や溶解炉が多数出土し，主として鋳鉄鋳物を生産しているが，近接地点で梵鐘撞座の鋳型も出土しており，金屋という地名も残る。越後地方の中世前半の領主と手工業生産とのあり方を示す貴重な遺跡である。

金井遺跡B区　埼玉県坂戸市大字深堀［赤熊1991］

関東で初めて発見された中世前半の広大な鋳造工房跡。鍋，梵鐘，獣脚，仏像などの鋳型や溶解炉などが出土し，鋳造坑や建物などが検出されている。また，出土鋳型や鋳造坑の有無などの遺構のありかたによって，いくつかの単位が認められるという。鋳造と小鍛冶がおこなわれているが，製鉄はおこなっていない。13～14世紀に操業がおこなわれており，調査者は武蔵国入西鋳物師の工房跡と想定している。

真福寺遺跡　大阪府南河内郡美原町下黒山［大阪府教委1986pp.25-30］

長勝寺鐘（建治元(1275)年，坪井梵鐘番号60）の銘文に「大工河内国丹那郡下黒山郷下村住人平久末」とあり，河内鋳物師の有力な本拠地と想定できる。鍋Aの良好な鋳型が出土した。そのほか，梵鐘・鏡などの鋳型があり，鋳造坑が検出されている。鋳鉄鋳物と大型の鋳物を生産したとみられる。13世紀後半の操業。美原町～堺市に広がる日置荘遺跡でも，散発的に鋳型や溶解炉が出土している［大阪府教委1989］。真福寺遺跡を含め，河内丹南の地で検出されている鋳造関係の遺跡の規模は，そう大きくない。

鉾ノ浦遺跡　福岡県太宰府市鉾ノ浦［山本・狭川1987］

13世紀後半の大規模な鋳造遺跡。鍋鋳型のほか，梵鐘，灯籠・仏具など多種多様の器物の鋳型が大量に出土し，鋳鉄鋳物と青銅鋳物の両方が生産されたと想定される。鋳造坑や溶解炉が多数

検出され，梵鐘を中心とする大型鋳物の生産も，活発におこなわれたものとみられる。また，工房内における，材料置場，鋳鉄製作・鋳込みの場などの作業空間も判明している。中世前半の太宰府における中心的な鋳物師の工房の遺跡であろう。

軽野正境遺跡　滋賀県愛知郡秦荘町軽野［秦荘町教委1979］

出土鋳型から，鍋Aのほか羽釜を生産していたことがわかる。明瞭な鋳造坑がないため，大型品の製作はしていないようである。青銅などの銅合金鋳物のスラグや鋳型は出土しておらず，鉄専業らしい。椀形鉄滓が出土しており，鍛冶工程もおこなっていたことも推定できる。中世半ばの近江の地方的な小生産をおこなった工房の遺跡と思われる。付近には，中世以来の鋳物師の長村があり，それとの関連も考えられる。

室 町 遺 跡　福岡県北九州市小倉北区室町［北九州市埋文調査室1991］

15世紀に操業をおこなった鋳造工房。鍋と鋤先の鋳型が出土している。青銅鋳物を生産していた形跡がなく，鋳鉄鋳物中心の操業をおこなったものとみられる。報告者は溶解炉の復原や出土鋳型やスラグの綿密な化学分析によって，鋳造技術の復原をおこなっている。近世に活躍のめだつ小倉鋳物師の前身の鋳物師の遺跡とみられる。

図26　古代・中世の鋳造遺跡

大坂城跡OS86—20　　大阪市中央区道修町［森1988，伊藤幸司1987］

鍋本体の鋳型，鍋Bの吊耳部分の鋳型，鋤先の鋳型をはじめ，擬宝珠と推定される装飾をもった鋳型などが大量に出土した。鋤先については，その製作実験がおこなわれている。また，小型の坩堝のほか，大型の溶解炉も出土している。この工房では，鋳鉄鋳物の日用煮炊具や農具のほかに，仏具とみられる青銅鋳物をともに生産していた。豊臣氏大坂城よりも古い時期，ほぼ15世紀に操業をおこなっていたものとみられる。

堺環濠都市遺跡SKT153　　大阪府堺市九間町［堺市教委1990］

中世都市堺の中心部からやや離れた大規模な溝の外に立地した鋳造工房の遺跡。16世紀末～17世紀の操業とみられる。タガを巻き付けた鍋や羽釜の鋳型，取瓶，溶解炉の残片のほか，羽釜・鉄瓶などの未製品が出土している。また，鋳型製作に使用されたとみられる三叉状土製品も出土しており，中世末～近世の鋳造技術復原の貴重な資料である［五十川1992］。近世には市街地からやや離れた地域に，工房が立地するようになるという。

（2）　鋳鉄鋳物生産工房の特徴

1　工房の形態と立地

鋳鉄鋳物を生産していた遺跡には，基本的に出吹きとおぼしきものがない。いずれも，継続的鋳造工房の遺跡である。古代においては，製鉄・精錬をおこなった工房に付属して，鋳鉄鋳物の羽釜・鍋Ⅰ・獣脚・梵鐘などの鋳造がおこなわれている。主要な材料である地金の生産に依存した形態である。しかし，12世紀以降の中世の鋳造工房においては，鋳型製作・地金溶解・鋳込みがおこなわれるものが一般的となってきた。また，新潟県寺前遺跡のように，別種の手工業者とともに領主の本拠に囲いこまれた形態のものもあった。

鋳造工房において必要な材料は，地金のほかに鋳型の材料となる砂と土，鋳型を焼成し地金を溶解する木炭である。とくに鋳型用の砂土は重要であり，けっこう重量もかさむ原料である。地金や木炭は他の手工業生産の日常生活にも必要で，都市や流通経済の発展した地域では，商品化がすすんだ材料資財ではないかと考えられる[(7)]。しかし，鋳物砂や粘土は，特殊な原料資材で産地が限られており，鋳造にあたって適当な性質をもったものを入手することが，どこにおいても可能だったと考えにくく，工房立地の重要な条件となったものと考えられる［五十川1988 p.53-4］。

2　鋳造工房の生産形態

製品の生産量　　鋳鉄鋳物の生産工房の遺跡では，鍋や羽釜の鋳型の出土量は比較的多い。

鍋や釜の鋳型製作にあたっては，民俗例では，倉吉の「土型」［倉吉市教委1986 p.86］，近江の「クレ型」［滋賀県教委1986 pp.90-1］，天明鋳物の命脈をたもつ佐野の「タネガタ」［佐野市教委1987 p.25］など，あらかじめおおよその形を粘土で形成して酸化焼成して焼き堅めた粗型をつくっておく。この粗型に引型（ひきがた）を使って真土（まね）を塗りつけ，さらに焼成して外型を完成させるのである。こうした方法は，下地と真土がはっきり肌別れすることから容易に判別できる。古代以降の

原型を用いないで，引型を用いて製作する鋳型，すなわち羽釜や鍋など製作工程において普遍的におこなわれていたと推定できる。これは量産に適応した方法であり，同種大量生産を原則とする工房の特徴とみられる。青銅鋳物においても，形態の単純な中世の和鏡の鋳型にみられる［五十川1991a］。しかし，複雑な形態のものは原型を粘土で込めて外型をつくるのが原則であり，それは大量生産にはむかない方法である。

溶　解　炉（図27）　鋳鉄鋳物を生産した工房の溶解炉の形態を復原することはむずかしいが，倉吉の民俗例［倉吉市教委1986］や近世の図面［滋賀県教委1986・1987］に示された「こしき炉」と呼ばれる大型炉が参考になる。これは京都大学教養部構内AP22区の平安時代の鋳造遺構出土例などに比較的類似しており，古代以降，鋳鉄鋳物や青銅の大型鋳物を製作する場合は，炉の構造や形態には根本的な変化のなかったことが判明する［中山1987］。炉は数段にわかれ，材料を投入する上部，木炭や地金が溶解する中段，溶湯がたまる最下部に，大きく分かれる。中段には横から口径20cm程度の羽口が斜め下方向にむかって炉内に突出する。出湯口の形態などは，まだよくわかっていない。これに連結する送風装置も，大型の踏鞴と考えるのが妥当であろう。(8)

一方，小型の青銅鋳物生産工房の場合，坩堝に，「屏風」という取はずしのできる炉壁を組み合わせた小型炉が使用されたことが，近世の鏡作りの秘伝書「御鏡仕用之控書并ニ入用道具覚書」によってわかり［香取1935］，古代・中世の出土例でも確認されている［前川1978 pp.173-86，五十川1991a］。

さて，小型品の大量生産，大型鋳物の生産のいずれの場合にも，その鋳型製作に協業が必要である。鋳型は乾燥や湿潤に対する配慮が必要で短期間に仕上げてしまわねばならないからである。また，大型の溶解炉を稼働させるにはかなりの労働力が一時に必要である。このように鋳鉄鋳物や大型の青銅鋳物の鋳造にあたった工房における生産は，協業による生産体制であり，後述する銅細工ときわめて対照的であるといわなければならない。

銅鉄分業・銅鉄兼業　古代の畿内とその周辺の鋳造遺跡のほとんどは，青銅鋳物の生産工房または臨時の作業場である。たとえば，京都大学教養部構内AP22区で検出の鋳造遺跡は，王朝文化の中心地たる平安京の東辺にあって，大型鋳物を含めた青銅製品を主たる製品として生産する継続的工房と考えられる［五十川・飛野1984 pp.16-22］。富山県や福島県で確認されている鋳鉄鋳物の生産工房においては，青銅鋳物をも積極的に生産した形跡がない。このように，古代においては，青銅鋳物と鋳鉄鋳物とは別々に生産するのが基本であったとみてよいだろう。

しかし，中世前半のものとみられる大阪府美原町～堺市周辺に散在する鋳造関係の遺跡，福岡県太宰府市鉾ノ浦遺跡，埼玉県坂戸市金井遺跡などでは，出土鋳型や鋳造坑の存在などから鉄銅兼業の生産がおこなわれたと想定できる。現状では中世の継続的な工房で，大型鋳物の梵鐘を含んだ青銅鋳物ばかりを生産していたものが明瞭ではない。つまり，中世においては，出吹きをのぞけば，鋳鉄鋳物を生産していた継続的工房で，梵鐘のような青銅鋳物も生産されているものと考えてよい。中世の鋳物師の工房では，鉄銅兼業がきわめてよくみうけられるのである。

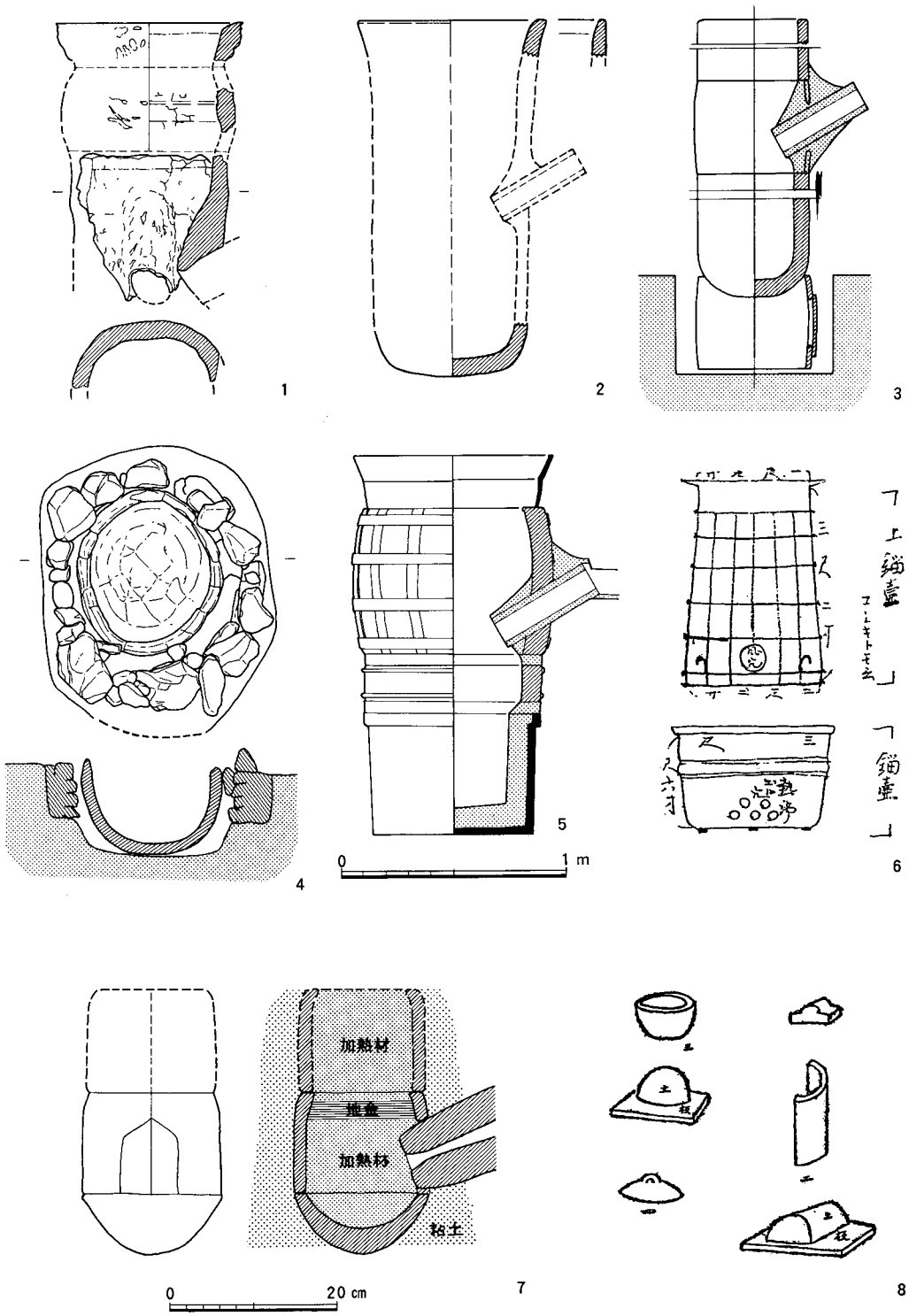


図27　溶　解　炉

1 京都大学教養部構内AP22区　2 太宰府鉾ノ浦遺跡　3 小倉室町遺跡
4 河内日置荘遺跡　5 倉吉民俗例　6 近江辻村大田家
7 前川威洋による小形炉の復原　8 御鏡仕用之控書并ニ入用道具覚書

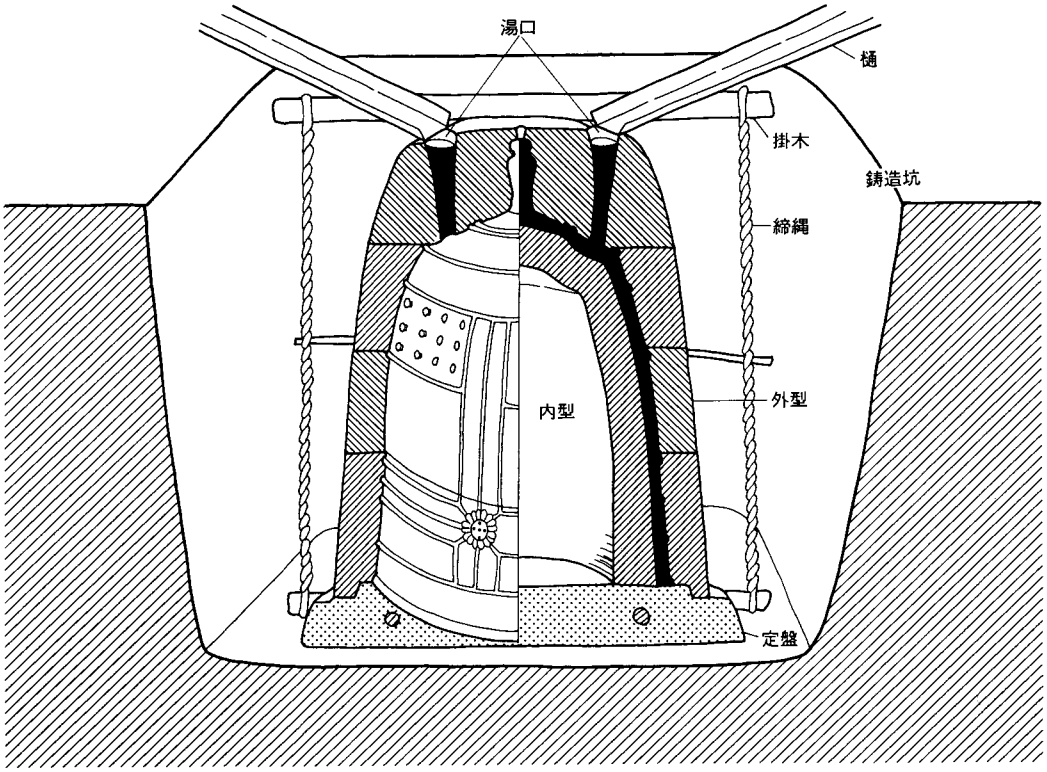
図15―7・8に示した「湯船」と呼ばれる鋳鉄鋳物製品は，京都府北部の丹後に現存し，銘文によって，河内系の鋳物師山川貞清が正応3(1290)年に鋳造したことがわかるが，この山川貞清は，慈光寺鐘（坪井梵鐘番号84)，醍醐寺鐘（同番号1103）の作者である。また，寛元4(1246)年に高野山金剛峰寺大湯屋の鉄釜の鋳造にあたった丹治国則には，太田新次郎蔵鐘（同番号50)，菅山寺鐘（同番号61)，長楽寺鐘（同番号1077）などの作品がある。このように，鋳造の大工(指導者）レベルでの銅鉄兼業があることを確認することができる。また，大型の鉄釜の鋳造には，鋳造坑が使われており，図28に示したように大型鋳物においては，技術的にみて，同様な製作形態をとることが指摘できる［五十川1990 pp.54-6］。

そして，坪井良平がくり返しのべているように，鋳鉄鋳物が生活の根幹に関わる煮沸具の中核をになっている以上，多くの地方において，自立的な鋳物生産であるかぎり，青銅製の美術鋳物の生産よりも，鋳鉄鋳物の生産が鋳物生産の基本となっていたものが多かったと想定する。

ただし，銅鉄兼業といっても，それが同質とはいえず，鋳鉄と青銅の量と質に違いがあり，そのウェイトは，その工人が，鍋釜のような一般需要のみならず，特殊需要をこなせるだけの技術を保持しているかどうかといった条件のみならず，特別な青銅鋳物に関する流通条件がととのっているのかというような外的条件もあったにちがいない。たとえば，梵鐘の需要がそれほどなく，有力な他国の鋳物師の製品の供給が固定しているような所では，その生産が低調にならざるをえないのであって，筑前，周防，畿内とその周辺部，相模，上総などをのぞいた，ほとんどの地域では，中世の初期には，こうした状態であったものと推定される。

さて，すべての中世の青銅鋳物が，銅鉄兼業の鋳造工房において生産されたのではない。京都，鎌倉，太宰府といった社寺が多く，装飾的要素の多い青銅鋳物に対する上流階級の需要があり，豪華な建築生産の頻度の高い伝統的都市には，そうした青銅鋳物専門に製作する工人が多く存在したことは当然予想できる。たとえば，中世京都の南辺の七条界隈では，鏡・刀装具・六器・飾金具などの小型の青銅鋳物を専門に鋳造した工房の遺跡が多数発見されている［京都市埋文研1982，古代学協会1983・1985］。京都大学医学部・病院構内に分布する鋳造遺跡も，そうした青銅鋳物を中心に生産をおこなった白河の鋳造工人たちの遺跡であるとみられる［五十川1991a］。また，中世都市鎌倉の市街地の調査では，屋敷の一郭に場を与えられて，青銅の椀などの製作をおこなったものとみられる臨時の作業場の遺跡も発見されている［斉木1989］。その姿は『歓喜天霊験記絵巻』に描かれているように，邸宅の隅に仮小屋を作り，その中で仏像を製作している情景に重なるものではないかと考えられ，かれらは上層階級の邸宅や寺社造営の作業場に出職することもあったものとみてよい。

以上のように，中世においては，鍍金や彫金などをくわえることが多く，商品価値も高かったと思われる小型の青銅製品を主として生産し，やや都市的な存在形態を示す工人たちと，一般需要の鍋釜などの鋳鉄鋳物を主体としながらも，梵鐘などの青銅製品もてがけた工人の2種が存在したものと考えられる。



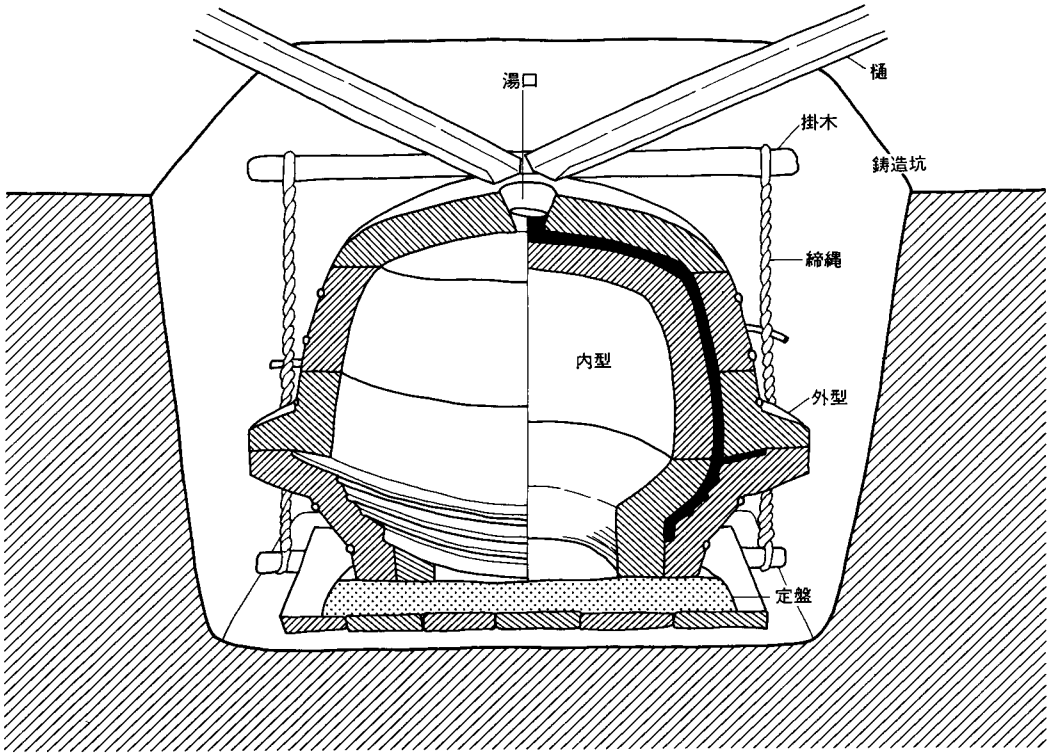


図28　大型鋳物の鋳造情景

（3） 中世の鋳造工人と生産工房

次に，中世の鋳造関係の工人とその工房のあり方について，文献史料，絵画資料，歌謡など，考古学的資料とは異なった観点からも考えることにする。

1 鋳 物 師

中世のもっとも一般的な鋳造工人の呼び名は「鋳物師」である。この鋳物師については，『東北院歌合』に，五番本では「とふ人を待つとせしまにまがねふく吉備の中山跡たへにけり」「月影をもゝ度みがくあらし哉これやますみの鏡なるらむ」，十二番本では「たのめしをまつとせしまにまがねふくきびの中山跡たへにけり」「たたらふむやとの煙に月かげのかすみもはてぬ有明の空」とあり，鋳物師がまがね（真金）すなわち鉄の鋳物ならびに鏡のような青銅鋳物の両者にかかわっていることが示されている。曼殊院本の絵には，武骨そうな工人の足元に羽釜と鉄瓶がころがり，鋳物師は，鋳鉄鋳物を生産の根幹にしていたことを象徴的に示している。『日葡辞書』には，Acaganezaicu は銅，Imoji は鉄と青銅の両者をあつかうとある。絵画資料をみると，鋳物師と明記されたものとして，高松宮家本『東北院職人歌合』には，踏鞴を操作し，溶解炉が火を吹いている情景が描かれている。

以上のように，鋳物師の場合には，踏鞴と甑炉を使用していたことがわかる。踏鞴をともなう大型炉では大量の金属を溶解できるから，これは小型鋳物の大量生産もしくは大型の鋳物の生産が前提になっていることが確かである。また，小型品の大量生産，大型鋳物の生産のいずれの場合にも，その鋳型製作や鋳込みには協業が必要である。これらを総合すれば，鋳物師とは，鋳鉄鋳物や青銅鋳物を，時としてその大型品もあつかい，集団で操業をおこなう工人と想定してよい。このほか，梵鐘の銘文には「冶工」，「冶師」，「鋳冶師」，「冶鋳師」，「鋳工」などの名称もあり，これらは「鋳物師」とほぼ同様のものと考える［西村1978 p.99］。

2 大　　工

「大工」という名称は，番匠，石工など中世の手工業技術集団の長を呼ぶ普遍的名称である。梵鐘や湯釜などの鋳物の銘文には「大工」は頻出し，「鋳物師」と「大工」が併記されたものも多数ある。この大工は，工人集団の協業を前提とする言葉であり，鋳物師にあっては，常に協業を前提とする生産体制をとるものではないかとさきに考えたが，これと密接にからみあってくる。これに対して「銅細工大工」と銘記したものは，文永2(1265)年につくられた東大寺法華堂の花瓶の1例のみである。鋳物師の場合と対照的であるのは，さきに推定した銅細工の生産のありかたを考えれば，理解しやすいと思う。ただし，異なる職種や系統の工人が協業する場合には，最高責任者，統率者として「大工」と称する場合があったと考えられる。

3 銅 細 工

まず，『鶴ケ岡放生会歌合』の六番左に銅細工がみえ，「影しろきめぬきのたちのつかのまも月にのみこそみがくれにけり」と「はなれ行人の心のこはがねをからくりかねてねをのみぞなく」

の二首を詠んでいる。これから，刀装具を製作していること，研磨工程のあること，こはがね(強金）すなわち硬い金属の細工がしがたいということから，金属の曲げ延ばし，あるいはその上に彫金作業も仕事にはいっていると想定できる。また，鎌倉時代の辞書『名語記』には「マニ」という語について，「アキヲフサグクスリ」として「銅細工ノモチイル詞也」と説明がある。この「マニ」はまず真土のことと考えてまちがいあるまい。これから，銅細工は鋳造にかかわる工人であることも確かである。また，京都府綴喜郡井手町多賀の高神社蔵『高神社造営流記』には，文永8(1271)年におこなわれた本殿新造にかかわった工人のなかに，銅細工がみえ，材料代として水銀薄地金用途一貫八百文と古金四百目を支給されている。銅細工が銅の鋳造と塗金の作業をおこなったものと推定できる。また，青銅鋳物の製品で「銅細工」の作と銘記したものには，経筒，神輿，舎利塔，花瓶があり，梵鐘，鰐口，磬にはまったくみとめられない［原田1987］。また，絵画資料では『松崎天神縁起絵巻』に銅細工の工房が描かれているが，いずれも箱鞴を設置し，親方と手伝いの2名程度の工人が作業する仕事場がみえる。

これらから，銅細工とよばれた工人は，比較的小型で装飾性の高い青銅鋳物の製作にあたった工人を指す言葉であり，型ばらし，鋳凌(いざら)いの後，研磨，鍍金，彫金といった多様な後処(あとしょり)理工程を含み，その製作品だけでは完成品にならないような部品の製作も多かったものとみてよい。なお，「銅工」，「金物細工」も「銅細工」とほぼ同様の名称と考える。15世紀ごろから「鈴屋」，「鈴師」という名称が「銅細工」にとってかわるようである［原田1988］。

以上のように，中世の鋳造工人の名称としては，おおきく「鋳物師」と「銅細工」というふたつの性格を異にする名称がある。また，「大工」は「鋳物師」とかかわりの深いものであり，この両者こそ，鋳鉄鋳物生産の担い手であったと考える。

4　労　作　歌

踏鞴を踏む工人たちの姿を考えるうえで，踏鞴(たたら)歌ある，16世紀初頭に成立した民間の流行歌謡集『閑吟集』[9]には，次のようなものが収録されている。

あら美しの塗壺笠や　これこそ河内陣土産　えいとろえいと　えいとろえとな

湯口が割れた　心得て踏まい中踏鞴　えいとろえいと　えいとろえいな

本歌は，製鉄作業の可能性もあるが，河内がうたいこまれており，鋳物師による金属溶解作業にまつわるものと考えた。

また，富山県高岡市に伝わる，鋳物生産の民謡「やがえふ」がある。

河内丹南　鋳物のおこり　やがエフ　今じゃ高岡　金屋町　エー

火の粉吹き出す　あの火のもとにゃ　やがエフ　いとし主さん　タタラ踏む　エー

こうした労作歌の多くは，労働能率を高めるために労作の進行にともなう拍子歌として用いられ，労働に対する刺激として歌われるものであり［町田・浅野1960 p.419］，鋳造に関する労作歌から推定できる鋳込みの工程における鋳造工房の状況は，高松宮家本『東北院職人歌合』の踏鞴を踏む姿を重ね合わせて，明らかに協業による操業状況をありありと想定することができる。

5　中世鋳物師の生産形態

文献史学の網野善彦氏の鋳物師に関する研究は，中世の鋳物生産や商業活動を明らかにした画期的研究である［網野1984 pp.431-538］。そして，鋳物生産に関する数少ない文献史料とともに，偽文書や伝説から，中世の鋳物師の存在形態を浮かび上がらせた手法は，高く評価されるものである［名古屋大学文学部1982］。このなかで中世の鋳物師が各地において，工房の場と材料を与えられて，各地を「遍歴」していたが，中世の半ばに至り，「金屋」と呼ばれる根拠地に定着していったとされている。しかし，以上に述べたように，鋳物師の工房は，その建物や装置といった固定資本のほか，大量の地金・鋳型の土砂・木炭などの材料を必要とし，同種のものを大量生産するものであり，協業が基本であったと考えられる。このため，定住的な根拠地を当初より持ち操業をおこなっていたと考えたほうが，鋳造遺跡の調査成果の実情に合致するのではないかと思う。

また，梵鐘の生産などにみられる出吹きの場合はどうだろうか。製作にあたって主要な役割りを果たしたとみられる他国の有力鋳物師と地方の鋳物師と連名にした銘文を持つものがある。たとえば，茨城県土浦市般若寺鐘（坪井梵鐘番号58）には，大工として鎌倉大仏の製作にかかわったとみられる丹治久友に加えて，千門重延という地方鋳物師とみられる名前が列記されている。また，福島県大沼郡法用寺鐘（坪井梵鐘番号 316）は，大工越後国蒲原郡大崎住妙実と火玉大工が協力して製作したものである［坪井良平1970 p.274］。有力鋳物師といえども，それなりの鋳物生産が定着していないところで，まったく独自に自分たちだけで梵鐘のような大型鋳物の出吹きをおこなうには，要員や材料の手配などが非常に困難であると思う。むしろ，地方の鋳物師とその配下の作業集団の協力のもとに出吹きにあたったとみるのが自然で，それ以外の場合は製品を搬送したと考えるのが実情により近いのではないかと考える。

（4）　古代・中世の鋳物生産の変遷

1　古代の鋳物生産

青銅鋳物　　まず，中央官衙や寺院に所属する鋳造工房については，正倉院文書などに頻出し，東大寺鋳所の可能性をもった大型鋳物鋳造遺構なども見出されている［中井1991］。また，杉山洋は和銅開珎などの貨幣鋳造をおこなった私的工房の存在を指摘している［杉山1990］。但馬国国分寺所属鋳所［日高町教委1981］，太宰府史跡検出の鋳造遺跡群など，地方においても常設的工房が設営されていた。これらの工房は，そのほとんどが，一般需要に直結するような製品ではなく，仏具を中心とする青銅鋳物や貨幣などを製作した工房や作業場の跡とみられ，律令制的生産機構のもとに成立したものが多いとみられる。こうした梵鐘や鏡などの青銅鋳物生産は，10～11世紀の遺品が極端に少なく，鋳造遺跡も少ない［神崎1992］。栄原永遠男によれば，律令国家権力の動揺とともに，採銅や銭貨の鋳造において国家に対する貢納や国家的生産が衰退する一方で，在地的生産が独自の展開をとげていったという［櫛木・栄原1982］。

鋳鉄鋳物　8世紀の寺院資財帳に記載された鋳鉄鋳物の「釜」を，村上英之助は国産とみており［村上1985］，羽釜を中心とする鋳鉄鋳物生産が，奈良時代には開始されていたと考える。これらの鋳鉄鋳物の生産に関する文献史料は皆無であり[10]，律令国家の中央官衙や寺院は，鋳鉄生産に直接関与しなかった可能性がある。ただし，遺品や遺跡の残存状況からみて，その生産量はかぎられたものであったと考えられる。

鋳鉄鋳物の地方的生産は，律令体制の最盛期を過ぎた8世紀末～9世紀ごろに顕在化する。すなわち，この時期に近江・北陸・東北では，鋳鉄鋳物の生産が開花し，羽釜・鍋Ｉをはじめ，梵鐘，獸脚が生産されているのである。滋賀県栗東町中村遺跡例があるため，東国的生産との見方［潮見1989］は検討を要する。また，信濃では鋳造遺跡が発見されておらず，生産の実情が不明であるが，ほぼ同様の時期に羽釜生産が活発化したと考えられる。これらの遺跡の時期と遺構・遺物のあり方がきわめて均質であるため，この生産が各地方で自生的に成立したものとみるよりは，まとまった技術の拡散があったものとみたい。また，その生産は原料の鉄鉱石，砂鉄の産出地と重なり，地金の製鉄・精錬工程に寄生した形態ですすめられた。こうした形態こそ古代的な鋳鉄鋳物生産の特徴であり，中世の鋳造遺跡からみた生産のあり方とは大きく異なっている。

2　中世的鋳物生産の成立

中世の鋳物生産工房　12世紀には，西日本では羽釜に加えて鍋Ａが，東日本では鍋Ｃが出現した。そして，鋳造遺跡の調査成果によって，その生産地が判明し，中世的な鍋釜を生産した多くの自立的鋳物製作集団の存在を，汎日本的に確認することができるようになってきた。また，古代のように製鉄や精錬に関係する工房に寄生した形で，鋳物生産がおこなわれていたのと異なり，鋳型製作工程と溶解工程，鋳込み工程を基本とする鋳造工房が一般的となってきた。これは，鋳物地金が商品として流通することを前提とした生産形態をとるものであるところに特徴があり，これを中世の基本となった鋳物生産形態と考える。そして，それを担ったのは「鋳物師」と呼ばれた人々であった。

こうした生産のあり方が，全国的にほぼ前後して達成されたのは，古代に成立していた各地の鋳物生産工房の自立的発展の結果とみるより，なんらかの外来的インパクトを含んでいたのではなかろうか。その内実については，今後の検討課題としたいが，やや特異なものながら，中国の鋳造技術が流入していることを指摘したい。すなわち，宋の鋳造工人陳和卿とともに東大寺大仏の再興にあたった草部是助が関与したと思われる鋳鉄鋳物には，鋳型を縦方向に分割する方法がとられている（図15―１～３・６）。これは中国流の鋳造技術を日本の工人によってこれが採用されたものであり，14世紀ごろまで存続している［五十川1990］。こうした鋳型製作の技術的側質を含んだ，新しい刺激が流入していた可能性がある。

鋳物師の商業圏　網野善彦の中世の鋳物師の存在形態に関する研究によって，「鉄器以下燈呂供御人」と呼ばれる鋳物師たちは，蔵人所の牒をもって諸国を往反し，鋳物はいうにおよばず，鍛冶製品や穀物などの商業的活動をおこなっていたと考えられている［河音1975，網野1984］。

網野は，鋳物師が諸国往反した物的証拠として，しばしば梵鐘をとりあげ，供御人の核となった河内系鋳物師の梵鐘の販路が広域にわたることを指摘している。さらに，鋳鉄鋳物をこれに加えて検討すべきなのであるが，中世前半の鋳鉄鋳物資料はきわめて少なく，その供給状況を解明するだけの材料を，十分集積することができなかった。しかし，河内系鋳物師集団の活動のほかに，京都，大和の鋳物師集団が活動していたと考える。

行商的遠隔地商業の存立基盤として，商業圏の問題がある。こうした商業圏は，旦那場，得意場，売場，宗教界では霞場などと呼ばれ，ある一定の地域の営業権を確保しているものが多かった。ここで述べている鋳物においても，こうした商域圏が古くから存在したものと考えたほうがよいだろう。

分析化学的研究　さて，こうした需要供給関係をさらに追究するために有効な研究として，分析化学の方面からの検討が進められつつある。佐々木稔・赤沼英男の研究によれば，東北地方北部・北海道出土の鉄鍋には燐(P)が0.1％以上含まれているものが多く，原料鉱石が含燐の磁鉄鉱であると考えられ，他の地域との活発な交易を前提としているという［岩手県立博物館1990 pp.80-1］。また，大分県深水邸・表B遺跡や草戸千軒町遺跡出土鍋の分析によればチタン(Ti)が低い値であるのに対して燐(P)の比率が高く，原材料を国外にもとめるべきであるという［佐々木・村上・赤沼1990，佐々木・赤沼1991］。

この論は，国内産の鉄地金は砂鉄から得られたものであり，製鉄原料として鉄鉱石を想定しないという前提に大きく依拠している。たしかに，明代の初期に，日本が歓迎する商品のなかに鉄鍋があるという記事があり［笹本重巳1952p.42］，後に「広東鍋」と通称されるものが流入していた可能性もあるが，その実態は不明である。また，燐(P)は古木に多く含まれており，古木から作った木炭を使用して製錬・精錬した場合，燐の値が増加するとの見方もあり[(11)]，この原材料に関する推定は検討を要する。また，鋳鉄鋳物は青銅鋳物と異なって，破損すれば回収して地金として再生するサイクルを何度となく繰り返すものであるため，分析値を原料の生産地と地金の回収を前提とする流通圏の両側面から勘案して結論をださなければならない。また，生産と供給が小宇宙的であった地域を選択して，分析してモデルを作るといった作業，中世の良好な製鉄遺跡の資料との比較など，さらに資料蓄積が必要なのではないかと考える。今後，中世的な生産と供給に関する重要な側面を明らかにしうる研究分野として注目される。

3　中世的鋳物生産の展開

中世的煮炊具の展開　中世の半ば14世紀には，西日本では鍋Bという新しい器種が出現し展開してゆく。鍋Aと鍋Cについて，初期のものは鍋Cには屈曲がなく外反する形態のものもみられ，鍋Aとは，異なる系譜の鋳物師や，需要者側の要求があったとみられる。しかし，中世の半ばにいたると，この鍋Aと鍋Cの口縁形態は，よく似かよったものとなる傾向が認められる。これは，東西の鋳物師たちの間に密接な連絡や交流が生じた結果ではあるまいか。

また，中世の後半，15～16世紀の鍋Aと鍋Cを比較すると，鍋Aが底の浅いものに変化するの

に対して，鍋Cは胴部が直立した形態であり，明らかに器形に違いが生じている。また，羽釜の胴部も直立した形態を示す。西日本では，鍋Bの盛行によって，鍋Aは機能のうえで大きな変化が生じていたのではないかとも考えられる。

鎌倉後期～南北朝の鋳物師集団　鎌倉後期～南北朝の中世の半ばの時期には，近世にまで連続しうるような有力な地方鋳物生産の拠点が確立されてゆくことを坪井良平は指摘している。これによると，各地に河内系統とは異なった梵鐘が出現し，その地にやや田舎造りではあるが，梵鐘のような大型青銅鋳物を製作することのできる鋳物師が，その姿をあらわしてくる。中世には，出吹きでなくて，梵鐘ばかりを生産した継続的工房がみられないため，かれらはそれまで鋳鉄鋳物の生産を主体としていた段階から一歩進んで，梵鐘のような美術鋳物の生産ができるような成長をとげていったのであろう。

鋳造遺跡の調査では，埼玉県坂戸市の金井遺跡などのように，これまで鋳物師の本貫地としては，明確に想定されていなかった地に，13～14世紀ごろの生産拠点のあったことが判明し，しかも，そこでは鋳鉄鋳物のみならず，梵鐘などの青銅鋳物の生産もおこなわれていたことが明確となってきた。

畿内の鋳物流通圏　中世半ば以降の畿内とその周辺の生産と供給に関する状況を，社寺に比較的多数伝世している湯釜を素材として考えた（pp.14-26）。その結果，河内・大和・山城などの型式を検出することができた。これは中世後半における畿内とその周辺の鋳鉄鋳物生産の核と供給圏をしめすものと考えた。近畿における中世前半の供給圏については，資料が少なく推定の域を出ない。しかし，大和と山城は東へという方向に注意すべきであろう。銅鉄兼業だからといって，梵鐘の生産・供給システムと一般の鍋釜のそれとを，まったく同一視することはできないが，美濃や信濃の梵鐘が，中世の半ばまでは大和の鋳物師によって独占的に生産されていたことは，坪井良平が指摘しているところであり［坪井良平1970 pp.138-40］，大和下田の鋳物師については，伊藤修の詳細な研究がある［伊藤修1992］。また，山城型の羽釜が美濃にもみられることなどから考えて，中世の前半には，河内・大和・山城という伝統的鋳物生産の製品が，中世後半にくらべて広く供給されたものと推定する。そして，地方鋳物師の勃興と生産技術の向上と生産量の拡大などによって，その供給圏の縮小をよぎなくされてゆき，こうした姿に変貌したものと考える。中世の半ば以降，鋳物師の供給圏が縮小し，一国単位程度におちいるという形態に関しては，文献史料からも指摘されている［網野1984 pp.473-95］。

4　中世から近世へ

土製煮炊具の衰退　地域による鋳鉄鋳物の普及度に関しては，土製煮炊具などとの関係が論じられなければならないが，西日本では16世紀中葉には，土製煮炊具の消失が顕著となってゆく。これは，鋳鉄鋳物の羽釜や鍋が普及したことを示す以外のなにものでもない。耶蘇会の宣教師ルイス・フロイスの『日欧文化比較』(12)の第6章日本人の食事と飲酒の仕方の一節には，「われわれは食事を料理する際に陶製の煮物鍋や丼を使う。日本人は鋳鉄製の鍋や器を使う」とある。これ

から，かれが布教活動をおこなった西日本において，鋳鉄鋳物の煮沸用具の普及が著しいことを推定できる。その裏には，鋳物の生産量の爆発的上昇があったものとみてよい。また，この間に鍋Bの全国的盛行があり，鍋といえば鍋Bをさすものとなった。江戸時代に至って，東日本においても鍋Cが衰退し，鍋Bがこれを代行する変化が生じるにいたったものと推定できる。

都市の工房と地方の工房　中世の後半には，鋳物師が都市へあつまってゆくことが，網野善彦によって指摘されている［網野1984］。また，戦国大名による鋳物師支配も武器の製造のみならず，領国の生産力増強のためであったとみられる［笹本正治1987］。社会総体の生産力の発展と商業活動の高揚が，鋳物生産工房を，鋳物砂や粘土の産地に限定された原料依存的立地のままにおかなかったことはまちがいない。

京都三条釜座においては，応仁・文明の乱のあと，15世紀中葉ごろからめだって梵鐘生産をおこない，著名な鋳造工人を輩出することとなった。また，港町堺では，中世のおわりから近世に至る遺跡において，鋳造工房の遺跡が続々と発見されている。その立地は都市の内部ではなく，市街地から離れた環濠にそった水運を利用しやすい場所に位置している［嶋谷1988］。これは火をとりあつかう職種を都市の中心部に置くことが危険であり，なおかつ材料運搬の便を考慮したものといえよう。

都市に立地した工房において生産をおこなうにあたっては，土地と建物といった固定資本を用意するほかに，直接的な素材として金属地金，金属の溶解のための木炭，鋳型を製作する材料としての砂土を，すべて商品として都市の工房へ搬入しなければならない。ここでは，中世において材料のなかで最も商品化の遅れたとみられる砂や土が，商品化されていることが条件と考えられる。土の商品化については，ほぼ中世の末～近世には明確になることを想定でき［五十川1991b］，都市の鋳物生産工房に供給されている。

近世には，徐々に京都，江戸，大坂といった大都市における鋳物生産が核となった。こうした大都市の鋳物師集団たちは，真継家の支配を受けないものであった［笹本正治1983］。かれらは都市的流通体系のなかに存在したものといえる。また，都市とその周辺における鋳物生産においては，次第に器種別分業も進み，武蔵川口では鋳鉄鋳物，江戸では青銅鋳物がそれぞれ中心に生産されるようになるという［三田村1987 p.13］。

中世の手工業においては，経営と技術・労働が未分化である場合が多く，近世にいたってはじめて経営と技術・労働が分離し，手工業者としての性格がより鮮明になるといわれている。しかし，地方における鋳物師のなかには，そうした道をとらず，中世的な生産と経営の形態をとどめるものもあった。手工業としての技術の高さや，それゆえの地域社会における社会的地位の高さのために，手工業者の指導者が経営者でありつづけ，容易に商業資本との結合や製品別分業が進まなかったといえる。各地の鋳物生産の民俗例として報告されている工房には，こうしたものが多い。

おわりに

青銅鋳物を中心とする鋳物の歴史に対して，むしろ実用の煮炊具である鋳鉄鋳物を検討することによって鋳物生産の，より客観的な姿を描くことができるだろうというのが本研究の出発点であった。しかし，青銅鋳物のもっている内容の豊かさをあらためて痛感したし，またそれを大いに利用することとなった。本稿は，基礎的な鋳鉄鋳物資料を提示し，鋳造遺跡の発掘調査にたずさわったものからみた古代・中世の鋳造工房や工人のありかたを，きわめてあらっぽく描いたにすぎない。とくに，一般の鍋釜の地域性を細かく抽出するには至らず，地方における中世の鋳物生産を詳しく解明することができなかった。また，製鉄遺跡の検討や分析化学の研究など，今後考察すべき課題が山積している。さらに，資料の集成と検討をすすめたいと思う。

本稿は，国立歴史民俗博物館の平成2年度特定研究「日本歴史における地域性の総合的研究中・近世における東国と西国―流通を中心にして―」において，1990年7月5日に「中世の鋳物生産―鋳鉄鋳物を中心にして―」と題して発表した内容を骨子として，その後の新たな資料の追加，論旨の再検討，加筆訂正などの作業を経て作成したものである。

上記研究会においては，故田中稔先生，網野善彦先生，吉岡康暢先生，濱島正士先生をはじめ，浅野春樹，大橋康二，荻野繁春，小野正敏，笹本正治，菅原正明，田島佳也，橋口定志，そして藤沢良祐，横田冬彦の諸氏に，多大の御教示をいただいた。鋳造技術に関しては，日本鋳物協会主催の鋳物の科学技術史研究部会を通じて，石野亨，岡田廣吉，鹿取一男，香取忠彦，窪田蔵郎，葉賀七三男，堤信久，横井時秀，渡辺弘二の諸先生方に手ほどきをうけた。

また，各種の研究会や現地説明会，現地調査などおいて，下記の方々に多大の御教示をたまわった。筆者が考えたことよりも，教えられたことのほうが多い。深甚の謝意を表する。

赤熊浩一，赤羽正春，穴沢義功，飯村　均，伊藤幸司，岩本正二，上野　章，植田啓司，
宇野隆夫，内田俊秀，馬橋泰雄，大矢邦宣，岡崎正雄，小川　望，河野眞知郎，垣内光次郎，
加藤　緑，河瀬正利，神崎　勝，岸本雅敏，工藤清泰，黒田慶一，河野通明，越田賢一郎，
斎木秀雄，坂井秀弥，栄原永遠男，狭川真一，佐々木稔，周　達生，菅井敏美，鋤柄俊夫，
杉山　洋，宗林　正，田嶋明人，高橋圭次，田中正夫，谷口俊治，續伸一郎，寺島文隆，
中井一夫，中尾芳治，中沢　悟，中村俊亀智，中山光夫，能登谷宣康，長谷　進，服部敬史，
原田一敏，原田義範，久田正弘，福島政文，古川知明，庖丁道明，馬淵和雄，三浦謙一，
宮田進一，森　毅，文珠省三，安田　稔，山本　彰，山本信夫，脇田晴子

資料収集にあたっては，風呂研究家の佐藤富美房氏に絶大なる御教示をいただいた。特記してお礼申し上げる。また，資料所在地の教育委員会関係の方々には，資料の所在地，所蔵者，管理者などについての情報をいただき，しばしば現地まで御案内いただいた。また，とくに伝世品を御所蔵の社寺の各位には，心よく神宝・仏宝を拝見させていただき，貴重な資料を調査すること

ができた。お世話になった方々は，多数の各位に及び，その御芳名を列記することができないが，御寛恕願うとともに重ねて心よりお礼を申し上げたい。

資料収集については地域的粗密が著しく，筆者の疎漏な性格によって，まったく未開拓の地域も多い。本稿において取り上げるべき重要な資料を，多数見逃していることは確実である。こうした重要な資料を御存じの節は，ぜひ御教示をたまわりたく，お願い申し上げる次第である。

このほか本稿作成にあたり，製図や原稿整理には，石田由利子，磯谷敦子，中田敬子の諸氏の協力を得た。また，本稿は，平成3年度文部省科学研究費補助金（一般研究(C)萌芽研究）「日本中世の鋳鉄鋳物生産に関する研究」（課題番号03801034）による研究成果を含んでいる。

註

（1） 故天岸正男氏による「鉄釜一覧表」（1982年　未定稿）を篠原良吉氏のご好意で拝見させていただいた。

（2） 北海道埋蔵文化財センターの越田賢一郎氏，小平市教育委員会の小川望氏の御教示による。

（3） 国立歴史民俗博物館考古学研究部の高橋照彦氏の教示を得た。

（4） 三条町釜座の弥藤三が，五石入りの釜一口について，製作時のミスによる穴や隙間があらわれたら，3年以内ならば同じ規格の釜にとりかえる。ただし，使用者本人のミスで焚き割った場合は保証はできないとしている。製品の大きさや保証年限などが知られる貴重な史料である。

（5） 部分的鋳型を本体に塗り込める技法を「イケコミ」という。梵鐘の乳や龍頭などは基本的に，この「イケコミ」によって鋳型を作成する。

（6） 広島県神石郡豊松村鶴岡八幡神社蔵品（寛政12(1800)），鳥取県倉吉市斎江家旧蔵品（天明8(1788)）［倉吉市教委1986 p.145］，愛知県安城市不乗森神社蔵品（宝暦6(1756)），静岡県磐田郡福田町白山神社蔵品（享保7(1722)）などがある。日光東照宮例は，『東照宮宝物志』(1927）によった。

（7） 応永2(1395)年，朽木口関を通して京都に入荷する品物に，くろかね（鉄），あかかね（銅），鍛冶炭がみえる（『山科家礼記』文明12年正月26日の条）。

（8） 福島県の山田A遺跡では，製鉄炉にともなうものであるが，9世紀の踏鞴のきわめて良好な遺構が確認されている。

（9） 浅野建二校注『閑吟集』（岩波文庫）を参照した。

（10） 奈良時代の金属関係工人や工房の文献史料については，大阪市立大学の栄原永遠男氏の御教示を得た。

（11） 東北大学選鉱製錬研究所の岡田廣吉氏の御教示を得た。

（12） 岡田昭雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』（岩波文庫）によった。

参考文献

赤熊浩一　1991　「埼玉県金井遺跡B区の調査」『鋳造遺跡研究会　資料』
網野善彦　1982　『東と西の語る日本の歴史』（そしえて文庫7　そしえて）
　　1984　『日本中世の非農業民と天皇』（岩波書店）
石川県埋蔵文化財保存協会　1980　『石川県埋蔵文化財保存協会年報Ⅰ』
石田茂作　1977　『佛教考古學論攷』五　佛具編（思文閣出版）
石附喜三男　1983　「擦文式文化における東北地方」『角田文衛博士古稀記念　古代学叢論』
石野　亨　1977　『鋳造　技術の源流と歴史』（産業技術センター）
石野亨・小沢良吉・稲川弘明　1984　『鐘をつくる』（『図説日本の文化をさぐる［4］』小峰書店）

五十川伸矢　1988　「鴨東白河の鋳造工房」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』
1990　「中世前半の鋳鉄鋳物」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1987年度』
1991a　「中世白河の鋳造工房」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』
1991b　「土取りの歴史的変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ』
1992　「鋳型作りの道具」『いもの研究』1
五十川伸矢・飛野博文　1984　「京都大学教養部構内AP22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和60年度』
市川信次　1935　「貸鍬」『アチックマンスリー』第4号
伊藤　修　1992　「中世信濃にみられる大和下田鋳物師の研究」『長野県考古学会誌』64号
伊藤幸司　1987　「道修町出土の鋳型とその製作実験」『葦火』7号
岩手県埋蔵文化財センター　1991　『柳之御所跡』
岩手県立博物館編　1990　『北の鉄文化』（開館10周年記念特別企画展解説図録）
上田英吉　1887　「内耳鍋の事に付きて」『東京人類学会報告』3巻第22号
宇田川洋　1969　「鉄鍋考」『貝塚』2
江谷　寛　1976　「湯屋の石風呂と鉄釜」『物質文化』26
大阪府教育委員会　1986　『真福寺遺跡』
1989　『日置荘遺跡（その5）』
大嶋暁雄　1970　「新潟県の貸鍬」『民具マンスリー』第3巻第1号
1977　「新潟県下の貸鍬慣行」『物質文化』28
岡崎譲治　1982　「修験道用具」『仏具大辞典』（鎌倉新書）
小野正敏　1991　「中世陶磁器研究の視点と方法」『考古学と中世史研究』（名著出版）
鹿取一男　1942　『美術鋳物』（三省堂）
香取秀眞　1926　「東北地方に存する「鉢」について」『考古学雑誌』第16巻第1号
1935　「御鏡仕用之控書註記」『考古学雑誌』第30巻第1号
河音能平　1975　「蔵人所の全国鋳物師支配の成立過程―本供御人・廻船鋳物師と土鋳物師―」『美原の歴史』1号
神崎　勝　1992　「梵鐘の鋳造遺構について」『第2回鋳造遺跡研究会　資料』
神田孝平　1887　「内耳鍋の話」『東京人類学会報告』2巻　第14号
菊池徹夫　1980　「擦文文化の終末年代―北日本中世史の理解のために―」『古代探叢―滝口宏先生古稀記念考古学論集―』
1992　「柳之御所跡出土の内耳鍋」『奥州藤原氏と柳之御所跡』（吉川弘文館）
木崎愛吉　1921　『大日本金石史』
北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1991　『室町遺跡』
九州歴史資料館　1975　『大宰府史跡　昭和49年度発掘調査概報』
京都市埋蔵文化財研究所　1982　『平安京左京八条三坊』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告』第6冊）
京都府埋蔵文化財調査研究センター　1982　『梵鐘鋳造遺構の現状とその諸問題』（『第8回研修会資料』）
桐原　健　1973　「釜から鍋へ―古代東国における火処と炊具の変貌―」『信濃』第25巻第11号
櫛木謙周・栄原永遠男　1982　「技術と政治―律令国家と技術―」『技術の社会史』1（有斐閣）
蔵田　蔵　1967　『仏具』（『日本の美術』No.16　至文堂）
倉吉市教育委員会　1986　『倉吉の鋳物師』
越田賢一郎　1984　「北海道の鉄鍋」『物質文化』42
小杉町教育委員会　1988　『椎土遺跡・塚越貝坪遺跡発掘調査概要』
1991　『上野南遺跡群発掘調査報告』
古代学協会　1983　『平安京左京八条三坊二町』（『平安京跡調査報告』第6輯）

1985 『平安京左京八条三坊二町　2次調査』(『平安京跡調査報告』第16輯)
小林　剛　1971 『俊乗坊重源の研究』(有隣堂)
斉木秀男　1989 「街なかの鍛冶屋と鋳物師」『よみがえる中世』3　武家の都鎌倉(平凡社)
埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1985 『国道298号線関係埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅰ　猿貝北・道上・新町口』(『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第52集)
堺市教育委員会　1990 『堺市文化財調査報告書』第51集
佐々木稔・村上和久・赤沼英男　1990 「大分県下の中世遺構から出土した鉄鍋の金属学的解析」『古文化談叢』23
佐々木稔・赤沼英男　1991 「鉄鍋の錆片から探る中世の鉄の交易」『草戸千軒』No.215
笹本重巳　1952 「広東の鉄鍋について—明新代における内外販路—」『東洋史研究』第12巻第2号
笹本正治　1983 「近世の鋳物師と鍛冶」『講座・日本技術の社会史』第5巻　採鉱と冶金(日本評論社)
1987 『戦国大名と職人』(吉川弘文館)
佐藤昭夫　1978 「関東の鉄仏再考」『東京国立博物館紀要』第13号　昭和52年度
1987 『鉄仏』(日本の美術No.252　至文堂)
佐野英山　1924 『国分日本金石年表』
佐野市教育委員会　1987 『佐野の鋳物師』
潮見　浩　1989 「鉄の生産をめぐって」『考古学ジャーナル』No.313
滋賀県教育委員会　1986・1987 『近江の鋳物師』1・2
嶋谷和彦　1988 「近世堺鋳物師の居住地について」『摂河泉文化資料』第40号
篠崎四郎　1941a 「会津の鉄鉢」『星岡』122号
1941b 「奥羽鉄鉢資料」『古代文化』第12巻第2号(『日本金石文の研究』1980　所収)
1949 「鉄鉢雑考」『羽陽文化』第3号
菅原正明　1983 「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』
1988 「根来寺坊院跡出土の鉄釜と五徳」『根来寺坊院跡』
1989 「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集
杉山　洋　1990 「奈良時代の金属器生産」『仏教芸術』190号
鈴木友也　1973 『茶湯釜』(日本の美術 No.89　至文堂)
高橋一夫　1983 「古代の製鉄」『講座・日本の社会史』第5巻　採鉱と冶金(日本評論社)
たたら研究会　1991 『日本古代の鉄生産』(六興出版)
立田三郎　1963 「箱根神社の鉄の大釜」『ミュージアム』144号
巽　三郎　1964 「紀州の古銘資料(四)熊野三山の鉄釜」『熊野路考古』4
巽　三郎・愛甲昇覚　1974 『紀伊國金石文集成』
巽淳一郎　1991 「日本における茶法の開始」『新版　古代の日本』第8巻　近畿Ⅱ
鋳造遺跡研究会　1991 『鋳造遺跡研究会　資料』
1992 『第2回鋳造遺跡研究会　資料』
月夜野町教育委員会　1985 『月夜野古窯跡群』
坪井良平　1939 『慶長末年以前の梵鐘』(『東京考古学会学報』第2冊)
1947 『梵鐘と古文化』
1965 「無情をかこつ鐘の数々」『學燈』62—8
1970 『日本の梵鐘』(角川書店)
1989 「中世鋳物師本貫補遺」『梵鐘と考古学』(ビジネス出版)
坪井正五郎　1887 「内側に耳ある鍋の事に付き神田孝平先生に申す」『東京人類学会報告』2巻第16号
土井　實　1985 『奈良県史』第16巻　金石文編(上)
中井一夫　1991 「東大寺戒壇院東地区の発掘調査」『鋳造遺跡研究会　資料』

中山光夫　1987　「鋳鉄溶解炉の系譜をめぐって」『地域相研究』第17号
名古屋大学文学部国史研究室　1982　『中世鋳物師史料』（法政大学出版局）
新潟県教育庁文化行政課　1990　『新潟県埋蔵文化財調査だより』No. 6
西村強三　1978　「太宰府天満宮蔵の慶長五年在銘鰐口について」『九州歴史資料館研究論集』4
日本鋳物協会編　1976年　『図解鋳物用語辞典』（日刊工業新聞社）
長谷　進　1989　『能登中居鋳物師史料』
秦荘町教育委員会　1979　『軽野正境遺跡発掘調査報告書』
林寺厳州　1986　「小杉町錦打池遺跡について」『大境』第10号
原田一敏　1987　「日本金工師名譜」『東京国立博物館紀要』第22号Ⅱ　昭和61年度
　　1988　「鈴技術と鈴師」『ミュージアム』447号
馬場　脩　1940　「日本北方地域及び附近外地出土の「内耳土鍋」に就いて」『人類学先史学講座』第14巻
日高町教育委員会　1985　『但馬国分寺木簡』
枚方市教育委員会　1991　『枚方の鋳物師』1
福島県教育委員会　1989　『相馬開発関連遺跡調査報告書Ⅰ』（『福島県文化財調査報告書』第215集）
本庄清志　1976　「貸鍋・貸釜制度」『とやま民俗』7
前川威洋　1978　「鋳造関係遺物」『福岡県南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第8集
町田嘉章・浅野健二　1960　『日本民謡集』（岩波文庫）
馬渕和雄　1987　「中世都市鎌倉の煮沸様態」『青山考古』第5号
三浦圭介　1990　「日本海北部における古代後半から中世にかけての土器様相」『シンポジウム土器からみた中世社会の成立』
三田村佳子　1987　「川口鋳物の焼型技法」『埼玉県立民俗文化センター紀要』第4号
村上英之助　1985　「鉄釜―わが国古代鋳鉄に関する史的研究(中)」『たたら研究』第27号
森　毅　1988　「大阪府大坂城跡―大阪市道修町の町屋の調査―」『日本考古学年報』39
山本信夫・狭川真一　1987　「鉾ノ浦遺跡―筑前大宰府鋳物師の解明―」『仏教芸術』174号
和歌山県文化財センター　1980　『根来寺坊院跡』

鋳鉄鋳物資料一覧

1　本資料には，古代から近世はじめごろのものと思われる遺跡出土鋳鉄鋳物・鋳造遺跡出土鋳型・伝世品の鋳鉄鋳物のうち，羽釜，鍋，鉄鉢などの器種を中心に収録した。
2　大きく消費遺跡出土資料，鋳造遺跡出土鋳型，伝世資料の三者にわけ，都府県別に配列した。
3　鋳鉄鋳物は，鍋や釜が主体をなすが，まれに青銅で作られることがある。これらも収録した。
4　消費遺跡出土資料，鋳造遺跡出土鋳型の両者については，遺跡名／遺跡の所在地／出土品／時代／参考文献を列記した。適当な参考文献のないものは，発掘調査をおこなった埋蔵文化財調査機関の名称を添えた。
5　伝世資料に関しては，所蔵者／所在地／名称／年代／「銘文」／参考文献を列記した。

Ⅰ　遺跡出土資料

大　阪　府

楠葉東遺跡	枚方市北楠葉町	羽釜	鎌倉時代
枚方市文化財研究調査会『図録・枚方の遺跡』1988　p.51			
水走遺跡第2次調査	東大阪市水走	鍋B	近世初頭
東大阪市文化財協会『水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告』1992　pp.140-1			
日置荘遺跡	堺市日置荘原寺町	鉄瓶	14,15世紀
大阪府教育委員会『日置荘遺跡(その2)』1988　p.82			
堺環濠都市遺跡 SKT84	堺市宿院町東1丁	羽釜・片口付鍋	17世紀初頭

堺市教育委員会『堺環濠都市遺跡発掘調査報告書』(『堺市文化財調査報告』第34集)

堺環濠都市遺跡 SKT57　堺市小林寺町西1丁　羽釜　17世紀初頭

堺市教育委員会『堺環濠都市遺跡発掘調査報告書SKT57』(『堺市文化財調査報告』第30集) p.62

堺環濠都市遺跡 SKT57　堺市小林寺町西1丁　片口付鍋　17世紀初頭

堺市教育委員会『堺環濠都市遺跡発掘調査報告書SKT57』(『堺市文化財調査報告』第30集)

堺環濠都市遺跡 SKT72　堺市元町　茶釜　17世紀初頭

堺市教育委員会『堺環濠都市遺跡発掘調査報告書—下水道・大仙旅籠町汚水準幹線　SKT80地点—』(『堺市文化財調査報告』第23集) 1985　図14

向泉寺跡遺跡　堺市元町5丁　羽釜または鍋B　17世紀後半

堺市教育委員会「向泉寺跡遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第12集　1983

豊中遺跡　泉大津市北豊中町小寺　鍋A

豊中・古池遺跡調査会『豊中・古池遺跡発掘調査概報　その Ⅲ』1976　p.9, 図版88

北岡遺跡　藤井寺市北岡　羽釜

大阪府教育委員会「北岡遺跡発掘調査概要」『大阪府文化財調査概要　1983年度』1984　p.5

京　都　府

京都大学病院構内遺跡　京都市左京区吉田橋町　羽釜　14～15世紀

京都大学埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』1989　p.23

兵　庫　県

中尾城跡　三田市下相野　鍋B　16世紀前半

兵庫県教育委員会『中尾城跡—近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅺ—』(『兵庫県文化財調査報告書』第67集) 1989　pp.112-4

福西城跡　美方郡村岡町福西　鍋A　15世紀

村岡町史編集委員会『村岡町史』1985

福田片岡遺跡　竜野市誉田町福田　鍋A　14世紀

兵庫県教育委員会調査

和 歌 山 県

根来寺坊院跡　那賀郡岩出町根来　羽釜　15世紀

和歌山県教育委員会『根来寺坊院跡』1988

三　重　県

宮地遺跡　度会郡玉城町岩出　鍋A　15世紀

三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅳ　1990　pp.75-6

福　井　県

一乗谷朝倉氏遺跡　福井市城戸ノ内　鍋B　16世紀

福井県・朝倉氏遺跡調査研究所『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ』1988　第26図

福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅸ』1978

福井県教育委員会・朝倉氏遺跡調査研究所『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡Ⅻ』1981

福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡ⅩⅢ』1982

福井県立朝倉氏遺跡資料館『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡ⅩⅣ』1984

石　川　県

大町・縄手遺跡　鳳至郡穴水町字大町　鍋B　14～16世紀

石川県穴水町教育委員会『西川島能登における中世村落の発掘調査』1987　pp.190, 195

垣内光次郎「中世雑考(1)・(2)」『石川考古』第185・186号　1988

三木だいもん遺跡　加賀市三木町　鍋A

加賀市教育委員会『三木だいもん遺跡』1987　pp.117,120

富　山　県

日の宮遺跡　　小矢部市蓮沼　　鍋B　　15世紀

富山県教育委員会『富山県小矢部市日の宮遺跡発掘調査報告書』1978　p.4

岡　山　県

百間川米田遺跡　　岡山市米田　　鍋B　　15世紀

岡山県教育委員会『百間川米田遺跡３　旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査』（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74）1989　pp.287-8

広　島　県

草戸千軒町遺跡　　福山市草戸町　　鍋A・鍋B　　14～15世紀

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

『草戸千軒町遺跡―第９・10次調査概報―』1973　p.35

『草戸千軒町遺跡―第21～23次発掘調査概要―』1977　p.25

『草戸千軒町遺跡―第24～26次発掘調査概要―』1978　p.22，図版19

『草戸千軒町遺跡―第27次発掘調査概要―』1979　pp.34-6

『草戸千軒町遺跡―第28・29次発掘調査概要―』1980　pp.24,56

『草戸千軒町遺跡―第30次発掘調査概要―』1981　p.31

『草戸千軒町遺跡―第31次発掘調査概要―』1982　p.34

『草戸千軒町遺跡―第34次発掘調査概要―』1985　pp.26-7

『草戸千軒町遺跡―第37～39次発掘調査概要―』1987　p.18

『草戸千軒町遺跡―第42・43次発掘調査概要―』1989　pp.54-5

鞆市街地遺跡　　福山市鞆町　　鍋

福山市教育委員会『鞆―市街地遺跡発掘調査報告―』1980

帝釈雄橋野呂第２号洞窟　比婆郡東城町大字帝釈　　鍋A　　中世後半

広島大学文学部帝釈峡遺跡群発掘調査室『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報Ⅰ』1978　pp.34-6

愛　媛　県

真導廃寺経塚　　西条市中野　　片口付鍋（経筒）　　鎌倉末期

長井数秋『伊予国真導廃寺発掘調査報告書』1977　p.20

福　岡　県

太宰府史跡33次調査　　太宰府市太宰府字月見山　　鍋A　　14世紀

九州歴史資料館『太宰府史跡　昭和49年度発掘調査概報』1975　pp.32-4，図版28

大　分　県

深水邸埋納遺跡　　下毛郡三光村　　鍋A　　14世紀前半～中葉

佐々木稔・村上和久・赤沼英男「大分県下の中世遺構から出土した鉄鍋の金属学的解析」『古文化談叢』第23集　1990　pp.129-31

表B遺跡　　大野郡犬飼町　　鍋A　　14世紀

佐々木稔・村上和久・赤沼英男「大分県下の中世遺構から出土した鉄鍋の金属学的解析」『古文化談叢』第23集　1990　pp.130-1

岐　阜　県

穀見塚前遺跡　　郡上郡八幡町稲成　　鍋C，羽釜

太田成和編『郡上八幡町史』上巻　1960　p.114図68，p.115

長　野　県

屋代馬口遺跡　　更埴市屋代馬口　　羽釜　　11世紀

岡田正彦「長野県更埴市屋代馬口遺跡調査報告」『信濃』第25巻第５号　1970　p.65

岡田正彦「更埴市屋代馬口遺跡と鉄製釜」『長野県考古学会誌』10　1971

涌井　　下水内郡豊田村　　鍋

神田五六「豊田村の古代文化」『豊田村誌』1963

旭城跡二の丸　　松本市朝日字古見旭町　　鍋

小山真夫「信濃国丸子町発見の一葬風」『考古学雑誌』第17巻第7号　1927

布引観音堂付近　　小諸市川辺近　　陣鍋

両角守「諏訪郡丸山発見鍋を被れる一葬風」『信濃考古学会誌』第2年第3輯　1930

丸山遺跡　　岡谷市間下丸山　　鍋B

両角守「諏訪郡丸山発見鍋を被れる一葬風」『信濃考古学会誌』第2年第3輯　1930

よきとぎ遺跡　　駒ケ根市中沢永見山　　鍋C

駒ケ根市教育委員会『よきとぎ遺跡』(『駒ケ根市発掘調査報告』12集)　1982

五ケ城遺跡　　小諸市　　釜

今井泰夫『信濃の鉄』(上)　1983　p.153

丸山遺跡　　上伊那郡辰野町丸山　　羽釜

辰野町史編集委員会『辰野町史』1991

中山千石　　松本市中山千石　　鍋C

長野県埋蔵文化財センター『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4』
(『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』4)1990　p.166

杉ノ木平遺跡　　下伊那郡阿智村杉ノ木平　　鍋C

長野県教育委員会『長野県中央自動車道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書　その1』1971

神奈川県

向荏柄遺跡　　鎌倉市二階堂　　鍋C

向荏柄遺跡発掘調査団『鎌倉市二階堂向荏柄遺跡発掘調査報告書』1985　pp.125-6

千葉地遺跡　　鎌倉市御成町　　鍋C　　14世紀

千葉地遺跡発掘調査団『千葉地遺跡』1982

千葉地東遺跡　　鎌倉市御成町　　鍋

神奈川県立埋蔵文化財センター『千葉地東遺跡』(『県立埋蔵文化財センター調査報告』10)

御成町228番-2地点遺跡　鎌倉市御成町　　鍋C　　14世紀中葉

千葉地東遺跡発掘調査団『御成町228番-2他地点遺跡』1987

東京都

多摩ニュータウン遺跡　　多摩市落合唐木　　鍋Ⅰ　　11世紀

東京都埋蔵文化財センター『多摩ニュータウン遺跡　昭和59年度』第4分冊
(『東京都埋蔵文化財センター調査報告書』第7集)1986　pp.69-70, 73-5

多摩ニュータウン遺跡　　八王子市南大沢　　鍋Ⅰ　　8世紀

東京都埋蔵文化財センター『多摩ニュータウン遺跡　昭和60年度』第3分冊
(『東京都埋蔵文化財センター調査報告書』第8集)1987　p.211

千葉県

鹿島前遺跡　　我孫子市中峠　　鍋B，鍋C　　17世紀

我孫子市教育委員会『鹿島前遺跡　第3次発掘調査概報』(『我孫子市埋蔵文化財小報告』第5集)
1981　pp.33-4

茨城県

畑田遺跡　　鹿島郡鉾田町畑田　　鍋C

茨城県教育財団『鹿島線関係遺跡発掘調査報告書』(『茨城県教育財団文化財調査報告』Ⅴ)

1980　p.302

栃　木　県

下古館遺跡　　下都賀郡国分寺町　　鍋

栃木県文化振興事業団『住宅・都市整備公団・小山・栃木都市計画事業　自治医科大学周辺地区昭和62年埋蔵文化財発掘調査概報』(『栃木県埋蔵文化財調査報告』第96集) 1988　pp.45, 47

群　馬　県

八幡遺跡　　太田市鳥山　　鍋

群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団『太田市八幡遺跡』(『群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書』第105集) 1990　p.102

福　島　県

仙台内前遺跡　　福島市仙台　　鍋C

福島市教育委員会『福島市仙台内前遺跡』1988

宮　城　県

貞山堀　　柴田郡川崎町　　鍋C

神田孝平「内耳鍋の話」『東京人類学会報告』2巻第14号　1887

多賀城跡　　多賀城市浮島　　鍋Ⅰ(脚)

宮城県多賀城跡調査研究所『宮城県多賀城跡調査研究所年報　1980』1981　p.79, 81

岩　手　県

柳之御所跡　　西磐井郡平泉町　　鍋C　　12世紀

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター「柳之御所跡」『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報』(平成元年度分)(『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第147集) 1990

北館遺跡　　鍋C

岩手県教育委員会『東北自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』　1980

山根遺跡　　九戸郡九戸村山根　　鍋C

草間俊一・森本岩太郎(九戸村教育委員会)『岩手県九戸村内耳鉄鍋と人骨』1972

岩手県埋蔵文化財センター『岩手の遺跡』1985　p.353

関沢口遺跡　　二戸郡安代町中佐井　　鍋B　　近世

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター『関沢口遺跡発掘調査報告書』(『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』第59集) 1986　pp.71-2, PL-40

玉貫遺跡　　水沢市佐倉河玉貫　　鍋C　　13世紀

岩手県埋蔵文化財センター『金ケ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書 -Ⅰ- 水沢市玉貫遺跡　金ケ崎町西根遺跡』(『岩手県埋蔵文化財センター調査報告書』第18集) 1986　pp.68, 106

浅岸関根　　盛岡市浅岸関根　　鍋C

草間俊一・森本岩太郎(九戸村教育委員会)『岩手県九戸村内耳鉄鍋と人骨』1972

月折　　二戸市金田一町月折　　鍋C

草間俊一・森本岩太郎(九戸村教育委員会)『岩手県九戸村内耳鉄鍋と人骨』1972

秋　田　県

指七館遺跡　　鹿角郡柴平村小枝　　鍋C

江上波夫・関野雄・桜井清彦『館址』1958　pp.31-2, 第8図

青　森　県

ククリ坂　　青森市浅虫ククリ坂　　鍋C

馬場脩「日本北方地域及び附近外地出土の「内耳土鍋」に就いて」『人類学先史学講座』第14巻　1940

浪岡城跡　　南津軽郡浪岡町　　鍋B・鍋C

浪岡町教育委員会『浪岡城跡Ⅳ』1982　p.89, 158
浪岡町教育委員会『浪岡城跡Ⅷ』1984　p.83-4
浪岡町教育委員会『浪岡城跡Ⅷ』1984　p.112, 116
三浦貞栄治「浪岡城内館出土の伏せ鉄鍋について」『浪岡城跡Ⅷ』1984　p.131-37

尻八館　青森市尻八　鍋B
尻八館調査委員会『尻八館址調査報告書』1981　pp.72-3

根城跡　八戸市大字根城　鍋C
八戸市教育委員会『史跡根城跡発掘調査報告書Ⅴ』　1983　pp.163-5, 237

浜通遺跡　下北郡東通村　鍋C
青森県教育委員会『浜通遺跡』1983　pp.151-2

古館遺跡　南津軽郡碇ケ村　鍋C　11世紀後半～12世紀
青森県教育委員会『碇ケ関村古館遺跡発掘調査報告書』（『青森県埋蔵文化財調査報告書』第54集）1980　pp.478-9, 528-530

熊野堂遺跡　八戸市大字売一字熊野堂　鍋　10世紀？
八戸市教育委員会『熊野堂遺跡発掘調査報告書』（『八戸市埋蔵文化財調査報告書』第32集）1989　pp.73-4

Ⅱ　鋳造遺跡出土鋳型

大　阪　府

真福寺遺跡　南河内郡美原町下黒山　鍋A　13世紀後半
大阪府文化財センター『真福寺遺跡』1986

日置荘遺跡　堺市日置荘原寺町　鍋A
大阪文化財センター『近畿和歌山線・府道松原泉大津線関連第2回発掘速報展図録』1989　pp.8, 36

堺環濠都市遺跡SKT79　堺市車之町東3丁　羽釜　17世紀末～18世紀
堺市教育委員会『堺環濠都市遺跡SKT79発掘調査報告』（『堺市文化財調査報告』第37集）1988　原色図版34

堺環濠都市遺跡SKT153　堺市九間町東3丁　羽釜　16世紀～17世紀
堺市教育委員会『堺環濠都市遺跡発掘調査報告』（『堺市文化財調査報告』第51集）1990

堺環濠都市遺跡SKT261　堺市市之町東6丁　羽釜　16世紀後半
堺市教育委員会『堺市文化財調査概要報告』第9冊　1990

日置荘遺跡　堺市日置荘原寺　鍋　13世紀中～後
堺市教育委員会調査

大坂城跡OS86—20次　大阪市中央区道修町　鍋　15世紀
森毅「大阪府大坂城跡—大阪市道修町の町屋の調査—」『日本考古学年報』39　1988

山之内遺跡YM90—27次　大阪市住吉区山之内元町　鍋　14世紀中葉
大阪市文化財協会調査

奈　良　県

東大寺大仏殿西回廊　奈良市登大路町　鋳型　鎌倉時代
東大寺・橿原考古学研究所『東大寺大仏殿西回廊隣接地の発掘調査』1988

滋　賀　県

矢倉口遺跡　草津市矢倉　容器　8世紀中葉
草津市教育委員会『草津の古代を掘る』（平成元年度遺跡発掘調査報告会資料）1990

中村遺跡　栗田郡栗東町御園　鍋Ⅰ，羽釜，獣脚　10世紀

栗東町文化体育振興事業団『埋蔵文化財発掘調査1989年度年報』1990　p.42, 3

近藤滋「栗東町中村遺跡」『滋賀考古』5　1991

軽野正境遺跡　愛知郡秦荘町軽野　鍋A

秦荘町教育委員会『軽野正境遺跡発掘調査報告書』1979

石　川　県

林遺跡　小松市林町　羽釜，鍋A　11世紀末～12世紀

石川県埋蔵文化財保存協会『石川県埋蔵文化財保存協会年報Ⅰ』1990　p.57

富　山　県

綿打池遺跡　射水郡小杉町上野　羽釜，鍋Ⅰ，獣脚　9世紀

林寺厳州「小杉町綿打池遺跡について」『大境』第10号　1986

関清「富山県における製鉄遺跡研究の現状と課題」『たたら研究会シンポジュウム「北陸の鉄生産」』1986　pp.36-40

上野南ⅡB遺跡　射水郡小杉町上野　羽釜，鍋Ⅰ，獣脚，梵鐘　9世紀後半

小杉町教育委員会『上野南遺跡群発掘調査報告』1991

三熊内山窯跡　富山市三熊　鍋Ⅰ，獣脚　9世紀

古川知明「富山市三熊内山窯跡」『埋文とやま』第35号　1991

福　岡　県

室町遺跡　北九州市小倉北区室町　鍋A　15世紀

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『室町遺跡』1991

鉾ノ浦遺跡　太宰府市鉾ノ浦　鍋A　13世紀後葉

山本信夫・狭川真一「鉾ノ浦遺跡―筑前大宰府鋳物師の解明―」『仏教芸術』174号　1987

新　潟　県

寺前遺跡　三島郡出雲崎町　鍋　12世紀末～13世紀

新潟県教育庁文化行政課『新潟県埋蔵文化財調査だより』No.6　1990　p.1,10

神奈川県

深田遺跡　横浜市栄区上郷町　獣脚　9世紀

横浜市埋蔵文化財調査会『横浜市栄区上郷町上郷深田遺跡発掘概報―都市計画道路舞岡・上郷線敷設に伴う埋蔵文化財調査概報―』1988

千　葉　県

花前遺跡　柏市船戸　鍋，脚

千葉県文化財センター『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅲ―花前Ⅱ-1・花前Ⅱ-2・矢船―』1985

埼　玉　県

台耕地遺跡　大里郡花園町黒田　獣脚　9世紀

埼玉県埋蔵文化財調査事業団『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書―XⅨ―』（『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第33集）1984

大山遺跡　北足立郡伊奈町小室　獣脚

埼玉県教育委員会『埼玉県立がんセンター埋蔵文化財発掘調査報告書　大山』（『埼玉県遺跡発掘調査報告書』第23集）1979

猿貝北遺跡　川口市安行　羽釜

埼玉県埋蔵文化財調査事業団『国道298号線関係埋蔵文化財発掘調査報告書-Ⅰ-　猿貝北・道上・新町口』（『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第52集）1985

金井遺跡B地区　坂戸市大字新堀字金井　鍋　13～14世紀

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

群　馬　県

本宿・郷土遺跡　　富岡市一ノ宮　　鍋C

富岡市教育委員会『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』1981　pp.189-91

福　島　県

向田A遺跡　　相馬郡新地町　　羽釜，鍋Ⅰ，獣脚，梵鐘　9世紀

福島県教育委員会『相馬開発関連遺跡調査報告書Ⅰ』(『福島県文化財調査報告書』第215集) 1989

山田A遺跡　　相馬市大坪　　鍋Ⅰ，獣脚，梵鐘　9世紀

福島県文化センター遺跡調査課

Ⅲ　伝世資料

大　阪　府

流谷八幡神社　　河内長野市天見　　湯釜（府重文）　　延元5(1340)

「河内国錦部郡甲斐　庄山郡流谷八幡宮　御湯釜延元五年□辰卯月十五日□氏□□　勧進　法印賢覚　木工一木□□」

河内長野市役所『河内長野市史』第10巻　別編2　建築・美術工芸　pp.493-5

奈良国立博物館『垂迹美術』1964　p.125

滝畑天神社　　河内長野市滝畑　　湯釜　　長禄4(1460)

「長禄四年三月八日　大梵天王宮御寶前」

河内長野市教育委員会『河内長野をあるく』1983　p.56

壹須賀神社　　南河内郡河南町　　湯釜　　天正17(1589)

「一須賀神社御神前　天正十七年巳丑　片桐加賀守寄進」

大阪市立博物館『大阪の神社展　社宝をたずねて(2)—河内—』1979

三之宮神社　　枚方市穂谷　　湯釜　　永禄元(1558)

「奉鑄献「日郷「屋形宮「御湯釜「本願□□「永禄元□「□□八月」

佐野英山『国分日本金石年表』1924　p.104

京　都　府

上醍醐寺　　京都市山科区醍醐　　湯釜（今亡）　　寿永2(1183)

『醍醐寺新要録』大湯屋篇，『醍醐寺雑事記』上之下

醍醐寺三宝院　　京都市山科区醍醐　　湯釜（今亡）　　寿永2(1183)

『醍醐寺雑事記』上之下

成相寺　　宮津市字成相寺　　湯船（重文）　　正応3(1290)

「丹後国舩木庄「等楽寺湯屋「御鋳大工山河「貞清「正応三年「庚寅卯月日「大願主「物部家重」

財団法人京都文化財保護基金『京都の美術工芸』与謝・丹後編　1983　p.121

智恩寺　　宮津市字文珠　　湯船（重文）　　正応3(1290)

「興法寺「湯船鋳畢「右以大願主并「十万檀那之合「力所鋳舩件如「正應三季庚寅七月廿日「大願主□□□□「大工山河□□「毎月八日阿弥心経「大願主□□□」

財団法人京都文化財保護基金『京都の美術工芸』与謝・丹後編　1983　p.115

水渡神社　　城陽市寺田宮ノ谷　　湯釜（市重文）　　応永32(1425)

「寺田之大自在天神□□順覚　応永三十二年八月廿八日」

川勝政太郎・佐々木利三『京都古銘聚記』1941　pp.165-6

財団法人京都文化財保護基金『京都の美術工芸』南山城編　1983　p.162

春日若宮八幡社　　相楽郡加茂町里　　湯釜　　慶長3(1598)

「城州相楽郡「賀茂荘内「中森大明神「御寶前湯釜「右意趣者「國家安全「庄内富貴「五穀豊饒「諸人快樂「奉鋳処也「慶長三戊戌年「六月吉日」

財団法人京都文化財保護基金『京都の美術工芸』南山城編　1983　p.162

春日神社　相楽郡精華町菱田　湯釜　慶長9(1604)

「山城国綴貴郡菱田庄郡　湯釜　慶長九　甲辰九月吉日惣庄敬白」

精華町史編さん委員会『精華町の寺社と文化財』1986　p.66

妙心寺　京都市右京区花園　湯釜　慶長15(1610)

「正法山「妙心寺「風呂釜「慶長十五「庚戌年「二月吉日「大工藤原朝臣「對馬守國久」

川勝政太郎・佐々木利三『京都古銘聚記』1941　p.348

藤原義一「古建築新抄(16)　浴室」『建築と社会』第23輯第6号　1940　グラビア13

観音寺　相楽郡田辺町普賢寺　湯釜　元和8(1622)

「奉鋳御湯釜上山城綴喜郡普賢寺所　大明神御宝前元和八年壬戌九月吉日惣中」

奈　良　県

東大寺大湯屋　奈良市雑司町　湯船(重文)　建久8(1197)

「敬白「造東大寺大勧進「大和尚南无阿弥陀佛「建久八年歳時丁巳［　］「豊後権守［　］」

国宝建造物東大寺大湯屋・法華堂北門修理工事事務所『国宝建造物東大寺大湯屋・法華堂北門修理工事報告書』1938　p.17・図版23

興福寺大湯屋　奈良市登大路町　羽釜2　鎌倉時代・南北町時代

『奈良六大寺大観』第7巻　興福寺1　1969

奈良県文化財保存事務所『重要文化財興福寺大湯屋・国宝同北円堂修理工事報告書』1966　p.40　挿図第24図・第103図

吉水神社　吉野郡吉野町吉野山　湯釜　康暦元(1379)

「金峯山下御前御湯釜也　康暦元年己未［　］月日勧進」

吉野町史編集委員会『吉野町史』下巻　1972　p.939

水間八幡宮　奈良市水間町　湯釜(今亡)　応永33(1426)

「水間庄八幡宮御湯釜　応永卅三年丙午九月九日」

東山村史編集委員会『東山村史』1961　p.536

天水分神社　吉野郡大淀町畑屋　湯釜　文明11(1479)

「畑屋九頭神之宮御湯釜　文明十一年己亥閏九月二十八日」

大淀町史編集委員会『大淀町史』1973　p.427-8

世尊寺　吉野郡大淀町比曽　湯釜(今亡)　明応5(1496)

「比曽現光寺　明応五年丙辰九月八日」

奈良県『続奈良県金石年表』(『第5回奈良県史跡勝地調査会報告書別冊』)1918　p.74　第3図版

石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』1936　p.357，図版188

戸隠神社　山辺郡山添村桐山　湯釜　永正11(1514)

「切山庄　九頭大明神御宮　小谷弥七願勧進弥　永正十一年甲戌　六月吉日七月」

東山村史編集委員会『東山村史』1957　口絵写真

朝護孫子寺　生駒郡平群町信貴山　湯釜　永正13(1516)

「永正十三年丙子十月十一日　大和國信貴山鎮守之御湯釜」

平群町史編集委員会『平群町史』1976　p.730

奈良国立博物館『垂迹美術』1964　p.126

八柱神社　山辺郡山添村勝原　湯釜　大永4(1524)

「戒重庄長田宮　大永四年甲申十一月十八日干」

豊原村史編纂委員会『豊原村史』1960　p.585-6

宇須多伎比売命神社　高市郡明日香村稲淵　湯釜（今亡）　天文22(1553)

「天文二十二年癸丑二月二十日　施主宮坊主両神主　稲淵宇佐八幡宮御湯釜」

高市郡教育会『奈良県高市郡神社誌』1922　pp.329, 341

生駒神社　生駒市一分町　湯釜　永禄6(1563)

「生馬大宮大明神　永祿六年癸亥十二月吉日」

奈良国立博物館『垂迹美術』1964　pp.126-7

吉野水分神社　吉野郡吉野町子守　湯釜　慶長9(1604)

「金峯山子守社湯釜　豊富朝臣秀頼卿　再興御建立奉行建部内匠頭　慶長九甲辰歳」

吉野町史編集委員会『吉野町史』下巻　1972　p.920-1, 943

藤井直正「豊臣秀頼の社寺造営とその遺構」『大手前女子大学論集』第17号　1983

下市八幡神社　吉野郡下市町下市　湯釜　元和9(1623)

「大和国吉野郡秋野川　八幡宮　元和九年九月吉日」

土井實『奈良県史』第17巻　金石文編(下)　1987

法隆寺西院鐘楼　生駒郡斑鳩町　羽釜2　天正年間

石田茂作編『秘寶』法隆寺・下　1970　pp.249, 374

兵庫県

八葉寺　神崎郡香寺町相坂　羽釜（町重文）　鎌倉時代

佐藤富美房「風呂図鑑　84　薬湯釜」『生活』第55巻2月号　1989

和歌山県

熊野本宮大社　東牟婁郡本宮町　羽釜（重文）　建久9(1198)

「建久九年歳次戊午四月廿二日　熊野山本宮釜　願主　聖奉施入」

巽三郎「紀州の古銘資料（四）熊野三山の鉄釜」『熊野路考古』4　1964

巽三郎・愛甲昇寛『紀伊國金石文集成』1974　p.361

鈴木友也『茶湯釜』(『日本の美術』No.89) 1973　p.21

熊野速玉大社　新宮市新宮　羽釜　元亨2(1322)

「大旦那鎌倉高時武士二十八人　施主　勧進沙門増春　元享二年□□」(『熊野年代記』)による

巽三郎「紀州の古銘資料（四）熊野三山の鉄釜」『熊野路考古』4　1964

巽三郎・愛甲昇寛『紀伊國金石文集成』1974　p.364

那智大社　東牟婁郡那智勝浦町　羽釜　鎌倉時代

「願主信範」

巽三郎「紀州の古銘資料（四）熊野三山の鉄釜」『熊野路考古』4　1964

巽三郎・愛甲昇寛『紀伊國金石文集成』1974　p.366

石田茂作編『秘寶』熊野　1968　pp.221, 363

高野山金剛峰寺　伊都郡高野町　大湯屋釜（今亡）　寛元4(1246)

『高野山文書』第2巻，金剛峯寺文書(2)　1937

高野山金剛峰寺　伊都郡高野町　大湯屋釜（今亡）　文安4(1447)

大日本古文書家わけ1―8『又続宝簡集』百九　大湯屋釜鋳目録并勧進帳

高野山金剛峰寺　伊都郡高野町　大湯屋釜（部分遺存）

藤浪剛一『東西沐浴史話』1931　図28・29

江谷寛「湯屋の石風呂と鉄釜」『物質文化』26　1976　p.66-8

三船神社　那賀郡桃山町神田　湯釜　永正11(1514)

「安楽河之庄御船御寶前御湯釜　永正十一年甲戌九月」

巽三郎・愛甲昇寛『紀伊國金石文集成』1974　p.268

丹生官省符神社　伊都郡九度山町慈尊院　湯釜　永正14(1517)

「神通寺七社大明神　永正四年丑三月十六日」

巽三郎「永正四年銘御湯釜一口」『和歌山県文化財調査報告書』5　1961

巽三郎・愛甲昇寛『紀伊國金石文集成』1974　p.255

鈴木友也『茶湯釜』(『日本の美術』No.89) 1973　p.21

蔵田蔵『仏具』(『日本の美術』No.16) 1967　p.94

奈良国立博物館『垂迹美術』1964　p.231

貴志八幡宮　那賀郡貴志川町　湯釜（今亡）　大永6(1527)

「蓮華宮八幡御湯釜　願主　大畠村孫六大夫　大永六丙戌年十二月十三日」

木崎愛吉『大日本金石史』第3巻　1921

仁井田好古編『紀伊続風土記』天保10年

鞆淵八幡宮　那賀郡粉河町中番　湯釜　永禄6(1563)

「鞆淵八幡宮　永禄六年今月今日　本願辻之坊三百文　かいと九月吉日」

巽三郎・愛甲昇寛『紀伊國金石文集成』1974　p.270

三船神社　那賀郡桃山町神田　湯釜　天正16(1588)

「孫右衛門寄進　天正十六年戊子九月吉日　安楽□□□御八幡」

巽三郎・愛甲昇寛『紀伊國金石文集成』1974　p.275

滋　賀　県

園城寺　大津市園城寺町　鍋A　鎌倉初期

石田茂作編『秘宝』園城寺　1971

大鳥神社　甲賀郡甲賀町鳥居野　湯釜　慶長7(1602)

「江州「甲賀「上郡「大原「本庄「河合「牛頭「天王「御湯「釜也「慶長七年壬寅「八月吉日「願主「祐人□「大工辻村「田中藤左衛角「敬白」

滋賀県甲賀郡教育会『甲賀郡史』下巻　1926　p.653

栗東町歴史民俗博物館『鋳金の美―辻の鋳物師たち―』1991　p.24

三　重　県

伊勢内宮　伊勢市倉田山　神楽釜（青銅・今亡）　天正9(1581)

神宮徴古館農業館『神宮徴古館陳列品図録』1941　pp.35-6，第37図

篠崎四郎「金石文日記(四)」『考古学』第11巻第7号　1940　pp.407-8

敢国神社　上野市一之宮　湯釜（市重文）　慶長3(1598)

「一宮大明神御湯釜ホンクハンイタセイサウ　イ「タテ「マツ「ル「モノ「ナリ　大工エナクヤ七郎ウケトリ大工イタ□下　慶長三戊戌トシ卯月吉日敬白」

大阪市立博物館『伊賀上野の文化財』1980

敢国神社　上野市一之宮　湯釜（市重文）　慶長18(1613)

「慶長十八年癸丑十一月吉日□□上野□□ひしき川善六　伊賀国南宮山富士山大権現之御湯釜常住」

大阪市立博物館『伊賀上野の文化財』1980

佐田(定)神社　多気郡宮川村久豆　湯釜　慶長13(1608)

「勢州定古清宮□□釜　慶長十三年戊申八月吉日　施主木森田元衛□敬白　大工和州万歳之弥九郎」

坪井良平『日本の梵鐘』1970　p.253

岡　山　県

新山寺跡　総社市新山　湯釜　鎌倉初期

永山卯太郎『吉備郡史』1937　pp.922-3

総社市史編さん委員会『総社市史』美術編　1988　pp.246-9

広　島　県

厳島神社　　佐伯郡宮島町　　鍋A（町重文）

佐伯地区文化財保護研究協議会『佐伯郡大竹地区の文化財』1987

山　口　県

阿弥陀寺　　防府市牟礼上坂本　　湯釜　　鎌倉初期

小林剛『俊乗坊重源の研究』1971　p.206

三隅八幡宮　　大津郡三隅町三隅中　　羽釜　　正応元(1288)

「若王子〔　〕正応元年八月三日〔　〕大宮司林〔　〕」

『山口県風土誌』巻第304　金石文誌巻十之上

『防長風土記注進案』第二　三隅村之二

長　野　県

生島足島神社　　上田市下之郷　　湯釜　　天正15(1587)

「下郷「六明神「御湯「釜天「正十五「季丁亥「九月「吉日「日」

信濃史料刊行会『信濃史料』第16巻　1961　p.503

山家神社　　小県郡真田町長真田　　湯釜　　慶長7(1602)

奉寄「進御「湯釜「白山「権現「御寶「前「慶長「七季「壬刀「五月「吉日「関口「角左「衛門「継満「敬白「日」

信濃史料刊行会『信濃史料』第19巻　1962　p.181

静　岡　県

雲金神社　　田方郡天城湯ヶ島町　　羽釜　　鎌倉時代

天城湯ヶ島町教育委員会『天城の史実と伝説』1982　pp.170-1

神奈川県

箱根神社　　足柄下郡箱根町元箱根　　湯釜（重文）　　文永5(1268)

「大筥根山東福寺湯釜一口満山大衆　別當法橋上人隆實　文永五年戊辰十一月十二日」

箱根神社社務所『箱根神社大系』下巻　1935

立田三郎「箱根神社の鉄の大釜」『ミュージアム』144号　1963

箱根神社　　足柄下郡箱根町元箱根　　浴堂釜（重文）　　弘安6(1283)

「奉鋳冶大筥根山東福寺浴堂釜一口　奉爲天長地久御願圓滿殊關東靜謐武家安穏別當法眼和尚位隆實等満山大衆奉鋳冶之状如件　弘安六癸未五月一日大工豆州磯部康廣」

箱根神社社務所『箱根神社大系』下巻　1935

立田三郎「箱根神社の鉄の大釜」『ミュージアム』144号　1963

建長寺　　鎌倉市雪ノ下　　鍋A（青銅）

千　葉　県

香取神宮　　佐原市香取　　供釜　　天文17(1548)

「香取大明神御供釜　天文十七年九月吉日　下野國天命住人伴田藤右衛門尉卜部宣重作」

大場磐雄『官幣大社香取神宮寶物圖鑑』1940　pp.18-9

「香取神宮蔵鉄釜」『なのか』8

栃　木　県

中禅寺　　日光市　　釜（今亡）　　貞和2(1346)

「貞和二年丙戌二月日　聖□阿弥陀佛奉施入」

松平定信『集古十種』

中禅寺　　日光市　　御穀釜（今亡）　　応永23(1416)

「下野国日光中禅寺御穀釜　願主上州佐貫庄藤原朝臣沙弥道慶　応永廿三年丙子二月十八日」
松平定信『集古十種』

釜八幡神社　塩谷郡栗山村湯西川　鍋C
二荒山神社文化部『日光狩詞記』1965　pp.129-30

新　潟　県

弥彦神社　西蒲原郡弥彦村　鉢（重文）　嘉暦元(1326)
「彌彦御鉢「嘉暦元年丙刀「九月五日「奥山庄中條住人「相次郎孝基敬白」
坪井良平「五十二年目の邂逅」『古代研究』12　1977
新潟県教育委員会『新潟県の文化財』1972　p.55
新潟県『新潟県史』資料編24　民俗・文化財3　文化財編　1986　p.264

金峰神社　北蒲原郡黒川村蔵王　鉢（県重文）　元徳3(1331)
「金光山「元徳三年‖旦那「仙阿「八月日」
新潟県『新潟県史』資料編24　民俗・文化財3　文化財編　1986　p.257

福　島　県

羽黒神社　会津若松市東山町湯本　鉢　建武5(1338)
「敬白　大会津郡　奉施入　羽黒権現御鉢　大檀那「藤原氏女　大檀那　平　行信右　志二也悉地成就円満故也　建武五年七月五日」
福島県教育委員会『福島県の金工品』(『福島県文化財調査報告書』第38集）1973　p.92

セゾン美術館　（喜多方市小高木）　鉢（重文）　応安7(1375)
「奥州大「會津郡「小高木村「熊野權「現御鉢「檀那妙淨「應安七甲寅「年十二月」
篠崎四郎「会津の鉄鉢」『星岡』122号　1941

恵日寺　耶麻郡磐梯町大字磐梯　鉢　永享7(1435)
「大才乙卯八月日「永享七年「其外諸「旦那等「現正安「穏後生「善　處「大工（花押）「圓乗「智阿彌「同尼公「(梵字3字)‖慧日寺「金堂鉢「天長地「久御願「圓滿殊「願主正「座主法「印玄然「檀那妙「圓尼公「善光盛「重行重」
笹間佐久「会津本寺恵日寺の鉄鉢」『考古学雑誌』第4巻第5号　1913

心清水八幡宮　河沼郡会津坂下町塔寺　鉢（県重文）　応仁2(1468)
「二田御鉢　三者郡上早丁御願主宗吉　應仁二六月」
福島県『福島県史』第7巻　資料編1　考古遺物編　1964

大鏑矢神社　田村郡船引町船引　鉢（重文）　文明19(1487)
「奉鋳大鏑矢神社鉢　奥州田村庄船引朝国　文明十九天丁未六月日敬白」日矢田根岸大工秀次」
福島県『福島県史』第7巻　資料編1　考古遺物編　1964

飯豊山神社　耶麻郡山都町　鉢（鉄・青銅・今亡）　慶長13(1608)
「慶長十三年八月一日鳥居町カカミ屋木ノ瀬甚右衛門奉鋳飯豊山神社」
山都町史編纂室『山都町史』資料編9　1991

山　形　県

羽黒山正善院　東田川郡羽黒町手向　鍋A
石田茂作編『秘宝』園城寺　1971
佐藤富美房「風呂図鑑　59　羽黒釜」『生活』第2巻12月号　1986

立石寺　山形市山寺字川原町　鉢（市重文）　永享7(1435)
「立石寺「山王權現鉢「永享七年「乙卯四月十七日」
山形市『山形市史』別巻2　生活・文化編　1976

熊野神社　寒河江市平塩字上條　鉢　永禄10(1567)

「ゑもん「さい□□□ん「えうつ「ゑもん志やく□「山さきの□□「九月八日「永禄十年「九まのゝ御八」(左字)

寒河江市教育委員会『寒河江市の文化財』第2集　1965　p.16

熊野神社　寒河江市平塩字上條　鉢　永禄10(1567)

「九まのゝ八「永禄十年「ひのとの卯「九月十八日「山さきの「すけえもん」(左字)

寒河江市教育委員会『寒河江市の文化財』第2集　1965　p.16

熊野神社　寒河江市平塩字上條　鉢　永禄10(1567)

「〔　〕「九月「〔　〕「永〔　〕「九〔　〕」(左字)

寒河江市教育委員会『寒河江市の文化財』第2集　1965　p.16

平泉寺　山形市大字平清水　鉢(市有文)　慶長6(1601)

「敬白「大日御寶前「奉寄進御鉢「藤原朝臣「氏房相模守「諸願成就所「光房「于時慶長六年辛丑閏月廿八日」

山形市『山形県史』別巻2　生活・文化編　1976

慈恩寺　寒河江市大字慈恩寺　鉄鉢　慶長11(1606)

「(梵字)「慶長十一「四月八日‖年丙午「谷地住人」

寒河江市教育委員会『寒河江市の文化財』1963　p.18

日枝神社　鶴岡市山王町　鉄鉢　慶長16(1611)

「奉寄進鉄鉢一双「羽州庄内鶴岡山王「上下社御寶前「慶長拾六年辛亥四月拾四日「少將出羽守義光「大工吉田兵庫「昌時」

羽柴古香「庄内地方に於ける慶長以前の金石文」『歴史地理』14-6　1909

宝光院　山形市八日町　鉢(市有文)　慶長16(1611)

「奉納山王御鉢　源朝臣義光御寄進　慶長拾六年五月吉日」

「大工「吉田兵庫「昌時」

山形市『山形市史』別巻2　生活・文化編　1976

御嶽神社　東田川郡立川町科沢　鉢　慶長16(1611)

「仍而意願如件「右精義旨趣者意願溝通故也「(梵字)　奉納　中臺不動御鉢「御祈所　願主北館大學助利長(花押)「于時慶長十六年辛亥林鐘吉祥日」

篠崎四郎「奥羽鉄鉢資料」『古代文化』第12巻第2号　1941

國井董氏蔵　寒河江市南町　鉄鉢

山形県『山形県史』第2巻　近世編上　1985　pp.1004-5

宮　城　県

大高山神社　柴田郡大河原町金ヶ瀬　鉢　永禄11(1568)

「御神おはちつくる□丸あけ申　永禄十一年つちのへたつの年十月一日」

篠崎四郎「鉄鉢雑考」『羽陽文化』第3号　1949

篠崎四郎「奥羽鉄鉢資料」『古代文化』第12巻第2号　1941

岩　手　県

黒森神社　宮古市山口第5地割　鉄鉢(県有文)　建武元(1334)

「敬白「道徳「八月廿日「建武元年戊甲「黒森「當山」(左字)

太田孝太郎『岩手縣金石史』1932　pp.17-8

太田孝太郎『岩手県金石史』(『岩手県文化財調査報告』第8集)1961　pp.8-9，図版第8

天台寺　二戸郡浄法寺町御山　鉄鉢　慶長8(1603)

「于時「慶長八年癸「卯□□□□□」二百八十□助「□柳□「□□□「□□□「十八日□□□」(左字)

太田孝太郎『岩手縣金石史』1932　pp.66-7
太田孝太郎『岩手県金石史』(『岩手県文化財調査報告』第8集）1961　p.9，図版第9
岩手県立博物館『天台寺　みちのくの霊山　桂泉観音』1987　p.103

（京都大学文学部・埋蔵文化財研究センター　国立歴史民俗博物館共同研究員<1987年度～>）

Cast-iron Articles in the Ancient and Medieval Ages

ISOGAWA Shinya

The author collected data on pots and kettles of the Ancient and Medieval Ages based on the objects excavated from consumption sites, molds excavated from production sites, and articles handed down and owned by temples and shrines; though the number of cast-iron articles left as historical materials is limited because, when broken, they were recycled into ground metal. The objects can be broadly classified into "hagama" or ridged pots, pots A, pots B, pots C, pots I, and iron bowls. The change in shape was examined for each vessel type over the period of the 9th to 16th Centuries. The following changes occurred in the types: In Ancient times, "hagama" or ridged pots and pots I already existed. Throughout the Medieval Age, ridged pots, pots A and C were produced and used, while pots B appeared in the 14th Century, and gradually came to be the main type of pot. Furthermore, the type of vessel used differed according to the area. In the region centering around Kinai, ridged pots, pots A and B were all used together. In various regions of Western Japan outside the Kinai area, pots A and B were the main vessel types. On the other hand, in Eastern Japan, pots C were the main type used for boiling throughout the Medieval Age. While Buddhist tools were made of bronze in Western Japan, here some of them were made of cast iron; iron Buddhas and iron bowls. Ridged pots used for divine water-boiling service and handed down in the Kinki District may be classified according to their ornamentation, shape, inscription, etc. and they were distinguished as the products of casting workers in the countries of Kawachi, Yamato, and Yamashiro. The area of distribution of the products in the latter half of the Medieval Age was more or less limited to the one country.

It was the artisans called "Imonoshi" (casters) in the Midieval Age who produced these cast iron articles. Based on the results of investigations of iron casting sites, it can be supposed that most of these artisans cast both copper and iron. Iron foundries were attached to iron smelting workshops in the Ancient Age. In the Medieval Age, however, many of them were located around the production areas of casting sand. In the latter half of the Medieval Age, some came to be located on the peripheries of cities. Considering the size of fixed capital required for production, it is estimated that few casters ran mobile operations, even if some might have traveled commercially.